# 中国大学生「走近日企・感受日本」訪日団第19回訪日報告書

## 目次


報告書の刊行にあたって ..... 1

中国日本商会社会貢献事業「走近日企・感受日本」寄付金申込社（者）一覧 ..... 2

2016年度中国日本商会役員名簿 ..... 3

2016年度社会貢献委員会委員名簿 ..... 5

2016年度社会貢献委員会ワーキンググループ委員名簿 ..... 6

王占起団長挨拶 ..... 7

主催、共催団体の概要 ..... 8

第19回中国大学生「走近日企・感受日本」訪日団　団員名簿 ..... 9

第19回訪日ホームステイ受け入れリスト ..... 10

第19回中国大学生「走近日企・感受日本」訪日団視察日程 ..... 11

第19回中国大学生「走近日企・感受日本」訪日団視察先出席者リスト ..... 12

＜訪日記録＞

日本航空羽田整備場（11/29）/担当：北京大学 ..... 15

パナソニックエコテクノロジーセンター（11/30）/担当：北京師範大学 ..... 17

大阪大学（11/30）/担当：北京理工大学 ..... 19

トヨタ自動車（元町工場・トヨタ会館）（12/1）/担当：北京語言大学 ..... 23

三菱東京UFJ銀行本店（12/2）/担当：中国農業大学 ..... 26

三井物産本店(12/2)/担当：国際関係学院 ..... 28

イトーヨーカドー配送センター(12/5)/担当：北京大学 ..... 30

日比谷松本楼(12/5)/担当：北京師範大学 ..... 32

中国大使館(12/5)/担当：北京理工大学 ..... 35

法政大学（12/5）/担当：北京語言大学 ..... 37

ホテルニューオータニ（エコセンター）（12/6）/担当：中国農業大学 ..... 39

歓送会(12/6)/担当：国際関係学院 ..... 43

学生たちの感想文から ..... 45

学生たちの観た日本 ..... 65

学生たちの撮った写真 ..... 83

第19回「走近日企・感受日本」中国大学生訪日活動メディア報道リスト（中国語のみ） ..... ❶

# 第19回中国大学生「走近日企・感受日本」
# 訪日団報告書の刊行にあたって

本報告書は、「走近日企・感受日本」事業の第19回訪日団の報告書です。

本事業は、中国人大学生を訪日視察に招待派遣するもので、中国日本商会が会員からの寄付金を原資として、2007年から年に2回実施しており、今回派遣した19回までで29大学592名の学生に参加いただきました。

次代の中国を担う若者を日本に派遣し、日本の実像に触れてもらう機会を提供する本事業は、日本企業への訪問・視察、大学生との意見交流、日本人一般家庭でのホームステイなどの豊富なプログラムを通じて、日中両国民の相互理解の増進に大きく貢献しているものと自負しております。

中国からは、2016年に前年比27.6％増の637万人が日本を訪れています。本事業開始当時とは状況が異なってきておりますが、若い世代の人たちが初めて訪れる日本で見て聞いて感じて得られる感動はその後の人生や日中友好に少なからず好影響をもたらすことは不変であると信じております。

さて、第19回訪日団は、2016年11月29日から12月6日までの8日間、北京大学、北京師範大学、北京理工大学、北京語言大学、中国農業大学および国際関係学院の6大学から選抜した30名で編成され、一同、感動とともに無事終了することができました。

視察企業は、日本航空羽田整備場（東京）、パナソニックエコテクノロジーセンター（兵庫）、トヨタ自動車元町工場（愛知）、三菱東京UFJ銀行（東京）、三井物産（東京）、イトーヨーカ堂配送センター（東京）、ホテルニューオータニエコセンター（東京）の7社。この他、大阪大学、法政大学における日本人大学生との交流、中国大使館の訪問、日比谷松本楼の視察、一泊二日のホームステイ体験など、多彩なプログラムを実施しました。ホームステイの受入れにご協力いただいた企業は14社（アルプス電気、伊藤忠メタルズ、キヤノン、新日鐵住金、住友商事、全日本空輸、テルモ、トヨタ自動車、日中経済協会、日本航空、丸紅、三井物産、三菱ケミカル、三菱商事）にのぼっています。

このように「走近日企・感受日本」事業は、中国日本商会の会員企業の多大なる協力と貢献のもとに実施されています。また、共催団体である中国日本友好協会に全面的なご協力をいただくとともに、訪日団の受入れや本報告書の編集には、一般財団法人日中経済協会に多大なるご尽力をいただいております。加えて、寄付金については、中国側では中国友好和平発展基金会、日本側では公益社団法人企業市民協議会（CBCC）に適切な管理を行っていただいております。改めて、本事業実施にご支援、ご尽力をいただいているすべての関係者に厚くお礼を申しあげます。

本事業が日中相互の国民レベルでの理解促進の一助となり、将来さらに大きな実を結ぶことになれば、これに勝る喜びはありません。

中国日本商会 会長 古場文博

2016年12月

# 中国日本商会社会貢献事業「走近日企・感受日本」
# 寄付金申込社（者）一覧

【寄付金】750万円

| | |
|---|---|
| 1 | アサヒグループホールディングス株式会社 |
| 2 | 伊藤忠（中国）集団有限公司 |
| 3 | 新日鐵住金株式会社 |
| 4 | 住友商事（中国）有限公司 |
| 5 | 全日本空輸株式会社 |
| 6 | 東芝（中国）有限公司 |
| 7 | トヨタ自動車（中国）投資有限公司 |
| 8 | 日本航空株式会社 |
| 9 | 日立（中国）有限公司 |
| 10 | 丸紅株式会社<br>丸紅（中国）有限公司 |
| 11 | 株式会社みずほコーポレート銀行 |
| 12 | 三井物産株式会社 |
| 13 | 三菱商事株式会社 |
| 14 | 三菱電機（中国）有限公司 |
| 15 | 三菱東京 UFJ 銀行（中国）有限公司 |

【寄付金】350万円以上～750万円未満

| | |
|---|---|
| 1 | 日本電気株式会社 |
| 2 | キヤノン（中国）有限公司 |
| 3 | 住友化学投資（中国）有限公司 |
| 4 | ソニー（中国）有限公司 |
| 5 | 三井住友銀行（中国）有限公司 |

【寄付金】100万円以上～350万円未満

| | |
|---|---|
| 1 | あいおいニッセイ同和損保株式会社 |
| 2 | 旭化成株式会社 |
| 3 | 旭硝子（中国）投資有限公司 |
| 4 | アルプス（中国）有限公司 |
| 5 | 岩谷産業株式会社 |
| 6 | 日本たばこ産業株式会社 |
| 7 | 日本郵船株式会社 |
| 8 | NTT グループ |
| 9 | JTB 新紀元国際旅行社有限公司 |
| 10 | JX日鉱日石エネルギー株式会社 |
| 11 | 双日株式会社 |
| 12 | 第一生命株式会社 |
| 13 | 株式会社電通 |
| 14 | 東京海上日動火災保険株式会社<br>東京海上日動火災保険（中国）有限公司 |
| 15 | 日揮株式会社 |
| 16 | 日産（中国）投資有限公司 |
| 17 | 野村證券株式会社 |
| 18 | 三井化学株式会社 |
| 19 | 三井住友海上火災保険株式会社<br>三井住友海上火災保険（中国）有限公司 |
| 20 | 三井住友信託銀行 |
| 21 | 三菱ケミカルホールディングス株式会社 |
| 22 | 三菱重工業（中国）有限公司 |

【寄付金】10万円以上～100万円未満

| | |
|---|---|
| 1 | 株式会社 IHI |
| 2 | アルパイン（中国）有限公司 |
| 3 | 株式会社荏原製作所 |
| 4 | エプソン（中国）有限公司 |
| 5 | 華昇富士達電梯有限公司 |
| 6 | 住金物産株式会社 |
| 7 | 住友生命保険相互会社 |
| 8 | ソニー生命保険株式会社 |
| 9 | 大和証券株式会社 |
| 10 | 宝酒造株式会社 |
| 11 | 電源開発株式会社 |
| 12 | 東工物産貿易有限公司 |
| 13 | 東曹達（上海）貿易有限公司 |
| 14 | トヨタモーターファイナンスチャイナ |
| 15 | 日本生命保険相互会社 |
| 16 | テルモ（中国）投資有限公司 |
| 17 | 日本農林中央金庫有限公司 |
| 18 | ハウス食品株式会社 |
| 19 | 日立高新技術（上海）国際貿易有限公司 |
| 20 | 株式会社ブリヂストン |
| 21 | 北京丘比食品有限公司 |
| 22 | 三井不動産諮詢（北京）有限公司 |
| 23 | 三菱マテリアル株式会社 |
| 24 | 三菱 UFJ 証券有限公司 |
| 25 | 三菱 UFJ 信託銀行 |
| 26 | 明治安田生命保険相互会社 |
| 27 | 明宝工程塑料商貿（上海）有限公司 |
| 28 | 矢崎（中国）投資有限公司 |
| 29 | 理光軟件研究所（北京）有限公司 |
| 30 | 株式会社ワコールホールディングス |
| 31 | 成川　育代（個人会員） |
| 32 | 柳田　洋（個人会員） |

# 2016年度中国日本商会役員一覧

2016年11月度現在

| | 商会役職 | 氏　名 | 会社名 | 役職 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 会長 | 古場　文博 | 住友商事 | 常務執行役員　東アジア総代表 |
| 2 | 副会長 | 杉浦　康誉 | アサヒグループホールディングス | 常務執行役員　中国総代表 |
| 3 | 副会長 | 上田　明裕 | 伊藤忠 | 常務執行役員　東アジア総代表 |
| 4 | 副会長 | 吉田　直樹 | NEC（中国） | 中国総代表　兼　総裁 |
| 5 | 副会長 | 小澤　秀樹 | キヤノン | 専務執行役員　董事長 |
| 6 | 副会長 | 西浦　新 | 新日鐵住金 | 常務執行役員　中国総代表　北京事務所長 |
| 7 | 副会長 | 阿部　信一 | 全日本空輸 | 上席執行役員　中国総代表　北京・天津支店長 |
| 8 | 副会長 | 豊原　正恭 | 東芝 | 執行役上席常務　中国総代表 |
| 9 | 副会長 | 大西　弘致 | トヨタ自動車 | 専務役員　中国本部長 |
| 10 | 副会長 | 篠田　邦彦 | 日中経済協会 | 北京事務所　所長 |
| 11 | 副会長 | 田端　祥久 | 日本貿易振興機構 | 北京事務所　所長 |
| 12 | 副会長 | 鳥居　敬三 | 丸紅 | 常務執行役員　中国総代表 |
| 13 | 副会長 | 網野　良一 | みずほ銀行（中国） | 董事長 |
| 14 | 副会長 | 金森　健 | 三井物産 | 専務執行役員　中国総代表 |
| 15 | 副会長 | 松井　俊一 | 三菱商事 | 常務執行役員　東アジア統括 |
| 16 | 副会長 | 小原　正達 | 三菱東京UFJ銀行（中国） | 副董事長 |
| 17 | 副会長 | 松下　聡 | 三菱電機 | 執行役員　中国総代表 |
| 18 | 理事 | 亀倉　隆志 | 岩谷産業 | 執行役員　中国総代表 |
| 19 | 理事 | 後藤　政郎 | 双日 | 常務執行役員　中国総代表 |
| 20 | 理事 | 椿本　光弘 | 豊田通商 | 執行役員　東アジア総代表 |
| 21 | 理事 | 米原　佳彦 | 阪和商貿 | 総経理 |
| 22 | 理事 | 陶　履徳 | 日鉄住金物産 | 北京事務所　所長 |
| 23 | 理事 | 藤森　洋一 | IHI | 北京代表処　首席代表 |
| 24 | 理事 | 青山　傑 | コスモ石油 | 北京事務所　首席代表 |
| 25 | 理事 | 市川　正人 | クボタ | 北京事務所　首席代表 |
| 26 | 理事 | 池松　克紀 | JFEエンジニアリング（北京） | 総経理 |
| 27 | 理事 | 権田　昌二 | JXエネルギー | 執行役員　中国総代表　北京事務所長 |
| 28 | 理事 | 明石　宏二郎 | 東京電力 | 北京代表処　首席代表 |
| 29 | 理事 | 劉　暁峰 | 日揮 | 北京事務所　所長 |
| 30 | 理事 | 今井　正志 | アルプス(中国) | 総経理 |
| 31 | 理事 | 堂園　憲治 | NTTコミュニケーションズ（中国） | 北京分公司　総経理 |
| 32 | 理事 | 今村　浩 | NTT DOCOMO China通信技術 | 董事長 |
| 33 | 理事 | 稲葉　雅人 | NTTデータ | 執行役員　中国総代表 |
| 34 | 理事 | 後藤　雄次 | 京瓷(中国)商貿 | 董事・総経理 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 35 | 理事 | 高橋　洋 | ソニー（中国） | 董事長＆総裁 |
| 36 | 理事 | 大澤　英俊 | パナソニックチャイナ | 常務役員　中国・北東アジア総代表 |
| 37 | 理事 | 小久保 憲一 | 日立製作所 | 執行役常務　中国総代表 |
| 38 | 理事 | 北野　滋 | 富士通(中国) | 総経理 |
| 39 | 理事 | 桜井　博之 | マルチメディア振興センター | 北京代表処　首席代表 |
| 40 | 理事 | 結城　成貴 | 旭化成 | 北京事務所　首席代表 |
| 41 | 理事 | 纐纈　義隆 | アステラス製薬（中国） | 董事長兼総経理 |
| 42 | 理事 | 中山　泰一 | 資生堂(中国)投資 | 技術部　部長 |
| 43 | 理事 | 西　広信 | 住友化学投資（中国） | 総経理 |
| 44 | 理事 | 陳　偉東 | 日健中外科技(北京) | 総経理 |
| 45 | 理事 | 柴崎　崇紀 | テルモ（中国）投資 | 董事長　総経理 |
| 46 | 理事 | 寺師　啓 | 東レ | 北京事務所　所長 |
| 47 | 理事 | 本田　和秀 | 凸版印刷 | 北京事務所　首席代表 |
| 48 | 理事 | 福山　裕二 | 三井化学 | 常務理事　中国総代表 |
| 49 | 理事 | 瀬川　拓 | 三菱ケミカルホールディングス | 執行役員　中国総代表 |
| 50 | 理事 | 宮崎　守 | あいおいニッセイ同和損害保険 | 駐中国総代表処　中国総代表 |
| 51 | 理事 | 和田　健治 | 日本銀行 | 北京事務所　首席代表 |
| 52 | 理事 | 李　永梅 | 日本生命 | 北京事務所　首席代表 |
| 53 | 理事 | 森下　純也 | 農林中央金庫 | 北京駐在員事務所　首席代表 |
| 54 | 理事 | 宋　暁晨 | みずほ証券 | 北京駐在員事務所　首席代表 |
| 55 | 理事 | 川端　良彦 | 三井住友銀行（中国） | 副社長 |
| 56 | 理事 | 松尾　純利 | 日通国際物流(中国) | 社長 |
| 57 | 理事 | 江利川 宗光 | 日本航空 | 執行役員　中国総代表　北京支店長 |
| 58 | 理事 | 磯田　裕治 | 日本郵船 | 経営委員　中国総代表 |
| 59 | 理事 | 三枝　富博 | イトーヨーカ堂(中国)投資 | 董事長 |
| 60 | 理事 | 高羽　人志 | JTB | 中国総代表　董事長 |
| 61 | 理事 | 大谷　隆一 | 上海博報堂広告有限公司 | 北京分公司　総経理 |
| 62 | 理事 | 谷口　利英 | 全日空国際旅行社 | 総経理 |
| 63 | 理事 | 高橋　修三 | 長富宮中心 | 常務副総経理　ホテル総支配人 |
| 64 | 理事 | 馬場　章正 | 北京電通広告 | 董事　総経理 |
| 65 | 理事 | 戸村　滋見 | 北京発展大厦 | 董事　総経理 |
| 66 | 理事 | 田淵　真次 | 日中経済貿易センター | 専務理事　北京事務所長 |
| 67 | 理事 | 中下　裕三 | 日本国際貿易促進協会 | 北京事務所　中国総代表 |
| 68 | 理事 | 越智　博通 | 北京陸通印刷 | 董事長 |
| 69 | 理事 | 林田　哲也 | 電通テック（北京） | 総経理代理 |
| 70 | 理事 | 小金井　英生 | 世達志不動産投資顧問（上海） | 北京分公司　総経理 |
| 71 | 理事 | 篠原　康人 | 三井住友海上火災保険（中国） | 北京分公司　総経理 |
| 72 | 理事 | 上辻　尚美 | 宝酒造食品有限公司 | 総経理 |
| 73 | 監事 | 三浦　智志 | 監査法人トーマツ | パートナー |
| 74 | 監事 | 越智　幹文 | 国際協力銀行 | 首席代表 |

# 2016年度社会貢献委員会委員名簿

| | 氏　名　（会社名・役職） |
|---|---|
| 社会貢献委員長 | 金森　健　（三井物産　専務執行役員　中国総代表） |
| 委員 | 杉浦　康誉　（アサヒグループホールディングス　常務執行役員　中国総代表） |
| 委員 | 上田　明裕　（伊藤忠　常務執行役員　東アジア総代表） |
| 委員 | 吉田　直樹　（NEC（中国）　中国総代表　兼　総裁） |
| 委員 | 小澤　秀樹　（キヤノン　専務執行役員　董事長） |
| 委員 | 西浦　新　（新日鐵住金　常務執行役員　中国総代表　北京事務所長） |
| 委員 | 古場　文博　（住友商事　常務執行役員　東アジア総代表） |
| 委員 | 阿部　信一　（全日本空輸　上席執行役員　中国総代表　北京・天津支店長） |
| 委員 | 豊原　正恭　（東芝　執行役上席常務　中国総代表） |
| 委員 | 大西　弘致　（トヨタ自動車　専務役員、トヨタ自動車（中国）投資　董事長） |
| 委員 | 篠田　邦彦　（日中経済協会　北京事務所　所長） |
| 委員 | 田端　祥久　（日本貿易振興機構　北京事務所　所長） |
| 委員 | 鳥居　敬三　（丸紅　常務執行役員　中国総代表） |
| 委員 | 網野　良一　（みずほ銀行（中国）　董事長） |
| 委員 | 松井　俊一　（三菱商事　常務執行役員　東アジア統括） |
| 委員 | 小原　正達　（三菱東京UFJ銀行（中国）副董事長） |
| 委員 | 松下　聡　（三菱電機　執行役員　中国総代表） |
| 委員 | 江利川 宗光　（日本航空　執行役員　中国総代表　北京支店長） |
| 委員 | 石毛　二郎　（交通公社新紀元国際旅行社　董事　総経理　） |

# 2016年度社会貢献委員会ワーキンググループ委員名簿

| 会社名 | 氏名 | 役職 |
|---|---|---|
| 【社会貢献委員長】 | 金森　健 | 三井物産　専務執行役員　中国総代表 |
| 【WG座長】 | 篠田　邦彦 | 日中経済協会　所長 |
| アサヒグループホールディングス㈱ | 飯塚　喜美子 | 行政局主任 |
| 伊藤忠(中国)集団有限公司 | 石津　顕太郎 | 中国人事・総務部　部長助理 |
| キヤノン(中国)有限公司 | 小林　宏樹 | コーポレートコミュニケーション戦略本部高級経理 |
| 新日鐵住金諮詢（北京）有限公司 | 濱崎　由基 | 部長 |
| 交通公社新紀元国際旅行社有限公司 | 石毛　二郎 | 董事　総経理 |
| 住友商事(中国)有限公司 | 中原　誠 | 人事部　部長 |
| | 米　健 | 総代表付 |
| 全日本空輸株式会社 | 新井　哲朗 | 銷售部 |
| 東芝（中国）有限公司 | 東口　雄一郎 | 総裁室　室長 |
| トヨタ自動車(中国)投資有限公司 | 栗田　弘毅 | 渉外部主査 |
| (財)日中経済協会 | 澤津　直也 | 副所長 |
| 日本航空株式会社 | 藤井　智之 | 営業部　マネージャー |
| 日本貿易振興機構　北京事務所 | 日向　裕弥 | 副所長 |
| 日立（中国）有限公司 | 宮田　剛志 | 信息資源本部　公共関係部　副総経理 |
| 丸紅㈱　北京事務所 | 松園　大 | 中国総代表助理 |
| | 栗間　涼 | 中国総代表業務助理 |
| みずほ銀行（中国）有限公司　北京支店 | 林　彦伯 | グローバルコーポレート業務部 |
| 三井物産（中国）有限公司 | 佐々木　有司 | 業務部　部長 |
| 三菱商事（中国）商業有限公司 | 李　征 | 企画業務部　副部長 |
| 三菱電機（中国）有限公司 | 原　正英 | 副総経理 |
| 三菱東京UFJ銀行（中国）北京支店 | 張　婷 | 企画部　北京本部 |
| | | |
| 【オブザーバー】 | 菊池　信太郎 | 日本大使館　広報文化センター　書記官 |
| 【オブザーバー】 | 柴戸　ひとみ | 日本大使館　経済部　書記官 |
| | | |
| 【訪日中のアテンド等】 | 横山　勝明 | 日中経済協会　（東京）　参与 |

# 第19回「走近日企・感受日本」中国大学生訪日代表団報告書
# 団長挨拶

11月29日から12月6日にかけて、第19回「走近日企・感受日本」中国大学生訪日代表団一行34名は、日本での8日間の訪問を行いました。中国日本商会、日中経済協会そして訪問先の関係者の多大なるご支援ならびにご協力の下、代表団の訪日活動は無事そして円満に期待通りの成果をあげることができました。

今回の代表団は北京大学、北京師範大学、北京理工大学、北京語言大学、中国農業大学そして国際関係学院の優秀な学生により構成されています。日本滞在期間中、代表団はパナソニック、トヨタ自動車、三井物産、日本航空、三菱東京UFJ銀行、イトーヨーカ堂、ホテルニューオータニなどの有名企業の見学の他、大阪大学や法政大学の学生たちとの交流、中華人民共和国駐日本国大使館への表敬訪問、孫中山氏と梅屋庄吉氏の一生涯の友情の舞台となった松本楼への訪問、さらには日本の一般家庭におけるホームステイ体験など、充実したスケジュールの下で多くの収穫を得ることができました。訪日報告会の席上学生等は、今回の訪日交流を通じて日本企業の進んだ技術や経営理念そして環境保全意識を学び、日本の青年たちと相互理解や友情を深め、日本の伝統文化や一般市民の生活を体験することができ、今後は日中友好事業に積極的に関わり、両国の友好に自分なりの貢献をしたいと述べていました。そして団員らは充実した今回の8日間において、細かな観察や思考を通して様々な角度や側面から認識した日本について日記形式にまとめました。ここに学生等の日本訪問における思いを皆様へご紹介いたします。皆様にはこの報告書から、団員らの収穫や感動といったものを感じ取って頂ければ光栄に存じます。

「走近日企・感受日本」中国大学生訪日プロジェクトは2007年の開始から現在まですでに19回行われ、600名近い中国の大学生が日本での交流を行いました。またこのほど本プロジェクトの第三期提携協定が正式に締結されたことは、改めて日中双方の青少年交流への重視と情熱を示しています。青年は日中友好における未来と希望です。日中両国の青年同士が手を携え、共に両国友好の使者そして架け橋となることを心から願っております。中日友好協会としましても、日本の各界の皆様と共に両国の青少年交流に力を注ぎ、日中友好事業の担い手を絶えず育成していく所存でございます。

最後に、今回の代表団の訪日に際して多大なご支援を頂いた中国日本商会、日中経済協会および各関連企業やホストファミリーの皆様に、心より感謝申し上げます。

第19回「走近日企・感受日本」中国大学生訪日代表団　団長
中日友好協会副秘書長
王占起

# 主催、共催団体の概要

**中国日本商会**

在北京企業の円滑な事業活動を支援するとともに、日中間の経済交流の活発化を通じて、日中友好を促進することを目的として、1980年10月に設立された北京日本商工クラブを前身とする。中華人民共和国国務院令第36号「外国商会管理暫行規定」に基づき認可された外国人商工会議所の第1号として、1991年4月22日に設立された。

会員数は、2016年11月末日現在、市内法人会員605社、市外法人会員57社、個人会員14名、賛助会員13名の合計689社（名）を擁している。

**中国日本友好協会**

1963年に中華全国総工会、中国人民外交学会など19の民間団体によって発起設立された、中国における最も代表的な対日民間友好組織である。創立以来、周恩来総理の提唱の下で積極的に対日友好交流活動を展開し、1972年の中日国交正常化と1978年の中日平和友好条約の締結においては大きな貢献を果たした。政治、経済、文化、スポーツなどの各分野で対日友好交流事業を強力に展開し、健全で安定的な両国関係の推進に重要な役割を果たしている。

**中国友好和平発展基金会**

中国人民対外友好協会の下部組織として、1996年に設立された。各国との友好増進、国際協力の推進、世界平和、共同発展を主旨とし、世界平和と人類の進歩に貢献するため、中国と海外各国との友好事業を始め、文化、教育、医療衛生、環境保護、スポーツ、経済、貧困支援などの数多くの分野で社会的公益活動を行っている。

**一般財団法人日中経済協会**

経済産業省を始めとする日本政府及び日本経済団体連合会他経済界の支援の下に、日本と中国との経済交流促進のため、1972年に設立された。

# 第19回中国大学生「走近日企・感受日本」訪日団団員名簿

| | 姓名 | 性別 | 所属 | | 専攻 |
|---|---|---|---|---|---|
| 団　長 | 王占起 | 男 | 中日友好協会 | 副秘書長 | |
| 団　員 | 陳麗麗 | 女 | 北京大学 | 経済学院 | 資源、環境・産業経済学 |
| 団　員 | 詹文茜 | 女 | 北京大学 | 光華管理学院 | 工商管理 |
| 団　員 | 馮莎莎 | 女 | 北京大学 | 生命科学院 | 生命科学 |
| 団　員 | 楊　涵 | 男 | 北京大学 | 物理学院 | 物理学 |
| 団　員 | 李静昀 | 女 | 北京大学 | 経済学院 | 専門は未定 |
| 団　員 | 陶　悦 | 女 | 北京師範大学 | 外国言語文学学院 | 日本語 |
| 団　員 | 劉　迪 | 女 | 北京師範大学 | 外国言語文学学院 | 日本語 |
| 団　員 | 賀婷雅 | 女 | 北京師範大学 | 外国言語文学学院 | 日本語 |
| 団　員 | 蒲飛宇 | 男 | 北京師範大学 | 外国言語文学学院 | 日本語 |
| 団　員 | 呂家楽 | 男 | 北京師範大学 | 外国言語文学学院 | 日本語 |
| 団　員 | 居絲薇 | 女 | 北京理工大学 | 機械・車輌学院 | 機械工程（英文コース） |
| 団　員 | 王　韞 | 女 | 北京理工大学 | 情報・電子学院 | 電子科学・技術 |
| 団　員 | 呉玥瑩 | 女 | 北京理工大学 | 情報・電子学院 | 電子科学・技術（英文コース） |
| 団　員 | 張晨曦 | 男 | 北京理工大学 | 自動化学院 | 自動化 |
| 団　員 | 趙家樑 | 男 | 北京理工大学 | 自動化学院 | 自動化（英文コース） |
| 団　員 | 呉　継 | 男 | 北京語言大学 | 東方言語文化学院 | 日本語 |
| 団　員 | 閆良博 | 男 | 北京語言大学 | 東方言語文化学院日語系 | 日本語（日・英相互） |
| 団　員 | 沈　丹 | 女 | 北京語言大学 | 東方言語文化学院 | 日英相互 |
| 団　員 | 韓璐璐 | 女 | 北京語言大学 | 東方言語文化学院 | 日本語 |
| 団　員 | 陳婧怡 | 女 | 北京語言大学 | 東方言語文化学院日語系 | 日本語 |
| 団　員 | 呉延淞 | 男 | 中国農業大学 | 情報・電気工程学院 | 電気工程・自動化 |
| 団　員 | 張洋中正 | 男 | 中国農業大学 | 食品科学・栄養工程学院 | 食品科学・工程 |
| 団　員 | 高　潔 | 女 | 中国農業大学 | 情報・電気工程学院 | 電気工程・自動化 |
| 団　員 | 彭興偉 | 男 | 中国農業大学 | 人文・発展学院 | 英語翻訳 |
| 団　員 | 雷　超 | 男 | 中国農業大学 | 水利・土木工程学院 | 農業水利工程 |
| 団　員 | 王　蓉 | 女 | 国際関系学院 | 外国語学院 | 日本語 |
| 団　員 | 杜佳蓉 | 女 | 国際関系学院 | 外国語学院 | 日本語 |
| 団　員 | 曾粤儀 | 女 | 国際関系学院 | 外国語学院 | 日本語 |
| 団　員 | 倪話秋 | 女 | 国際関系学院 | 外国語学院 | 日本語 |
| 団　員 | 寇家瑋 | 男 | 国際関系学院 | 外国語学院 | 日本語 |
| 団員(引率教員) | 劉　芸 | 女 | 北京語言大学 | 東方言語文化学院 補習指導員 | |
| 団員(引率教員) | 劉　暢 | 女 | 北京理工大学 | 職員 | |
| 団員(事務局) | 王　磊 | 男 | 中日友好協会 | 都市経済交流部 職員 | |

# 第19回中国大学生「走近日企・感受日本」訪日団視察日程

| 日次 | 日　付 | 日　程 | 宿　泊 |
|---|---|---|---|
| 1 | 11/29<br>（火） | 国際線（JL20便）にて北京より羽田空港へ<br>【北京　8:25→羽田　12:45　JL20】<br>13:50　貸切バスで移動<br>**14:00～15:30　●企業訪問 ①　ＪＡＬ整備工場見学**<br>16:30　　羽田空港発　　JAL127便にて大阪へ移動<br>17:40　　伊丹空港到着<br>到着後、バスにて大阪市内で夕食その後ホテルへ | ニューオータニ大阪<br>大阪府大阪市中央区<br>城見1－4－1<br>TEL: 06-6941-1111 |
| 2 | 11/30<br>（水） | ホテル8:00発<br>**9:15～11:30 ●企業訪問 ②（関西地区）パナソニックエコテクノロジーセンター**<br>昼食:吹田<br>**14:00～19:30 ◎大学交流　① 大阪大学(含む懇親会)**<br>**21:03　新大阪→21:53名古屋　のぞみ６２（新幹線体験）**<br>ホテル22:50着 | 名古屋東急ホテル<br>愛知県名古屋市中区<br>栄4－6－8<br>TEL: 052-251-2411 |
| 3 | 12/1<br>（木） | ホテル8:15発<br>**9:00～13:30　●企業訪問 ③ トヨタ自動車（元町工場・トヨタ会館）（含む昼食）**<br>午後　箱根へ<br>ホテル18:00頃着 | 箱根湯本温泉<br>ホテル天成園<br>神奈川県足柄下郡箱根町湯本682<br>TEL: 0460-83-8511 |
| 4 | 12/2<br>（金） | ホテル9:00発<br>東京へ移動<br>昼食:銀座<br>**14:00～15:30　●企業訪問 ④ 三菱東京UFJ銀行**<br>**16:00～19:30　●企業訪問 ⑤ 三井物産（含む懇親会）**<br>ホテル20:30着 | 東京<br>ホテルニューオータニ<br>東京都千代田区紀尾井町4－1<br>TEL: 03-3265-1111 |
| 5 | 12/3<br>（土） | 9:30～10:00　引渡し<br>終日　ホームステイ | ホームステイ |
| 6 | 12/4<br>（日） | 夕方までホームスティ<br>16:00　ホテル再集合、東京（お台場）自由行動<br>20:00ホテル | 東京<br>ホテルニューオータニ |
| 7 | 12/5<br>（月） | ホテル8:15発<br>**9:00～11:00　●企業訪問 ⑥ イトーヨーカドー配送センター（浪速運送）**<br>12:00～13:30 昼食:　**★ソフト文化等視察①日比谷松本楼**<br>**14:15～15:30　●中国大使館訪問**<br>**16:30～19:30　◎大学交流 ② 法政大学（含む懇親会）**<br>ホテル20:00着 | 東京<br>ホテルニューオータニ |
| 8 | 12/6<br>（火） | **10:00～11:30　●企業訪問 ⑦ ホテルニューオータニ　エコ視察**<br>**12:00～14:00　歓送会（ホテルニューオータニ）**<br>14:15　ホテル発　羽田空港へ移動<br>15:00　羽田空港着<br>17:20　羽田空港発（JL25便）<br>【羽田　17:20　→　北京　20:30　　JL25　】<br>20:30　北京首都空港着 | |

# 第19回中国大学生「走近日企・感受日本」訪日団視察先出席者リスト

**1. 日本航空（11月29日）**

| | | |
|---|---|---|
| 加藤智也 | コーポレートブランド推進部<br>シチズンシップグループ | |
| 杉原久乃 | 同上 | |
| 隋千秋 | 本店　顧客販売部第1グループ | アカウントマネジャー |
| 楊旭 | 北京支店　銷售部　総経理 | |
| 井上鉄男 | JALサンライト | |

**2. パナソニックエコテクノロジーセンター（11月30日）**

| | | |
|---|---|---|
| 池本義寛 | 企画・管理部（兼）技術担当 | 取締役部長 |
| 大竹悟 | 企画・管理部 | 法規・見学担当課長 |
| 藤本尚子 | 企画・管理部 | 企画担当 |

**3. 大阪大学（11月30日）**

| | | |
|---|---|---|
| 有川友子 | 国際教育交流センター | センター長（教授） |
| 大谷順子 | 東アジアセンター | センター長（教授） |
| 遠山裕子 | 国際部国際学生交流課 | 課長 |
| 岡本雄一 | 国際部国際学生交流課学生交流<br>企画係 | 係長 |
| 内山夕貴子 | 同上 | 係員 |

（大阪大学の学生（院生を含む）25名）

| | | |
|---|---|---|
| 河仲準二 | レーザーエネルギー学研究センター | 准教授 |
| 時田茂樹 | 同上 | 講師 |
| 清水俊彦 | 同上 | 助教 |
| 李朝陽 | 同上 | 特任助教（常勤） |

吉田浄　　コーディネーター

**4. トヨタ自動車（12月1日）**

| | | |
|---|---|---|
| 布垣直昭 | 社会貢献推進部 | 部長 |
| 櫻井茂正 | 社会貢献推進部　グローバル企画室 | 室長・担当部長 |
| 隅田航一朗 | 社会貢献推進部　グローバル企画室<br>海外コーディネーショングループ | |
| 津國佳代 | 同上 | |
| 佐野太一 | 中国部　営業室<br>発準マーケティンググループ | 主幹 |

| | | |
|---|---|---|
| 尾形拓美 | 社会貢献推進部<br>コミュニティリレーション室<br>トヨタ会館受入・総括G | |

**5. 三菱東京UFJ銀行（12月2日）**

| | | |
|---|---|---|
| 長谷川貴史 | 東アジア本部　東アジア企画部 | 部長 |
| 原義信 | 東アジア本部　東アジア企画部<br>拠点戦略グループ | 次長 |
| 武進 | 同上 | 調査役 |
| 山口恵美 | 同上 | |
| 田辺智彦 | 東アジア本部　中国室 | 副室長 |
| 野口雄三 | 同上 | 副室長 |
| 長瀬孫洋 | 本店　総務課 | 支店長代理 |

**6. 三井物産（12月2日）**

| | | |
|---|---|---|
| 加藤広之 | | 代表取締役　副社長執行役員 |
| 小野元生 | 人事総務部 | 常務執行役員　人事総務部長 |
| 平塚眞二 | 三井物産戦略研究所 | 研究フェロー |
| 福家哲哉 | 経営企画部　海外室 | 次長 |
| 沈玲佳 | 経営企画部　海外室 | マネージャー |
| 菊地美佐子 | 環境・社会貢献部 | 部長 |
| 寺澤明子 | 環境・社会貢献部　社会貢献室 | 室長 |
| 吉川里香 | 同上 | マネージャー |
| 門平隆子 | 同上 | |

（ホームステイ受け入れ社員他16名）

**7. イトーヨーカ堂、浪速運送（12月5日）**

**イトーヨーカ堂**

| | | |
|---|---|---|
| 飯原正浩 | 物流室 | 執行役員、室長 |
| 鵜川淳 | 物流企画開発部 | |
| 斉藤靖彦 | 物流運営管理部　共配管理センター | 副センター長 |
| 藤田功司 | 物流運営管理部　共配管理センター | |

**浪速運送**

| | | |
|---|---|---|
| 長谷川律夫 | ASEAN事業統括部、ASEAN日本事業部担当 | 常務取締役 |
| 鈴木一臣 | ASEAN事業統括部、ASEAN日本事業部 | マネージャー |
| 宮城秀樹 | 基本三原則推進部 | 部長 |
| 小島夏紀 | 東日本営業部 | マネージャー |
| 山本剛経 | 同上 | |

**8. 日比谷松本楼（12月5日）**

| | | |
|---|---|---|
| 小坂文乃 | 代表取締役 | 副社長 |
| 今井康雄 | 営業部 | 部長 |

**9. 中国大使館（12月5日）**

| | | |
|---|---|---|
| 汪婉 | 大使夫人　友好交流部 | 参事官 |
| 薛剣 | 政治部 | 公使参事官 |
| 潘林 | 友好交流部 | 二等書記官 |
| 李巧 | 経済商務処 | アタッシェ |

**10. 法政大学（12月5日）**

| | | |
|---|---|---|
| 小口雅史 | 国際日本学研究所所長・文学部 | 教授 |
| 王敏 | 国際日本学研究所 | 教授 |
| 佐藤元紀 | 同上 | 課長 |
| 小澤一公 | 同上 | |
| 鈴村裕輔 | 同上 | |
| 松村薫 | 同上 | |
| 趙宏偉 | キャリアデザイン学部 | 教授 |
| 相沢瑠璃子 | | 卒業生 |
| 周曙光 | | 卒業生 |
| 費姝曼 | | 卒業生 |

| | |
|---|---|
| 斉藤健一 | コーディネーター |
| 吉田浄 | 同上 |

**11. ホテルニューオータニ（12月6日）**

| | | |
|---|---|---|
| 山川剛 | 関西営業所 | 所長 |
| 宮本賢治 | ホテルニューオータニ大阪 | 副総支配人 |
| 壷井宏二 | 同上 | 支配人 |
| 田島浩一 | 宿泊営業部　国内営業課 | アシスタントディレクター |
| 山田聡 | 料飲営業部　料飲営業一課 | シニアセールスマネージャー |
| 服部哲 | バンケットサービス | 総括マネージャー |
| 田中正志 | ルームディビジョンフロントオフィス課 | 副支配人 |
| 山本正巳 | フアシリティーマネージメント部 | マネージャー |
| 三浦光昌 | 同上 | 係長 |

# 卓越したフライト体験の根源

北京大学学生代表

**見学日時：2016年11月29日（火）14:00-15:30**
**見学場所：JAL日本航空株式会社**

**見学概要**

訪日団のメンバーは JAL の整備工場を見学し、そこでは整備中のボーイング 777 型機 2 機とすでに引退し外国へ売却予定の旅客機 1 機を目にした。JAL の担当者からは航空機の整備における厳しい要件、そして航空機の離着陸におけるコントロールについての紹介があり、私たちは空港における秩序立ったコントロール手段について体験することができた。

**知っていますか？**

1. JAL は世界で最も時間に正確

私たちは今回三度飛行機に乗ったが、東京と北京間の国際線、東京から大阪までの国内線、いずれも定刻通りに離陸そして到着した。中国国内の大部分の航空会社では 90% 以上の正確率と自称しているが定刻より遅れる場合が多く、私たちはこうした正確さにとても感服した。また日本航空は、アメリカ FlightStats 社が 2016 年 1 月に行った 2015 年度における世界の航空会社の定時到着率評価において 1 位となり、世界で最も時間に正確な航空会社となった。

日本航空はイレギュラー時の応急メカニズムが整っており、緊急または特殊な状況が発生した場合、予備機の手配やスタッフが速やかに対応している。

これ以外にも、日本航空は遅延変更時においても体制が整っている。ひとたびフライトが遅延または変更となった場合、航空会社はウェブサイトやチケット購入ネットワークを通じ、最短時間で搭乗者の携帯電話へメッセージにより通知を行っている。

2. JAL は 1974 年に中国への航空路線を開通した

1974 年日本航空は他に先駆け、中国本土への航空路線を開通した。日中国交正常化の 2 年後の 1974 年 9 月 29 日、日本と中国を結ぶ航空路線が開通された。その後 40 数年間、日本航空は常に日中両国間における人と物の往来を支え続け、また経済・文化交流における架け橋の役割を担い、両国間における豊富な航空路線ネットワークを有している。

また、北京にある北京新世紀日航飯店はニッコー・ホテルズ・インターナショナルのメンバーである。

2008 年、日本航空は中国民航安全学院と提携プロジェクトを展開した。日本航空は中国東方航空、海南航空とコードシェア提携を展開し、2008 年時点で中国への 21 の航空路線を開通し、毎週 270 便以上が運航している。そして 2012 年時点では中国の北京、天津、大連、上海、広州、香港、台湾等の主要都市や地区へ定期便を運航している。

**感想**

1. 卓越したサービス

定刻遵守をベースとした JAL のサービスの素晴らしさは、中国国内の航空会社を遥かに上回っている。初日に東京へ向かう際、搭乗口を入るとすぐに数名の日本航空のスタッフが「日本へようこそ」の横断幕を掲げ、乗客一人ひとりに笑顔でお辞儀をしながら挨拶をしていたが、これはとても印象深かった。またその後搭乗した機内では、すべてのキャビンアテンダントが常に笑顔で乗客へサービスを提供していた。

2. 国際化交流

国際経済における各国との繋がりが日増しに強まる今日、日本航空の長期的ビジョンは同社の優位性を確かなものにしている。日本航空は他の航空会社との積極的な提携強化を進め、世界の三大航空連合の一つであるワンワールドのメンバーとして、アライアンス内での国際業務の開拓以外にも、さらにエールフランス、ニュージーランド航空、中国東方航空などの航空会社とコードシェアを行い、国際化交流を同社の長期目標とし、JAL のプレゼンスを世界各地に拡大している。

# 環境保全は企業の義務

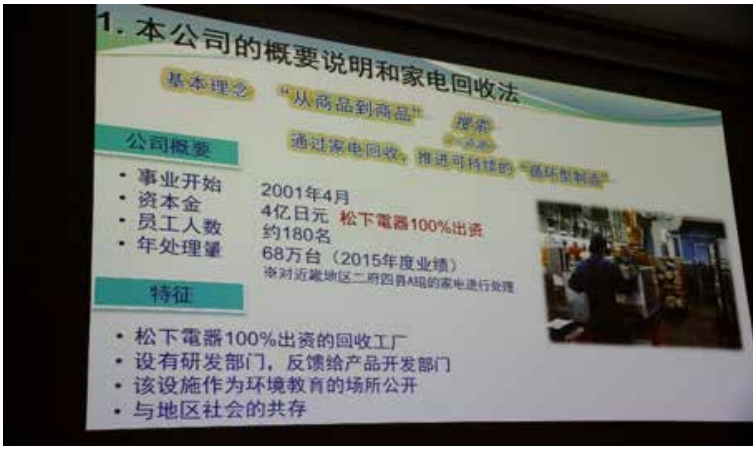
北京師範大学学生代表

**見学日時：2016年11月30日（水）09:15-11:30**
**見学場所：パナソニックエコテクノロジーセンター**

**見学概要**

この日の午前、私たちはパナソニックエコテクノロジーセンターを訪れ、熱烈な歓迎を受けた。同センターのホールでは、回収した素材を使った多くの製品を目にすることができた。

そして、同センターのスタッフからパナソニックの理念「商品から商品へ」、「資源循環型モノづくりで、大切な資源を未来へ」についての紹介を受けた。




その後、私たちはパナソニックエコテクノロジーセンターの工場を見学し、紹介ビデオを観賞し、解説に耳を傾けた。全体を通した見学において、同社は私たちが理解しやすいように解説と字幕をすべて中国語で作成しており、これには私たちもとても感激した。

最後に質疑応答を行ったが、皆はとても積極的で、中国人大学生の前向きな姿勢を示していた。

**知っていますか？**

今回の訪問中、私たちは同センターに見学に来ていた数名のお年寄りを見かけた。パナソニックは自らの環境保全やリサイクルなどの理念を普及するため、関連業界の企業や一般向けに同センターを開放している。同センターの展示用廊下には、現地の小学生による見学後の感想文や絵が壁一面に貼られている。このようにパナソニックは、営利企業の身分を超越し、日本社会の一部分として大衆向けに環境保全や節約そして効率的利用などの理念を積極的に広め、エコの意識を植え付けるための努力を行っている。

**感想**

今回の訪日前から、私たちはパナソニックという企業についてある程度の知識は持っていた。というのも、多くの家庭ではパナソニックブランドの家電製品が使われているからである。そして日本でより深く同社について知り、私たちは初めてパナソニックの成功はそのハイテク製品のみならず、同社に根付いた環境保全理念が理由となっていることに気が付いた。「商品から商品へ」、「資源循環型モノづくりで、大切な資源を未来へ」などの理念の下、パナソニックは使用済家電などの商品から再利用可能な金属やプラスチックなどの資源を取り出し、再加工処理により新たな製品を生み出すことで、資源のリサイクルを実現している。創始者の松下幸之助の時代から、パナソニックはこの信念を貫いている。

こうした理念の普及のため、パナソニックは社会に向けた交流や見学の場を構築し、現地の学校やお年寄りまた企業などによる見学を積極的に受け入れている。

私たちの社会により良い生活環境を構築することは、私たち各個人そして各組織の責任である。利益獲得は企業の本質であるが、社会の一部分として、企業には社会的責任を担う義務がある。こうした責任には浅い意味での粗悪品を作らない、廃棄物や廃水を処理してから排出するなどの他に、深い意味での製品の利用率を高め、社会へ正しい生活理念などを普及することも含まれている。製品一つひとつが快適かつ安心して使え、私たちが工業化やハイテクを享受すると同時に、自然の豊かさを享受できるようにする必要がある。

パナソニックの経営理念からは、私たちは多くを学ぶことができる。真に環境に優しく、エコで高度に発展した現代社会を構築するには、まず市民全体がこうした意識を持ち、さらに正しい方向性による指導や制度の制約の下、確実に目標に進んでいく必要がある。社会における変化や転換の道は長いものであり、時には何世代もの人々が努力を続ける必要があるかもしれない。しかし中国は一歩ずつ浮き足立つことなく、確実に進むことでのみより良く変わることができるのである。

# 大阪大学での視察交流

北京理工大学学生代表

**見学日時：2016年11月30日（水）14:00-19:30**
**見学場所：大阪大学**

**見学概要**

訪日団は 2016 年 11 月 30 日午後 1 時 50 分に大阪大学に到着し、コンベンションセンターの前で記念写真を撮った後、この日午後の大阪大学での見学を開始した。

まず私たちはコンベンションセンター 2 階の会議室において、大阪大学国際教育交流センターの有川友子センター長から歓迎のあいさつを受け、その後大阪大学の紹介 DVD を観賞した。有川センター長と DVD による紹介を通じ、大阪大学は大阪府吹田市にある世界レベルの研究型国立総合大学で、1724 年に設立され、長い歴史があり、日本で最初のノーベル物理学賞受賞者の湯川秀樹氏が教鞭を取り、ノーベル化学賞受賞者の福井謙一氏の母校であることを知った。大阪大学には複数のキャンパスがあり、面積は非常に大きく、自然豊かで年中風光明媚である。また代表的な 4 つの学部としては理学部、工学部、医学部、法学部があり、各学部とも世界各地からの学生を歓迎している。

14:30 頃、私たちは三組に分かれてレーザーエネルギー学研究センターの見学を始めた。しかし訪日団の学生の多くが文系の学生であったため、レーザーについては知識が無く、皆は研究センターの研究内容や解説のあった理論について茫漠と驚きといった感覚を抱いたようであった。私たちは三つの実験室を見学した。まずはレーザーの生成と強化、次にレーザーの重合と照射、最後に実験室で使われる各種原理の紹介という内容であった。レーザーはまず、最初の実験室で生成され、その後様々なラインの加速器を通じ加速され（生成当初レーザーは非常に弱く、次第に強化することで最終的に必要な強度となる）、最終的に 2 つめの実験室で重合照射される（12 本のレーザーを重合する）。実験室は主にこの技術をレーザー核融合研究に利用している。現在すべての原子力発電所では核分裂方式で発電されており、比較的重い原子とその他の原子の衝突による部分的質量の損失によりエネルギーを放出している。もちろん大量のエネルギーを生み出す方法は一つだけではなく核融合の方法もあるが、核融合の度合の制御が比較的難しい。大阪大学のこの実験室は正に、いかに高出力レーザーを駆動装置として核融合を制御するかを研究している。

16:15 頃、私たちは実験室の見学を終え会議室へと戻り、大阪大学の学生と共に事前に決めてあった 6 つのグループに分かれてテーマ討論を始めた。討論のテーマは、日中文化の比較、日中双方に対する印象、日中の観光、留学交流の 4 つであった。そしてグループ討論を通じて両国の学生は次第に打ち解け、討論の雰囲気も段々と盛り上がり、皆の笑い声なども教室全体を包むようになった。

17:00 に討論が終わり、各組による討論結果の発表となった。そして暗黙の了解のように、各組の発表者は中国の学生と日本の学生が一人ずつで、中国の学生は日本語で、そして日本の学生は中国語を使い発表を行った。A 組のテーマは日中双方に対する印象で、彼らは表を使い両国の学生の相手の国の環境保全、文化、ビジネス、食、交通、生活の 6 つの面についての印象を紹介した。B 組のテーマは日中の観光で、彼らの組はまず中国の学生が日本旅行を通じて感じた日本の伝統文化、食、ショッピング、日常生活の印象を紹介し、その後日本の学生が、中国人がそのような印象を持った理由について紹介した。C 組のテーマも同様に日中双方に対する印象で、彼らは絵と文字を使った方法で両国の文化、性格、科学技術、その他の 4 つの面の違いについて比較を行った。D 組のテーマは留学で、彼らは学生の性格、両親による教育および家庭からの経済的支援の 3 つの面から両国の留学生の違いを比較した。E 組のテーマも同様に日中双方に対する印象で、彼らは科学技術、文化、食、商品などの面から互いの国への印象を細かに紹介した。F 組のテーマは日中双方の恋愛観の比較で、彼らは日中両国の男女学生の結婚前における交際や同棲、性関係などの問題への考え方を比較し、とても面白かった。

18:00 に私たちはパーティーホールに向かい、懇親会が始まった。懇親会はとても楽しい雰囲気で、大阪大学東アジアセンターの大谷順子センター長の挨拶の後、私たちは大阪大学の学生と食事をしながら楽しく語り合った。同年代ということもあって共通する話題はとても多く、皆楽しそうで、すぐにお互いに Facebook や Line を交換し合っていた。懇親会が終わる時間になっても、皆はまだ物足りなそうにしていた。

**知っていますか？**

問：大阪大学の概況を知っていますか？

答：大阪大学は、大阪府吹田市に本部を置く著名な研究型国立総合大学である。大阪大学は日本国内で6番目に設置された旧制帝国大学で、医学と自然科学を基とし、創立間もなくから「理系の阪大」として頭角を現した。

現在、大阪大学には11の学部と15の研究科におよぶ大学院、5つの研究所と数多くの付属研究施設がある。長い歴史を誇る旧帝国大学の一つとして、大阪大学は大阪府の大阪市、吹田市、豊中市、箕面市に拠点を設け、日本経済の中心地で海外との玄関口である全国第二の都市である大阪市にあり、世界トップクラスの研究機関との学術交流への優位性を持ち、RU11学術研究懇談会、八大学工学系連合会、スーパーグローバル大学タイプA（トップ型）、環太平洋大学協会などの関連学術組織における重要メンバーである。

大阪大学は、「物事の本質を見極める能力」を有し、さらに国際的な難題に果敢にチャレンジし、問題解決の筋道を探し出し、新たなものを創造し、未来を切り拓く人材の育成を目指している。

大阪大学の卒業生には、日本で最初のノーベル賞受賞者である湯川秀樹氏、ソニー会長の盛田昭夫氏、漫画家の手塚治虫氏らの他、ウルフ賞、アルバート・ラスカー医学研究賞、クラフォード賞および数名のガードナー国際賞、日本国際賞受賞者がおり、その科学研究などの分野において人材を多数輩出し、世界に名を轟かせている。

問：大阪大学のレーザーエネルギー学研究センターを知っていますか？見学した感想は？

答：今回の大阪大学訪問において、私たちは幸運にも大阪大学のレーザーエネルギー学研究センターを見学した。日本における高出力レーザーとレーザー核融合研究は世界においても進んでおり、同研究センターも非常に優れた実力を有している。

センター内に入ると、センターの先生からレーザーに関する科学的知識の詳しい紹介があり、その後先生引率の下、私たちはレーザー器具や大型のレーザー設備を見学した。先生の解説から、私たちはレーザーがいかに核融合を通じて次第に強くなり、そして活用されているのかを知った。センター内には12本のレーザーを発する大型装置があり、100台近くの工学設備がサッカー場ほどの大きさのスペースに集められている。12本のレーザーが増幅器を通過しターゲットチャンバーに送られると、一瞬にして高出力のレーザーが照射される。

見学を終え、私たちはレーザー技術の未来に明るい展望を持つことができた。レーザー核融合は、未来のクリーンエネルギーにおける希望であり、充分にレーザーのポテンシャルを解放すれば、人類は未来において限りない恩恵を受けることができる。

**感想**

大阪大学は一流の大学であり、長い歴史以外にも、沢山のものを包み込む国際的視野を有している。進んだ設備と優秀な教授チームは、大阪大学の優れた教育・研究レベルを決定付けている。それと同時に、開放的な校風は大阪大学にハツラツとした気風を持たせている。

大阪大学の学生らはとても親切で、かつ思考力が高い。皆は初対面ではあったが、すぐに楽しく交流をすることができた。また互いの相違点も、相互認識を後押しし、踏み込んだ交流のきっかけとなった。わずか数時間で、私たちの間には多くの思いが交錯し、日中双方に対する固定観念に一定の変化をもたらした。またこうした交流を通じて私たちも、この世界には沢山の優秀で愛すべき若者がいて、心を開き、偏見を持たず、熱意と誠実さを以って交流することで、初めて客観的に世界を知り、世界を受け入れることができるということを知った。

レーザーエネルギー学研究センターの見学の際、私たちは科学技術の魅力、そして科学技術が人類にもたらす希望の光について強く感じることができた。特にセンターの先生から、中国はレーザー核融合技術の面で世界的にも進

んでおり、64 本のレーザー装置を有しているという紹介があった時の、こみ上げる誇りのような感覚は言葉にすることができなかった。

近代の混沌とした時期を振り返ると、数多くの仁愛の心を持つ人々が日本を訪れ、救国の道を求めた。日本は中国が先進的な科学や文化に触れる上での重要な中継地点であり、当時報国の志を持った中国の青年にとって啓蒙的役割を果たした。中国はその後困難な模索を繰り返したが、現在ではすでに世界の方向性を左右する国となっている。これを誇らしく感じないことなどあろうか。

若者が逞しければ国も逞しくなる。私たち現代の若者は輪廻のリズムに合わせ、共存と開放をし、互いに友好関係を築き、国土そのものと同様の限りない活力を持ち続けるべきである。

# 車山前に到りて必ず道あり、道あるところにトヨタ車あり

北京語言大学学生代表

**見学日時：2016年12月1日（木）9:00-13:30**
**見学場所：トヨタ自動車元町工場・トヨタ会館**

**見学概要**

トヨタ自動車は「クルマづくりを通じて社会に貢献する」という企業精神の下で業務を展開し、「モノづくりは人づくり」の考えにより人材を育成している。現在日本および世界の 28 の国や地域に生産拠点を設けており、160 以上の国と地域の販売拠点を通じて自動車製品を販売している。

初めに私たちは元町工場を見学し、トヨタ人が顧客至上の信念に基づき確立した、徹底的に無駄を省くことで「高品質、短納期、低コスト」という目標を実現したトヨタ生産方式（Toyota Production System，略称 TPS）について理解を深めた。この目標の実現を保証するのは「自働化」と「ジャスト・イン・タイム」という 2 つの支柱である。その中で、「自働化」は「品質は、工程で造りこむ。不良品を次の工程に送らない」ということであり、スタッフと機械の有機的な協力が求められ、生産ラインにおいて万一品質、数量、品種などの問題が発生した場合、機械が自動的に止まり、さらにそれらが表示され、またいかなるスタッフも故障などの問題を発見した場合は生産ラインを止める権利を有し、その場で問題を解決する。「ジャスト・イン・タイム」は「必要なものを、必要なときに必要な量だけ造る」ということであり、カンバン管理を手段として「後工程引き取り」方式を採用することで、全プロセスにおける制御促進システムを形成し、一つの製品も余分に造らず、市場の多品種・小ロット需要への素早い対応を保証する。

その後、トヨタ会館を訪れた。トヨタ会館は 1977 年にトヨタ自動車の設立 40 周年を記念して建設された。より多くの人に自動車産業を知ってもらうため、トヨタ会館では無料で一般向けの開放を行っており、リアルな模型や紹介ビデオそして体験コーナーを通じてトヨタ自動車の発展の歴史を紹介し、トヨタの代表的車種や最新テクノロジーの成果を展示している。トヨタ自動車は終始環境保護を最重要課題の一つと位置付け、自動車の開発、生産、使用から廃棄までの製品ライフサイクルの各段階における、人や地球環境を思いやった自動車生産の実現を目指している。地球の気候温暖化をもたらす二酸化炭素および大気を汚染する排気ガスの排出を削減するため、トヨタはこれまで低燃費で環境に優しいエコカーの開発に取り組んでいる。そして、ガソリンやディーゼルを燃料とする従来車種やハイブリッド型車種の省エネをこれまで以上に進めると同時に、さらにプラグインハイブリッド車、電気自動車、燃料自動車などの次世代のエコカーの開発を図り、燃料多様化への需要を満たしている。

団員がトヨタ会館で見学体験

最後に、私たちはパーティーホールでの食事となり、中国社会と共に発展していくというトヨタ自動車の願いについて理解を深めた。事業展開の面では、トヨタは中国における完成車、エンジンおよび自動車関連事業に積極的に関わっており、国の政策の支援の下、第一汽車集団や広州汽車集団などのパートナー企業と合弁事業を行っている。この他、トヨタは「環境保護」、「交通安全」そして「人材育成」を中心とし、中国社会に溶け込むべく中国に根付いた様々な社会公益活動を積極的に展開することで、中国の経済や社会の調和のとれた発展の推進に貢献し、中国社会から認められそして信頼される企業市民となるべく取り組みを行っている。

**知っていますか？**

問：自動車業界の競争において、ドイツ車と比較し、日本車にはどのような優位性が存在するか知っていますか？

答：第一に、価格面。日本車はコスト面が考慮されているため、低コスト、低価格、高い商品回転率を実現している。同様に比較的短いモデルライフと高いメンテナンス費用という問題を指摘する声もある。

第二に、車種のモデルチェンジ面。同タイプの自動車において日本車はドイツ車よりも価格が安いが、収益率が高く、新車種の発売に十分な資金的保障を提供している。

第三に、省エネ面。同タイプの自動車において日本車はドイツ車よりも重量がかなり軽い。日本車にはBH鋼板が多く使われ、剛性が変わらない状況において、鋼材使用量を25%減らすことができる。そして車体重量の軽量化は燃費の低減を可能にしている。

第四に、謙虚さ。ドイツ車は日本車の先輩と言えるが、現在日本車の販売台数がドイツ車よりも多い状況において、日本人はそれに驕ることなく、依然としてドイツ車から真摯に学ぶことで、自身の欠点や不足を絶えず改善している。

問：トヨタ自動車の中国現地化戦略の展開状況を知っていますか？

答：トヨタ自動車は早くから世界に名を馳せており、中国では子供からお年寄りまで、皆トヨタ自動車の「車山前に到りて必ず道あり、道あるところにトヨタ車あり」というキャッチコピーを知っている。

国の経済の発展に伴い、人々の生活レベルが向上を続け、より多くの人が自動車を購入するようになっている。数年前まで日本車の中国での販売台数はとても良かったが、市場の変化や他の自動車ブランドの成長そしてトヨタの経営理念の固定化に伴い、トヨタ自動車はここ1、2年市場において比較的厳しい状況を迎えている。販売台数は大きく伸びているが、トヨタの中国における現地化戦略の展開は比較的遅い。さらに重要なのは、トヨタの最近の販売台数増加は主に小型車の販売台数の伸びに依存しており、同社の「伝統的優位性」であった中・高級車種は全体的に、逆に厳しい状況に直面している。ただ中国市場においてかつての栄光を取り戻さなければならないトヨタではあるが、世界における販売台数ではトップの地位にある。しかし中国市場において、トヨタは現在順調とは言えない状況であり、かつての「道あるところにトヨタ車あり」という栄光から、中国の自動車市場が最も発展しているこの時期において欧米企業に後れをとっていることで、トヨタの世界市場に占める中国市場の販売比率は小さい状況となっている。一部のメディアでは、現地化戦略の不備こそがトヨタの中国における最大の問題であり、これが中国自動車市場における需要変化の動きへの把握の不備をもたらし、商品戦略の問題につながっているとの指摘もある。

トヨタ会館で展示されている新型エネルギー自動車

**感想**

トヨタの核心理念は「クルマづくりを通じて社会に貢献する、クルマづくりを通じて豊かな社会づくりに貢献する」である。21 世紀において、トヨタは真の意味でこれらを成し遂げたと私は思う。従業員数約 34 万人、連結子会社数 548 社、本社のある愛知県豊田市トヨタ町の 90% の住民がここに勤務し、豊田市で見かけるのはほぼ全てトヨタ車かその旗下ブランド車となっている。私はこれこそ豊かな社会づくりへの努力だと思う。市民が自分たちの国で生産した自動車を購入し、企業は社会へ恩返しをする形で、現地の就業率を牽引し、市民をより豊かにし、産業面の成果で国に報いる。この点から見ると、トヨタ自動車は流石に日本そして世界における一流企業である。またトヨタ自動車は、こうした理念を中国においても今日まで継続し、中国現地の企業と提携し、全社一体となり忠実に実践している。この点から見ると、私は中国企業にはまだ沢山学ぶべきものがあり、またこうした部分にも私たちが交流をする意義があると思う。

# 転ばぬ先の杖、安全第一

中国農業大学学生代表

**見学日時：2016年12月2日（金）14:00-15:30**
**見学場所：三菱東京UFJ銀行**

**見学概要**

12 月 2 日、銀座にて本格的な和食ランチを堪能した後、「走近日企・感受日本」訪日交流団一行は三菱東京 UFJ 銀行を訪れ、銀行スタッフによる紹介や貸金庫の見学などを通じて日本でトップ、世界でも 4 番目に大きな同銀行について、知覚的な認識と理解を得ることができた。

まず初めに、三菱東京 UFJ 銀行東アジア企画部の長谷川部長から同銀行の組織構造から支店ネットワークに至るまで詳細な紹介があり、その中でも支店ネットワークのお話の際に、同銀行が 1980 年に北京代表処（中国初の外資系銀行代表処）を設立してから現在に至るまで中国本土において 20 の営業拠点を有しているといった中国における発展の歴史について重点的な紹介があった。この他、長谷川部長は学生時代単独で一ヶ月の時間をかけてヨーロッパを歴訪し自身の国際的な視野を広げ、後に国際金融に関する仕事に就くことを決心したとのことで、私たちにも若いうちに「走近日企・感受日本」のような活動に多く参加し、国際的な視野を広げて欲しい旨のお話があった。

紹介の後の質疑応答では、中国の支付宝（ALIPAY）を代表とするオンライン決済サービスが従来の銀行業に与える影響について質問があり、同銀行のスタッフからは、中国におけるオンライン決済サービスは日本より進んでいる部分もあり、これは中国の巨大な市場に関係すると同時に、中国国内における従来の決済方式が不便であることにも関係している。オンラインと銀行が共に作用し合うことで中国国内におけるオンライン決済サービスはさらに繁栄する。三菱東京 UFJ 銀行としても、早期にこうしたサービスを安全に提供できる様関連分野の研究を行っている、といった率直な回答があった。それと同時に、中国では現在オンライン決済サービスが広く普及しているが、未だ多くの潜在的リスクが存在していることを懸念しており、中国のように先にサービスを開始し問題を発見してからそれを解決するのとは違い、日本人はこうした潜在的リスクの解決方法を確立してからサービスを提供するのをより好む傾向にあるといったお話を聞くことができた。

その後、私たちは貸金庫を見学した。私たちのスケジュール表には「金庫」と書かれていたため、当初は何重もの扉を開けた後に部屋いっぱいの黄金やお札といった光景を想像していたが、その後日本語の「金庫」はセーフティーボックスを意味していると知った。厳重な警備、厚い扉、何重ものセキュリティ、それと同時に金庫利用者のために、銀行スタッフも見ることの出来ない、プライバシーを守る単独スペースが準備され、「安全」と「プライバシー」を極限まで高めている。

貸金庫業務の見学の後、銀行は業務終了時刻であったが一部の預金者の業務が終わっていなかったため、当初予定していた銀行内部の見学は残念ながら取り止めとなった。

**知っていますか？**

問：三菱東京UFJ銀行の前身を知っていますか？

答：2005年2月18日、三菱東京フィナンシャル・グループとUFJホールディングスの責任者が東京での記者会見の席上握手を交わした。両社は総額3.99兆円（380億ドル相当）規模の統合契約締結を発表し、新たな商号を「三菱UFJフィナンシャル・グループ」とした。

**感想**

今回の活動において、私たちは初めて預金者の立場としてではなく銀行に足を踏み入れ、三菱東京 UFJ 銀行の組織構造や日常の運営の様子について知ることができた。中国のオンライン決済サービスに話が及んだ際の、銀行スタッフによる中国と日本における物事の処理のスタイルの違いについての比較はとても印象深かった。中国はまず行動し、問題が発生してから解決する。これはより起業に向いている。日本は行動する前に、起こり得る問題を考え、それに対する解決方法を確立してから普及や行動を始める。これはより成果の維持に向いている。前者はよりチャンスを掴むことができるが、予期しない問題が発生し致命的な結果を招くこともある。後者は堅実だが、チャンスを逃す可能性も存在する。日本は比較的早期に発展し、現在では非常に高いレベルの発展を遂げているため、よりその維持が必要である。対して中国は、発展が遅れ、基盤も弱いが、潜在力は大きいため、古いものを打ち破らなければ新しいものは打ち立てられないという起業の姿勢がより必要である。中国としては、前進をすると同時に日本人のような潜在的リスクへの予測や対策を学んでこそ、私たちが切り開く道はよりスムーズになるであろう。

# 伝統の堅持とイノベーション

国際関係学院学生代表

**見学日時：2016年12月2日（金）16:00-19:30**
**見学場所：三井物産株式会社**

**見学概要**

午後 4 時、私たちは定刻通りに三井物産株式会社（以下、三井物産）を訪れた。そこではまず株式会社三井物産戦略研究所の平塚眞二氏から三井物産の会社概要や事業内容などについて紹介があった。三井物産は 1947 年に設立された日本屈指の総合商社である。そして 2016 年 3 月末現在 66 の国と地域に 139 ヵ所の拠点を設け、総資産は 10 兆 9000 億円、連結従業員数は 43,611 名に上っている。三井物産は「伝統の堅持とイノベーション」が交わった企業であり、物流ネットワーク型やハイブリッド型のビジネスモデルを採用し、マーケティング、金融、物流、リスクマネジメントやフロー構築の能力を兼ね備えている。そして「360° business innovation」をコーポレートスローガンとし、絶えず「挑戦と創造」を行い、大切な地球と、そこに住む人びとの夢溢れる未来作りに貢献している。会社の紹介が終わった後は懇親会が開かれ、私たちは三井物産の中国人や日本人従業員の方と交流を持つことができた。その際彼らから会社の業務の状況や会社での日常の様子、そして彼ら自身の実感などについて紹介があり、私たちは三井物産についてより詳しく知ることができた。従業員の皆さんはとても親切で優しく、懇親会は楽しい雰囲気の下で行われた。

**知っていますか？**

問：三井物産のような大型総合商社が従業員に求める条件とは？

答：三井物産では毎年多くの海外駐在員を国外の業務に派遣している。そのため高いレベルの英語・日本語力を持ち、かつ海外での業務や生活に前向きであることが求められる。そして居住国の文化や価値観の違いを理解し、受け入れる努力も必要である。

問：三井物産の事業範囲は多岐にわたっているが、彼らはどのようにそれらを管理しているのか？

答：三井物産では、整備されたガバナンスやリスク管理体制の下、従業員にも「コンプライアンスを尊重する精神」を持った人材育成を行い、従業員は自律的に行動規範や会社の各規定を遵守する。また提携パートナーの選択は、三井物産が継続的に事業を行う上での重要なプロセスであり、会社としてはとても慎重に審査を行っている。提携

期間中、相手側に条件の履行が困難な状況或いは会社状況についての虚偽報告等があった場合は、直ちに相手側との提携を中止する判断もある。

問：三井物産での業務とは、どの様なものなのか？

答：大多数の日本企業と同じく、三井物産もキャリアに応じて従業員を昇進させており、一定のCDP（キャリア・デベロップメント・プログラム）を経た後は、その能力に応じて更なる昇進をさせる方式を採っている。中国人従業員から見て日本人従業員は非常に熱心に仕事をしている。また日本企業での仕事はとても厳しく、深夜までの残業もしばしばあるが、そうした仕事の後に得られる達成感は何ものにも代え難いとのことである。

**感想**

三井物産株式会社での短時間だったが心温まる交流の後、私は同社のイノベーション精神に深く感動した。これほど大規模で歴史もある総合商社が、過去の業績にあぐらをかき、伝統に固執することなく、逆に時代の変化に順応すべく努力を続け、自己改革を絶えず行っている。彼らはまたイノベーションを企業の価値観に組み入れ、企業の経営理念に融合させることで、従業員が変化の波を確実に捉え、事業革新の継続的展開や自主的な業務革新の促進をすべく促している。彼らのこうしたイノベーション精神はすべての人が学ぶべきもので、古いものに拘っていては、いつかは社会に淘汰されてしまう。絶えずイノベーションを推進することでのみ、業界の先頭を走ることができるのである。

# アパレル物流企業における自動化とコスト制御

北京大学学生代表

**見学日時：2016年12月5日（月）09:00-11:00**
**見学場所：イトーヨーカ堂配送センター（浪速運送株式会社）**

**見学概要**

訪日団のメンバーは企業の担当者から同社の発展の歴史、主な業務内容、運営方式の紹介を受け、同社はアパレル物流を行い、その物流の目的は物の動きを可能な限り減らすことによりコストを下げることであること、そしてイトーヨーカ堂配送センターの全国各地の支部および同社の中国における発展の状況について知ることができた。その後、訪日団のメンバーは同社の作業場を訪れ、衣類の運搬車からの荷下ろしや運搬車への荷積みの様子を見学した。衣類はレールに沿って 1 階から 4 階に運ばれる。そしてこの自動化の運輸システムは店舗毎の分類機能も兼ね備えており、人件費を大きく削減すると同時に空間を効果的に利用している。

**知っていますか？**

1. 衣類が掛けられた状態で運ばれる

イトーヨーカ堂配送センターで運ばれる衣類はすべてハンガーに掛けられた状態で運ばれる。その主な理由は、その後運ばれるのが皆デパートであり、ハンガーに掛けた状態で運ぶことでデパートのスタッフの業務量を大きく減らし、直接デパート内で販売を行うことができるからである。人件費が高い日本において、この取り組みは衣類を掛ける労働力を配送センターに前倒ししている。またこの取り組みはハンガーの回収利用、段ボールの不使用といった多くの資源の節約につながっている。しかも運搬車内には棒を固定する場所が多く有り、スペースを有効に利用できるため、運ぶ衣類の量が減る心配もない。衣類はしっかりと並べられ、1 台の運搬車で 1200 着のスーツを運ぶことができる。

2. 衣類が自動的に階上へ運ばれ分類される

衣類が運搬車から荷下ろしされると、工場のスタッフたちがすぐさま衣類を輸送ラインに送る。ここでは衣類は自動的にゆっくりと 3･4 階の保管場所に運ばれる。そして 2 階では、異なる店舗の衣類が青色のテープで仕切られ、システムはシグナルに基づき衣類を自動的にそれぞれのレールに送る。仮に人が分類した場合、1 時間で 200 着の分類となるが、こうした機械が分類することで、1 時間に 4000 着を分類することができ、効率が大きく高まり、スタッフの負担を減らすことができる。

**感想**

1. 物流企業におけるコスト制御の道

立地:同配送センターは銀座から車でわずか 15 分の場所にあり、大型デパートへの配送の費用を軽減している。物流企業が物の動きを極力減らしコスト制御をすることで、商業地に近い中継地点に拠点が置かれ、配送の時間を短縮した上、各地への配送の利便性を高めている。デパートにおいては一部の衣類の需要に融通が利き、比較的近い保管地点は配送に有利なため、デパート側は早急に必要な商品を得ることができる。イトーヨーカ堂配送センターでは商品保管の役割も担っている。

スペースの節約:これは立地と密接に関わっている。商業地に立地し地価が高いため、衣類の保管時はスペースを充分に利用することで、コストを抑えることができる。一方で、輸送プロセスにおいても同じことが言える。衣類はハンガーに掛けて運ばれ、折りたたまれ箱詰めされてはいないため、輸送コストの削減のためには、1 台の運搬車に可能な限り多くの衣類を積み込めるような効果的なスペースの利用が企業側に求められる。同社の保管エリア内では衣類が上下びっしりと掛けられ、運搬車内では棒の高さを調整することであらゆる長さの衣類が掛けられていた。

自動化:人件費の上昇は企業の自動化生産を推し進め、衣類の配送という分野において、イトーヨーカ堂配送センターでは衣類の自動化輸送・管理を行い、スタッフの労力を軽減し、同時に作業効率を高めている。例えば人の分類効率は 200 着 /1 時間だが、機械の場合は 4000 着 /1 時間である。自動化生産のもう一つの利点は、多くの衣類を集積処理できることで、同配送センターにはイトーヨーカ堂以外の衣類もあり取扱量が多いが、自動化処理のため、大量のスタッフを抱える必要がない。

2. 企業の発展と拡大

時代が移り変わると同時に、企業における業務も様々な優位性や劣位性と向き合うことになるため、新たな業務や企業の発展目標を確立する必要がある。同社は 1992 年、工場の中国移転に伴い、中国上海における業務の開拓を始めた。挫折も経験したが、最終的には日中合弁の方式を採用し、深セン、大連、上海などの都市で業務を展開した。中国においては主に質検局との提携により衣類の品質や成分への検査を行い、その後日本に輸送し販売を行った。

上述の内容は 1990 年代の話であり、現在では衣類の価格も下がり、経済は不景気で、業界内の競争も激しくなっているため、企業としても例えば農産物の輸送といった新たな業務の開拓を行っている。日本の農産物の価格は比較的高く、その原因は多くの場合輸送コストに起因している。そのため、例えば個人向けの輸送サービスなどは、企業が発展を続けていく上での新たな試みであり、それによりその企業に適したビジネスモデルや運営方法を模索する必要がある。

# 血と涙以外の記憶すべき歴史

北京師範大学学生代表

**見学日時：2016年12月5日（月）12:00-13:30**
**見学場所：日比谷松本楼**

**見学概要**

正午、私たちは日比谷公園内の松本楼を訪れ、そこで食事となった。そして小坂文乃女史による日中両国の友好関係に大きな貢献をした孫中山氏と梅屋庄吉氏の故事を拝聴した。

日比谷公園は日本で最初の西洋式公園であり、とても美しい場所である。

松本楼に向かう道すがら、黄金色の高くそびえたつ沢山の銀杏の木を見かけた。銀杏の葉が風になびき、地上の銀杏の葉はとうに厚く重なっていた。その景色は夢の世界のような美しさで、今でも忘れられない。

小道の脇には写生をしている人もいて、一種の静まり返った美しさが感じられた。ただ写真を撮らなかったことがとても悔やまれる。

松本楼は 100 年以上の歴史を持つ日本で最初の洋風レストランで、入口にはこのようなピアノが置かれている。

これは梅屋庄吉氏が娘のために購入したピアノである。孫文（孫中山）氏が帰国当時、その妻である宋慶齢女史が梅屋氏の屋敷内に寄宿していた。宋慶齢女史はとても音楽が好きで、いつもこのピアノを弾いていた。その後梅屋庄吉氏は孫文夫妻と松本楼との縁を記念し、このピアノを松本楼に寄贈した。

松本楼を訪れた時間が丁度食事時ということで、私たちはまず松本楼が私たちのため心を込めて準備した美味しい料理に舌鼓を打った。これらの料理は見た目が洗練されているだけでなく、味も非常に良かった。

食事の後は、小坂文乃女史から梅屋庄吉氏と孫文氏の真摯な友情についての紹介があった。

小坂女史の素晴らしい解説から、私たちは梅屋庄吉氏がどのように孫文氏とめぐり合い、またいかにして無私の精神で私財を孫文氏

の革命運動への支援に投じたのかを知り、歴史的偉人の深い友情と人間的魅力を感じた。

解説終了後、私たちは松本楼の前で記念写真を撮り、松本楼での見学を無事に終えた。

**知っていますか？**

孫文氏は日本滞在期間、梅屋庄吉氏の多大なる支援を受けた。この他、孫文氏と宋慶齢女史の婚姻は徳子女史（梅屋庄吉氏の夫人）の仲立ちにより実現した。松本楼 1 階の入口には宋慶齢女史が非常に好みいつも弾いていたピアノが置かれている。梅屋庄吉氏はまた自らの出資により中国における初代のパイロットを育成した。統計によると、梅屋庄吉氏が中国の革命に投じた資産総額は 2 兆円（1300 億元相当）にもなる。

**感想**

孫文氏と梅屋庄吉氏との友情は日中関係の一つの縮図である。

小坂文乃女史の話によると、孫文氏は香港で梅屋庄吉氏と知り合った後、アジアの人民が一致団結して列強の侵略に対抗し独立を実現すること理想とする梅屋庄吉氏は、孫文氏への無償の資金提供を行った。また松本楼において幾度とパーティーを開き、孫文氏を日本の各界の人物へ引き合わせた。

梅屋庄吉氏はかつて「君は兵を挙げたまえ、我は財を以って支援す」という盟約を結んだ。そして中国における「辛亥革命」の時期、梅屋庄吉氏は飛行機や弾薬など大量の武器を調達した。孫文氏の死去後、梅屋庄吉氏は依然として日中友好関係の維持に努め、孫文氏の銅像 4 体を造り中国へ寄贈した。

上述の事実について私は初めて耳にしたが、とても感銘を受けた。日中の交流史においてこれほど偉大な先駆者がいたこと、そして真に意気投合した闘士の彼らは、私たち両国の若者に模範を示している。現在の国際情勢において、日中関係は尋常ではない困難な局面にあり、私たち若者はこれまで以上に責任を担う必要がある。若者は正に国の未来であり、広い視野と創造力を持ち、そして可能性を握っている。私たちは絶えず意思疎通や交流をし、直に日中両国の実状を見て、誠実に向き合う必要がある。私たちは自らを媒介者とし、真実の情報を周囲へ伝えていかなければならない。一個人の友情はわずかなものであるが、数多くの人々の友情が組み合わさった繋がりは、きっと両国のより多くの人々を感動させるであろう。私たちは素晴らしい未来を願っており、また共通の道を歩んでいくのに、どうして手を携え助け合わないのだろうか？

私たち日中の学生が付き合いを深め、共に遊びまた学び、人生や愛情そして美食について語り合う。私たちは人類で、かつ同じアジア文化圏にあり、沢山の共通認識がある。

松本楼は孫文氏と梅屋庄吉氏との友情の証人であり、日中友好の象徴でもある。松本楼が今後も日中両国の素晴らしい未来を見守っていくことを願っている。

# 日中関係における良い点と悪い点

北京理工大学学生代表

**見学日時：2016年12月5日（月）14:15-15:30**
**見学場所：中華人民共和国駐日本国大使館**

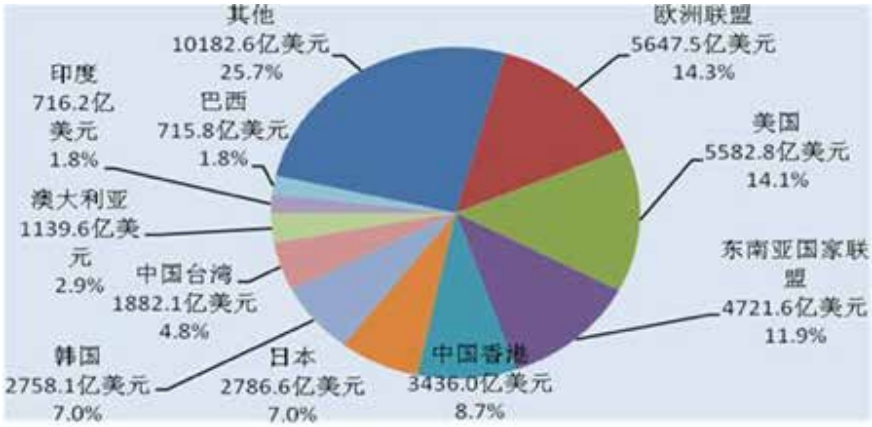
**見学概要**

普段のニュースでの報道であれ、または人々の食後の話題であれ、日中関係は日頃からよくそのテーマとなっているが、日中関係は結局のところどうなのかについて、私たちは客観的な角度から見たり、また数値化した角度から分析したりすることが難しいのが現状である。今回中国大使館を訪れ、より客観的な角度から見た日中関係について薛剣政治部公使参事官からお話があり、私たちも新たな視点から日中関係について考えることができた。

**知っていますか？**

日中関係は一部の面においては非常に良いが、また一部の面においては多くの対立を抱えている。

2015 年中国における十大貿易相手国との貿易額およびその比率



このデータから、日本は中国にとって5番目に大きい貿易パートナーの一つ（国としてみた場合、日本はアメリカに次ぐ2番目に大きい貿易相手国）であり、中国もまた2015年にアメリカを追い越し日本にとっての最大の貿易パートナーとなっているため、両国の経済は密接な関係にある。中国では至る所で日本ブランドの自動車や電子製品また洋服などの商品を目にすることができる。同様に東京の地下鉄でもHUAWEIのスマートフォンのCMを目にすることができる。

文化交流の面から見ると、毎年留学で日本を訪れる中国人学生数は9万人以上で、日本における留学生の6割以上を占め、最も大きなグループとなっている。日本の書店では、中国の論語や道徳経などの書籍を見かけ、中国では日本のアニメが多くの人から好かれている。食事の面では、東京にはチャイナタウンがあり、街では中国料理のレストランを良く見かける。同様に北京では日本料理のレストランを良く見かける。また日本に行ったことのある人なら、たとえ日本語ができなくても日本語で書かれたものの意味をある程度理解することができるという経験をしていると思うが、それは日本語には多くの漢字が使われているからである。

経済であれ文化であれ、または仕事であれ生活であれ、日中両国は密接な関係にある。

日中両国の間で戦争が起きるのではないかと常々言う人がいるが、上記の分析から、日中両国はこうした巨大な利益を見放すことはあり得ず、しかも両国共に戦火による損失に耐える能力は持っていない。そのため、平和的な付き合いこそが、中国そして日本にとって最良の両国関係なのである。

ただし、日中間の対立も大きなものとなっている。歴史的に見れば、日中間には幾度もの対立や衝突があり、日清戦争や日中戦争などの歴史的事件の傷痕は今でも中国人それぞれの心に残っている。現在では、中国と日本の間に多くの領土や貿易などの摩擦が存在している。これらについて薛公使参事官からは、中国と日本は隣人であり、こうした小さないざこざは隣人だからこそ起こるものであり、またこうした摩擦は日中関係の大局に影響するものではなく、両国間の戦争を引き起こすものでは尚のことないとのことであった。

そして最終日の歓送会では、大使夫人から、現在日中双方の民間における好感度は低いが、各方面が努力を続けている。国家レベルでは数年前に交渉を通じて尖閣諸島の問題を鎮静化し、対立の状況を回避している。民間レベルでは、私たちのような大学生同士の青年交流が活発であり、今回は私たちが日本を訪れたが、今後日本の大学生も同様の形式で中国を訪れ、若者世代の相手国への理解を通じて友情を確立していく、といった現段階における日中関係の状況についてのお話があった。

**感想**

今回の訪日を通じて、私たち理工大学の学生は皆日本について新たな印象を持った。日本では環境であれ人であれ、皆私たちに素晴らしい印象を与えた。私たちも今後日中友好に自分たちなりの貢献をしたいと思う。これこそが今回の活動における主な目的と意義だと思う。

# 日本を感じ中国を知る

北京語言大学学生代表

**見学日時：2016年12月5日（月）16:30-19:30**
**見学場所：法政大学**

**見学概要**

12 月 5 日午後 4 時、第 19 回「走近日企・感受日本」大学生訪日団一行は法政大学を訪れ、3 時間余りの学習と交流を行った。日本における一流大学である同大学の教育設備や素晴らしい学習環境はいずれも私たちの興味を引いた。ここで私たちは「現代の遣日使で著名な知日派学者」である王敏教授の講義を拝聴することができた。王教授は 2016 年の日本における流行語である「神ってる」を基に、宮崎駿のアニメ、そして自然信仰、ユニクロ、無印良品、100 円ショップなどの簡素なセンス、および日本は中国伝統文化要素の宝庫であるという 3 つの面から王教授の日本に対する考察の成果について紹介があり、さらに日本を通じて中国を説明する、中国に日本を観察させるという関連の見解にも言及された。王教授のスピーチは多くの例を挙げる形で奥深くまた分かりやすく、皆は大きな収穫を得ることができ、今回の訪日の意義についてもより深い理解が得られた。その後、訪日団へ王教授自身の書籍が贈呈され、訪日団一行や先生方との懇談会を通じ、相互に交流を深めた。

**知っていますか？**

問：法政大学が中国近代の政治家や教育家のゆりかごとして評価されていることを知っていますか？

答：法政大学は中国近代の政治家や教育家のゆりかごとして評価されており、清朝末期における法律・政治人材を最も多く輩出した大学で、中国人の日本留学史においても重要な意義を有している。同大学は1904年に清国留学生法政速成科を開設し、その卒業生は中国の法律・政界において広く活躍し、清朝末期の法政学堂の建設や法律・政治人材の育成等の面で非常に大きな貢献をし、同盟会の成立や辛亥革命の成功にも彼らは大きく関わっていた。毛沢東の教官である孔昭綬と、蒋介石や蒋経国の教官である顧清廉、そして中華人民共和国における最初の法典の作者である沈鈞儒はいずれも法政大学出身である。新中国の初代総理の周恩来もかつて先達の重要な使命を引き継ぎ、法政大学付属学校へ通った。

問：日本にはどのような中国の伝統文化の要素があるか知っていますか？

答：日中両国は共に漢字を使用する国であり文化交流も頻繁である。皆さんが承知している書道や茶道以外にも、王敏教授は大禹や養蚕という新たな答を私たちに示した。日本では定期的に禹王まつりが盛大に開かれ、大禹の治水の功績を称え、そして供養をしている。京都御所の「大禹戒酒防微図」も古代の日本にすでに大禹の文化があったことを証明している。統計によると、1894年から1972年の間、日本各地の18ヵ所に大禹の記念碑が作られている。養蚕に関しては、日本の忌宮神社には蚕種の記念碑があり、また歴代の皇后陛下も養蚕を行っている。これらはいずれも日本に多くの中国伝統文化の要素が存在していることを物語っている。

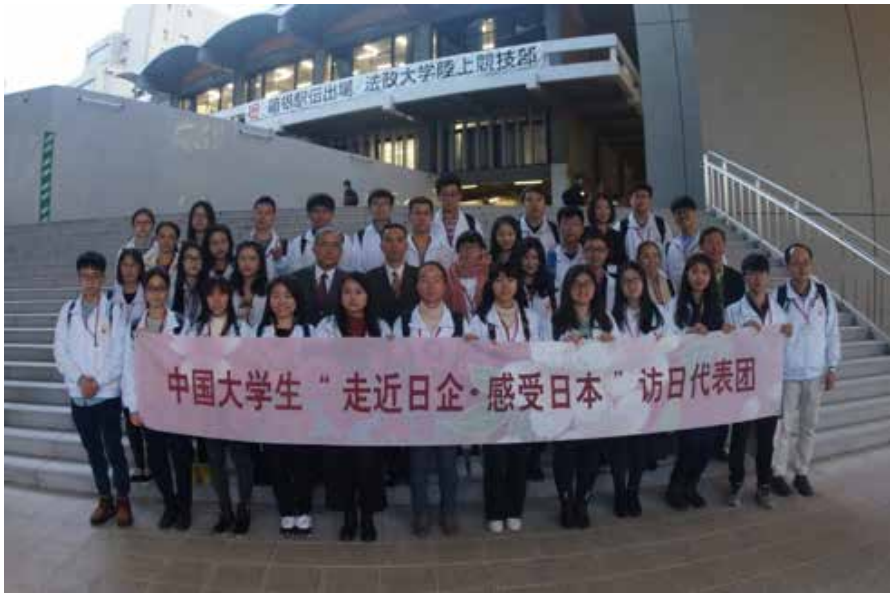
**感想**

今回の法政大学訪問において、王敏教授の「日本で何を感じるか？」のスピーチはとても印象深く、私たちは日本についてより深い理解をすることができた。

初めて日本を訪れ、その美しい自然環境であれ企業や工場の環境保全理念や社会的責任感であれ、これらはいずれも私たちに深い印象を残した。まさに王敏教授の言うとおり、これは日本人の自然信仰と深いつながりがある。日本人は常に自然を信奉し、手つかずの自然におけるあらゆる自然形態を崇拝する先人が信仰してきた風習を守り続けている。その中でも森林については、世界第三位の森林率を誇り、それもこうした風習のお蔭だと言える。こうした自然や生態との距離感が日本人により環境保全を促し、簡素で上品な生活観をもたらしたのである。かつての福田康夫首相を例とすると、常にエコカーの使用と温故知新を主張していた。

中国の伝統思想にも似た理念があり、「老子」の見素抱朴、少私寡欲、「庄子」の純素之道はいずれも生態文明、簡素な生活の道を含んでおり、漢字文化圏全体に恩恵をもたらした。高速成長を続ける今日の中国において、私達はしばし足をとめ、この哲学の知恵としっかり向き合い、今後の方向性について考える必要がある。習主席もグリーン発展を打ち出し、環境への優しさがつまり国民の生活であると強調している。

こうしたことから、日中間の文化交流は今後の両国の発展に大きく寄与していくと考えられる。



# 環境保全への取り組み-ホテルニューオータニ東京

中国農業大学学生代表

**見学日時：2016年12月6日（火）10:00-11:30**
**見学場所：ホテルニューオータニ東京**

**見学概要**

最終日、私たちは 3 日間宿泊したホテルニューオータニを見学した。自らの宿泊体験を通じ、私たちはすでに同ホテルの豪華さや規模の大きさを体感していた。こうした高級ホテルにおける資源処理量は非常に大きなものであり、この日の見学は同ホテルのエコ型資源利用への取り組みの紹介であった。

私たちの見学内容は以下の 4 つ:

一つめは、ホテルの自家発電施設である。スタッフの案内の下、私たちは地下三階の発電施設を訪れた。発電施設が地下深くにあることで騒音の影響を効果的に減らしている。当施設はガスを主要燃料としており、ホテルの 3 分の 1 の電気使用量を賄っている。ホテルがこうした自家発電施設を持つことで、経費を節約できる他、緊急時の予備電源とすることができる。この他、私たちは神棚が作業場に置かれていることに気が付いた。祀られているのは火の神で、火災等の災害が発生しないよう祈願している。こうしたところにも日本の神道文化が示されている。

二つめは、廃水の再利用システムである。ホテルの厨房廃水はパイプラインを通り処理池に集まる。そしてまず廃水内の異物をろ過し取り除き、その後活性汚泥中の微生物により廃水中の有機質を処理する。この時廃水は茶色である。最後に沈殿と殺菌をし、再利用可能な水となり、上水（飲用可能）、中水（トイレ用）、下水（灌漑用）に分けられる。同システムでは毎日約 2000 トンの水を処理している。この他、ホテルには 16 基の木製タンクがあり、各タンクは 90 トンの水を貯めることができる。これらのタンクには殺菌作用があり、このタンクの中の水は直接飲用が可能である。日本の水道水は直接飲用可能で、どのようにそうした基準を満たしているのか私たちは非常に興味深かったが、今回見学したホテルの水処理システムは私たちを啓発するものであった。

三つめは、生ごみを利用した化学肥料の製作である。昔ホテルニューオータニでは、毎年ごみの焼却に 3500 万円の経費が掛かっており、高コストと同時に環境汚染も招いていた。しかし同ホテルではその後約 1 億 1000 万円を投じ生ごみから農業用有機肥料をつくる設備を構築し、その後 4 年間で投資分を回収し、環境保全と同時に完成した化

学肥料を農家へ提供している。

四つめは、ローズガーデンである。ローズガーデンはホテルニューオータニの屋上スペースにあり、30 種類以上のバラで構成されている。花々の間に立つと、清々しい気分になり、暫しこの鉄筋に囲まれた都市を離れ、自然の豊かさを感じることができる。ローズガーデンで使用する化学肥料の一部はホテル内の生ごみをもとに作られたもので、農業学の見地から見ると、ホテルニューオータニは生物から腐植質そして生物という物質の循環を実現しており、持続可能な発展の理念に符合している。日本は非常に緑化を重視している国であり、屋上のローズガーデンは観賞用としてだけでなく、空気の浄化作用もあり、また室内の温度を調整する効果もあるなど、生態環境の改善に重要な意義を有している。

**知っていますか？**

問:ホテルニューオータニの成り立ちについて

答:ホテルニューオータニの歴史は1962年に始まった。当時日本政府は2年後の東京オリンピックを控え、約3万名の外国人観光客を受け入れるという目標を掲げて大規模な建設を行っていた。ホテルニューオータニの創始者である大谷米太郎は、皇居近くの紀尾井町に最高のホテルを建設することに同意し、これにより日本における旅行業の発展に大きく貢献した。

**感想**

3 日間の宿泊体験により、私たちはホテルニューオータニの整った設備やきめ細かなサービスといったものについて印象を深めたが、最終日の見学によって私たちは同ホテルについてより理解を深めることができた。ホテルニューオータニは、小型の都市システムに近く、私たちが見学した部分はまるで一頭の巨大な灰色の獣がこの都市の地下に静かに住みついているようで、またそれは常に動き続ける心臓のように、この小さな生態システムのサイクルを動かすために止まることを知らない強大なエネルギーを届けているように感じられた。

スタッフの案内の下、私たちはまずホテルの使用電力の 30% を賄う発電ユニットを見学した。こうした天然ガス発電は従来の方法よりエコであるだけでなく、緊急時におけるホテルの電力供給を保証することができ、ゲストへのより快適な環境の提供につながる。例えば、2011 年の東日本大震災の後、東京では計画停電等の節電措置が採られ、多くの企業がその影響を受ける中、ホテルニューオータニは自身の発電システムにより、ホテルの通常運営を保証し、計画停電の影響を全く受けなかったのである。

ホテルの汚水処理システムは廃水の循環再利用を実現している。廃水はパイプラインを通じ処理池に集められ、ろ過により廃水中の異物を取り除き、その後活性汚泥中の微生物の働きにより廃水中の有機質を処理する。そして最後に沈殿と殺菌によりトイレの洗浄や灌漑に利用可能な水が生まれる。沈殿物も捨てることはせず、更なる処理を経て肥料やタンパク質素材に変わる。廃棄物を利用可能なものに変えるという考え方はこの汚水処理において充分に体現されている。ここではまたホテルの貯水設備である大型の木製タンクを見かけた。こうした伝統的な除菌方法を使うことで自然の力を発揮し、水資源の二次汚染を防いでいる。

固形ごみの処理場内で私たちは大きな樽に入った生ごみが処理設備に運び込まれる様子を見かけた。紹介によると、ここでは毎日 5 トンの生ごみが処理されている。まず、蒸気処理により生ごみ内の水分を 20% に下げ、その後堆肥工場で 3 ヵ月間の発酵処理を行い、最後に有機肥料として農家に提供される。その見返りとして、農家は割安な価格でホテルに高品質の野菜や果物を提供している。こうした一連のプロセスにより、ホテルはごみ処理費用を節約できるだけでなく、食品の買い入れコストも減らしている。全設備には 1 億 1000 万円が投入されたが、その後の 4 年間でこれらの投資をすべて回収している。

朝食時に眺めることができる庭園であれ、あるいは屋上のローズガーデンであれ、ホテルの緑化への取り組みは印象深かった。ローズガーデンは屋上の緑化を極限まで高めたもので、都市のヒートアイランド現象を隔絶できるだけで

なく、結婚式場にもなる魅力が存在している。

ホテルニューオータニは設立当初から、「複合エネルギー型ホテル」という目標の実現に努めており、ゲストの要望を満たすと同時に環境への配慮と持続可能な発展にも力を入れている。そこで我が国のホテル業界の発展について目を移すと、ゲストへの完璧なサービスを追及すると同時に、ホテルは都市の生態システムの一部として担うべき相応の社会的責任についても考えるべきではないだろうか？環境保全は責任であるが負担ではなく、一種の質実で健康的な、天を敬い、人を愛する生活のあり方で、同時に一種の効果的な節約、収入獲得のモデルでもある。資源環境の犠牲の上に収益をあげることは、ほとんどの業界の初期段階における共通した弊害であり必ず通過する過程であるが、こうしたモデルの上に成り立つ収益はボトルネックに到達すると、それ以降成長を続けていくことは難しいのである。水平方向の最適化、ひいては基本に立ち返るという流れは今後より明らかになり、産業構造の転換、企業文化の構築、社会教育、付帯する体制の改革は今後必然的なものになる。ホテルニューオータニの発展理念は、我が国の多くの企業にとって次の段階の発展における模範そしてビジョンとなるべきである。

# 歓送会について

国際関係学院学生代表

**日時：2016年12月6日（火）12:00-14:00**
**場所：ホテルニューオータニ東京**

**概要**

歓送会ではまず初めに、日中経済協会と中日友好協会の代表者から挨拶があり、さらに今回の訪日活動へ参加した六大学の学生代表が、この 8 日間において自らが見聞きし、また体験したことについての感想を述べた。皆はいずれも日本へ素晴らしい印象を持ったようであった。日本企業の進んだ理念や大きな社会的責任感、日本人の優しさ、日本の美しい風景やきれいな空気などは、私たちに素敵な思い出として残った。また歓送会で印象深かったのは、中華人民共和国駐日本国大使夫人のスピーチであった。

（大使夫人によるスピーチの様子）

大使夫人は次のように述べた。「現在日中両国の関係は、経済、文化、教育等の分野においては良いものがあるが、私たちが知っての通り、両国の関係は友好的とは言えない状況である。その理由は両国における相互信頼が欠けているからであり、これは非常に重要な点である。日本人の中国への印象はニュースや各種メディアから得られるものに止まっており、彼らは中国がとても危険なため、旅行ましてや仕事にも来たくないと考えている。しかしこのような中国に対する実体験の欠如がこうした相互の不信頼を日ごとに悪化させている。しかし幸いなことに、2007 年から『走近日企・感受日本』の活動が展開されて以降、すでに 500 名以上の中国の大学生が日本を訪れており、これは日中両国の関係改善に大きな意義を有するものである。」最後に大使夫人は、私たちが今回の「走近日企・感受日本」活動を通じて感じた日本への印象を自分たちの家族や友人に伝え、彼らに本当の日本や日本人について知ってもらうことで、多少でも日中関係を前進させる役割を果たすことができれば、今回の訪日の甲斐もあったと言えるだろうとの期待を寄せた。

私個人について言えば、今回の活動では美しい風景以外に最も印象に残ったのは、日本人の他人への思いやりや気配りであった。工場や企業の見学を終える度に、そこの従業員の皆さんが私たちの姿が見えなくなるまで手を振

って別れを惜しんでくれたことは、今でも覚えている。この他、私のホストマザーは私が音楽好きと知り、ピアノ演奏と歌を聴かせてくれた。これには心から多くの感動が湧き出る思いがした。また彼女は、自身が大事にしているピアノの曲を紹介したり、私をつれて散歩したり、私のたくさんの質問にも答えてくれた。

今回の訪日活動において、私は多くの思いやりと温かみを感じることができた。こうした温かみは、正に私自身が将来同じような温かみを持った人となり,今後の人生においてこうした温かみをより多くの人へ届けるように促すものである。

**知っていますか？**

問:ホストファミリーはなぜ大学生をもてなすのか？

答:ある団員のホストファザーは、自身が若い頃に中国の東北地方へ留学に行ったことがあったが、東北地方がとても寒いことを知らず、薄着でしかも目的地に向かうためのお金を持ち合わせてなく、また泊まる場所もなかった。その時、とある一人の中国人が彼に同情し彼を自分の家に招き、温かい服を着させて、さらに食事をご馳走した。ただ残念な事に当時彼は片言の中国語も話せなかったため、その中国人に感謝を述べることができなかった。そして彼は現在その時の無念を埋め合わせるために、当時の彼と同じ私たち大学生をもてなすホストファミリーとなっている。

**感想**

歓送会は私たちの今回の訪日活動における最後のイベントであり、席上では中国駐日大使館のスタッフや私たちをもてなしてくれたホストファミリーなど多くの方々と再会できた。しかしこれが最後の面会かもしれない。「歓」送会ではあるが、その時の私たちの心には名残惜しさが入り混じった複雑なものがあった。曾粤儀さんのホストファザーがかつて一人で中国の東北地方へ留学した際に現地の人の手助けを受けたが、言葉の問題で恩人の連絡先をもらうことができず恩返しができないため、彼はこの恩を彼が関わる全ての中国人に返しているという話を聞いた。彼ら一家四人はこの日のためにお子さんの学校も欠席し、私たちの歓送会に参加し、彼の二人のお子さんは折り紙で作った風車を会場のすべての中国人学生に手渡し、私たちの乗ったバスが空港に向かう際には、私たちの姿が見えなくなるまで手を振ってお別れをしてくれた。こうした日中両国の民間の友情に私たちはとても感動した。また今回の８日間の訪日では、私たちは日本商会、企業、学校やホストファミリーなど日本の様々な方面から手厚い歓迎を受けた。この恩を私たちは忘れることなく、今回の８日間の出来事を帰国後に周囲の人へ伝えていきたい。日中両国の政治・外交関係は予測不可能ではあるが、私たちはできる範囲で日中両国の民間の友好を継続していくべきである。

（学生や教師が歓送会会場の入口でゲストを出迎える様子）

# 学生たちの感想文から

学生たちは毎晩、一日のスケジュールを終えてから日記形式の感想文を書き、第 19 回訪日の記録とした。以下、その一部を紹介する。

**日　付： 11月29日（火） 1日目**
**大学名： 北京師範大学**
**氏　名： 賀婷雅**

訪日初日、私は今回の活動にとても良い印象が得られ、今後数日の活動が楽しみになった。

飛行機への搭乗時に見た横断幕とその標語は、温かみと安心を感じさせるものであった。

JALのサービスの質と設備について直接的な体験をした後、私たちはJALの整備工場を訪れた。こうすることで訪問自体への興味がより高まり、同社についてより良く理解できるのである。フライトアテンダントのアナウンスや会釈、変わらない笑顔そして優しい話し方から、JAL整備工場のスタッフの真剣な表情と工場内の大きな時計、そして「生命を大切にする」、「時間を大切にする」の文字は人々の日本航空への信頼を高めるものであった。

良い評判と人々からの信頼は、自らの努力で勝ち得るものであり、客が与えるものではない。長い間の継続、たゆまぬ態度、責任感以外にも、細部へのこだわりが感動と安心をもたらしている。それはこの「走近日企・感受日本」事業のように、たとえ何度も行っていても、緊張感を失うことなく、また単純な「流れ作業」にならず、従来通りに誠心誠意行われている。これは本当に素晴らしい精神で、とても感動そして感謝をしている。

**日　付： 11月29日（火） 1日目**
**大学名： 北京理工大学**
**氏　名： 王韞**

今日は訪日の初日で、朝早く空港に集合し、様々な検査を経た後日本へ向かう飛行機に搭乗した。引率の先生やガイドさんはとても気配りが行き届いていた。

羽田空港に到着した私たちはまずJALの整備工場を見学した。そこではまず日本航空についての紹介があった。同社は長い歴史があり、現在では整ったシステムを有し、国内外における巨大な輸送処理量を担っている。紹介の後、私たちは工場内部においてJALの運営状況を間近で体感した。工場内には飛行機が数機停泊し、多くの作業台があり、数名の制服姿のスタッフが忙しそうに作業をしていた。紹介によると、工場内には1980年代の飛行機が収蔵されており、かつて日中国交正常化やジャイアントパンダ来日などの歴史的事件に関わったとのことである。この他日本航空での運航を終えた多くの飛行機は、タイやアフリカなどの発展途上国向けに売却され、現地で活躍を続けている。

JALの見学において私は、一企業の実力はその技術力が大きなウエイトを占めているが、企業内部のソフトパワーも同様に重要であると感じた。しっかりした技術力以外にも、見学や展示面での整った環境、そして象徴的意義のあるものを記念として保存する、こうしたJALのような企業は真にハードパワーとソフトパワーを併せ持つ企業である。

見学を終えた後、私たちは大阪行きの飛行機へ乗り、大阪で豪華なビュッフェを体験した後、宿泊するホテルに到着した。

初日の体験は順調であった。明日も楽しみにしている。

**日　付： 11月29日（火） 1日目**
**大学名： 北京語言大学**

**氏　名： 沈丹**

期待と不安を胸に、私たちはついに「走近日企・感受日本」の旅を始めた。今日は初日ということもあり、私たちはJALの整備工場のみを見学した。

見学自体はわずか1時間程度であったが、私は飛行機に乗ったその時からJALとの密接な繋がりを感じていた。その思いやりあるサービスは3時間の旅を快適なものに変え、美味しい機内食は私を虜にした。そして工場に到着した後、私たちはまず飛行と飛行機に関する基礎知識について学び、その後歴史的な陳列物や模型を見学した。ただ残念だったのは模型に乗り機長体験をすることができなかったことである。

その後の整備工場見学では、飛行機の異なる名称についての「秘密」、ボーイング777との初めての至近距離での接触、日本の初代の飛行機の正体など飛行機についてあまり知識がなかった私にとり、とても多くの収穫があった。また同時に私たちは飛行機が着陸する様子を二度見学することができた。そしてその時の陽の光がやさしく顔を照らすと、心の中に不思議と嬉しさがこみ上げてきた。

ことわざに「民は食を以て天と為す」とあるが、旅の疲れはもちろん美食で癒されるものである。今日のスケジュールは楽しいビュッフェと中島さんからの念入りな注意事項の説明によって終わりとなった。明日はどういった一日となるだろうか、私は今から楽しみである。

**日　付： 11月29日（火） 1日目**

**大学名： 北京語言大学**

**氏　名： 陳婧怡**

朝4時の北京の様子を見たのは久しぶりであった。出発のこの日は緊張と興奮が入り混じり、昨晩はベッドに入ってからも何か忘れ物はないかと気になっていた。そして朝起きてからは改めてパスポートから資料や荷物など確認をし、ついに8時25分の飛行機で東京へ向けて旅立った。

初めての出国で、内心は興奮と不安に満ちていたが、印象深かったのは日本側のスタッフや先生そしてフライトアテンダントの皆さんが常に礼儀正しかったことである。お辞儀に加え「ありがとうございます」の一言には、さすがに日本は礼儀正しい国だと思わされた。また空港で預け入れ荷物を引き取る際、とあるおばあさんが一人でベルトコンベア上のスーツケースを取ろうとしたところ、近くにいた中年男性がそれを手伝い、おばあさんが感謝を述べると、その中年男性もお辞儀をしてそれに応えていた。これは些細なことではあるが、こうしたことからは日本人の優しさや礼儀正しさが感じられた。

東京に到着後は日本航空の整備工場を見学した。そこはとても大きかったが整然としていた。また至近距離で整備中の飛行機を見て、整備スタッフの皆さんへの尊敬の念が生まれた。彼らの努力が正に、人々の生命と安全を守っているのである。

その後、午後5時30分に大阪に到着した。ここでは今日初めての正式な食事をとることができた。夕食はとても豪勢であった。食事の後、中島さんの案内のもとホテルに到着し、この日記を書いて今日のスケジュールは終了となった。

疲れたが楽しい一日であった。おやすみなさい、大阪。

**日　付： 11月29日（火） 1日目**

**大学名： 中国農業大学**

**氏　名： 呉延**淞

今日は訪日の初日で、朝の4時に起きて急いで空港へ向かったが、今回の訪日への情熱が冷めることはなかった。セキュリティチェック、出国審査、待合そして搭乗とすべてが順調で整然とし、今この時日記を書いている自分がすでに大阪のホテルにいることが想像できず、この日の楽しい経験がまるで夢のように感じられた。

初めての出国で、旅の途中のあらゆるものがとても新鮮に感じられた。日本人の客や他人への親切さ、マナー、お辞儀、笑顔そして挨拶には、思わず尊敬せずにはいられない。中国は5千年の文明の歴史を持つ国であるが、かつての礼儀というものについて、今では当時中国に学んでいた日本に及ばないのである。この現状には考えさせられるものがあった。

バスの中では、ガイドの方から「日本人は子供の頃から自分のことは自分で解決し、他人に迷惑をかけないように教育されている。」という話を聞いた。対して中国では物欲に満ち溢れ、騒々しい街の生活はすでに多くの人に他人への思いやりや他人へ迷惑をかけないことを忘れさせている。中学生当時私のクラスの担任の先生が、素養の高い人というのは、周囲の人を心地良くするものだといつも言っていた。今回の訪日では、この言葉についてより深い理解が得られ、自分の道徳心や素養に対し、他人に迷惑をかけないというより高い基準ができた。

日中私たちは日本航空の整備工場を見学した。見学の際、日本側の中国人通訳者は、日本側の一連の天皇陛下搭乗、田中角栄首相搭乗、中国から贈られたジャイアントパンダの輸送といった歴史的事件についての紹介の際に、中国国際航空や中国南方航空などではこうした相応の歴史的記録がなく、企業として最後の砦となるのはその文化的歴史的基礎であると述べていた。

総じて言えば、初日はとても収穫が多く楽しかった。二日目も楽しみである。

**日　付：11月29日（火）1日目**
**大学名：国際関係学院**
**氏　名：王蓉**

今朝、私たちは東京に向かい、8日間の日本企業訪問の活動を開始した。私たちが乗った日本航空も今日訪れる最初の企業ということで、皆は期待に胸を膨らませていた。

お昼に東京に着いた後、私たちは早速日本航空の整備工場に向かい、飛行原理などの解説に耳を傾けた。本来飛行機は交通手段の一つだが、飛行機の安全運航は整備士によって厳しく守られている。速度、高度、風向き、時間などこれらはすべて細かな測量と計算が行われ、乗客一人ひとりの生命の安全を担っているのである。こうした職業倫理に私はとても感服させられた。その後のシミュレーター見学では、機長やフライトアテンダントの衣装を着て記念写真を撮ることができた。そしてコックピットでは直に運航乗務員の業務環境を体験することができた。目がくらむほどの様々なボタンを見て、私はこの業務には並外れた才知と注意深さが必要だと感じた。

また初めての訪日ということもあり、私にとって印象深かったのは日本のサービススタッフがとても親切だということであった。客が何を言おうが常に笑顔で対応する姿に私は人としての温かみを感じた。これまで中国国内で何度かこうしたこと聞いたことがあったが、自分が体験するのとは多少違う感覚がした。いずれにしてもこの点に私は日本の優しい一面を感じ、今後7日間の活動が楽しみになった。

一日に二回飛行機移動がありとても疲れたが、日本での初体験を経て私はやはりこの国が好きになった。今日はしっかり寝て、新たな一日に備えたいと思う。

**日　付：11月29日（火）1日目**
**大学名：国際関係学院**
**氏　名：杜佳蓉**

東京行のJL20便の搭乗口で日本航空のスタッフからの歓迎を受けた。彼らは歓迎の横断幕を掲げ、さらに中国語で「ようこそ」と声をかけてくれた。これには朝早くから日本側の熱意を感じ、飛行機に乗るため早起きしたにもかかわらず、すぐに気分が良くなった。

この他、引率のスタッフの心配りには驚かされた。中島さんは私たちの体調を気遣い予め様々な薬を準備し、集団

行動の際は毎回年配の団長さんが列の最後尾で全員がついてきているかを確認し、さらにはホームステイ先に向かう交通費すらも準備してくれていた。こうした彼らによるスケジューリングや細部への気配りによって、私たちの旅は順調なものになっているのだと思った。

午後は日本航空の見学であった。私は初めて間近で飛行機の全貌を目にし、同時に飛行機の整備に関しておおよその理解ができた。一企業が最終的にもたらすサービスは、飛行機の整備、離陸、着陸そしてフライトアテンダントによる細やかなサービスなど、企業の各部門の厳しい管理によってもたらされる成果だと感じた。企業は国民経済の細胞であると言うが、各企業は内部の各部門の調和が必要であり、皆が自分の仕事を全うすることで企業の価値が最大限発揮され、またそうすることで国の経済の発展が推進されるのである。

**日　付：11月30日（水）2日目**
**大学名：北京大学**
**氏　名：楊涵**

偉大な豊臣秀吉が永遠にこの街を守っている。

パナソニックは世界に名だたる電気製品の企業であり、松下幸之助の物語は幼いころから耳にしていた。そしてこの日は大阪にあるパナソニックエコテクノロジーセンターを見学し、そこではパナソニックのもう一つの姿である環境への優しさに触れることができた。生態環境の保護のため、パナソニックは多くの資金を投じこのエコテクノロジーセンターを建設し、古い冷蔵庫や洗濯機、またブラウン管テレビなどを回収している。そうした中私がもっとも興味深かったのは、彼らの家電回収ラインに使われている原理であり、浮力や反射波長といったものは私が学校で学んだことのある理論知識だが、パナソニックではこうした知識を巧みに設備に応用し、廃棄部品の仕分けを行っており、とても感心させられた。使用済家電の回収や処理の面において、パナソニックは日本ひいては世界でも最先端にあり、彼らは新型家電の生産と同時に、家電の回収を考慮し、使用済家電の回収率は90%に達している。こうした環境保全への取り組みは私たちが学ぶべきものである。

午後は大阪大学を訪れた。ここで私が一番興味を持ったのは、彼らのレーザーエネルギー学研究センターであった。というのも自分の専攻に関係があり、私自身学校の光学討論班でレーザーに関する紹介をしたことがあるため、こうした分野には比較的詳しかったからである。ただ正確には私自身もレーザーの実験室を初めて訪れ、また教授も日本語で解説をしていたが、その大部分の原理については理解をすることができた。その後の質疑応答で私は二つの質問をしたが、回答したのは中国出身の先生であったため、この時ははっきりと理解することができた。その後は大阪大学の学生との交流で、日本の学者の科学研究に対する真摯な態度について知ることができた。

**日　付：11月30日（水）2日目**
**大学名：北京語言大学**
**氏　名：陳婧怡**

お早う、大阪。

この日は朝6時に起きて大阪城公園を散策した。12月間近の大阪はまだ冬の訪れを感じさせず、その水墨画のような風景は、私のような写真撮影が苦手な人でも絵葉書のような写真が撮れるほどであった。風景が良く、また空気も良く、気分も自然と良くなった。

豪勢な朝食の後、私たちはバスで今日の最初の見学先であるパナソニックエコテクノロジーセンターを訪れた。パナソニックエコテクノロジーセンターの理念は、商品から商品への資源循環型モノづくりであり、スタッフの解説や実際の見学を通じて私たちはこうした理念への理解を深めることができた。パナソニックは松下幸之助氏による創設当初から環境保全の理念を有し、企業が発展していく中で、次第に地球環境との共存という目標が確立されていった。また

パナソニックエコテクノロジーセンターの創設は、より多くの就業機会を提供するもので、障がい者へも特別業務を提供しており、日頃から多くの学生が見学に訪れ、彼らに資源の大切さを教えている。こうしたことに私はとても感動させられた。正にパナソニックの環境保全理念が人々の信頼を獲得し、それが企業の安定成長に繋がったのかも知れない。環境保全の面において中国および中国企業が日本企業に学ぶべき点はまだまだ多く、より良い地球環境のために共に協力していくべきだと思う。

大阪大学の近くでの昼食の後、私たちは今日の2つめの見学先である大阪大学吹田キャンパスを訪れた。ここではまず手厚い歓迎と挨拶の後、皆は同大学の物理学研究、核融合によるエネルギー提供について見学した。その後日本の学生と中国の学生が共にグループに分かれてそれぞれが選択したテーマに沿って交流と討論を行った。一時間を超す交流で皆は打ち解け、熱のこもった討論が繰り広げられ、その後5つのグループがそれぞれ発表を行った。その際日本や中国の学生のユニークな発言がある度に会場はとても盛り上がった。グループ討論終了後は両国の学生が夕食を共にし、食事での交流を通じて互いの友好を深め、Lineの交換をしたり、再会の約束をしたりする姿も見られた。こうして今日の日程も終了となった。その後私たちは新幹線のぞみ号に乗り、次の都市である名古屋に向かい次の旅に備えた。

おやすみなさい、名古屋。

**日　付：11月30日（水）2日目**
**大学名：中国農業大学**
**氏　名：雷超**

今朝起きてから朝の天守閣を見ると、色合いがよりはっきりとし、夜よりも更にきらびやかに見える。ホテルでは洋食以外にも和食も堪能でき、とても幸せだった。

パナソニックエコテクノロジーセンターでは、思わず日本の家電回収産業に感心させられた。厳しく制御された回収ラインでは部品や材料の一つひとつがきちんと仕分けされていた。そして同社はまた文化教育も重視しており、学生を対象とした環境保全意識教育を行っている。こうした点は私たちも学ぶべきだと思った。

お昼は本格的な洋食であったが、一部の学生の口には合っていないようであった。その理由は海鮮（私は青島出身なので生ものは問題なかった）以外にも食事マナーへの不慣れもあった。ここで提案だが、伝統的な日本料理にしてはどうだろうか？皆の希望の一つでもある本膳料理のような形式がより良いように思う。

大阪大学は革新力が世界で18位、日本で1位ととても素晴らしい。核融合の紹介については、正直なところあまり理解を深めることができなかった。よかった点としては、日本の学生と互いの国への見方などについて意見を交換し、見識を広げ、不足している点を自覚できたことである。晩餐会では、その目的は食ではなく皆が交流を深めることにあり、とても楽しいひと時であった。そして私自身も与水凛さんという初めての日本の友達ができた。彼は中国語が上手で、交流には何の問題もなかった。その他加奈ちゃんという可愛い女子学生とも知り合うことができた。私たちはアニメのワンピース好きという共通点があった。彼らとの再会、そして彼らの訪中を楽しみにしている。

**日　付：11月30日（水）2日目**
**大学名：国際関係学院**
**氏　名：寇家瑋**

朝早くに起きホテルで美味しい朝食を楽しんだ後、この日の活動が始まった。今日私たちはまず兵庫県にあるパナソニックエコテクノロジーセンターを訪れた。同社は2001年4月にパナソニックが資本金4億円を全額出資して設立された。同社の基本理念は「商品から商品へ」、つまり廃棄物を宝物に変えるプロセスであり、同社ではこのプロセスを「トレジャーハンティング」と呼んでいる。現在従業員数は180名、年間処理能力は68万台である。今回同社への見学を

通じて、私はパナソニックの電気製品リサイクルを極限まで高める「自然との共存」の理念がとても印象深かった。

おしゃれな昼食の後、私たちは大阪大学での交流を行った。はじめに大阪大学国際教育交流センターの有川友子センター長からの挨拶があった。その後大阪大学の紹介ビデオを観賞してから同大学のレーザーエネルギー学研究センターを訪れ、レーザーエネルギー学について見学をした。専門的知識については理解できなかったが、非常に強い学術的雰囲気を感じた。ここで最も盛り上がったのは大阪大学の学生との討論であった。私たちが選んだ討論のテーマは日中文化の相違点の比較で、私は恋愛観から討論してはどうかと提案し、結果私たちは日中の若者の交際における相違点について討論をした。例としては、日本の若者は交際中でも食事は基本的に割り勘だが、中国では基本的に男性が支払う。また日本のカップルは公の場でいちゃつく(例えばキスのような)行為はしないが、中国の若者はあまり気にしない、といったことである。その後各グループの素晴らしい発表によって討論が終了した。終了後は彼らと夕食を共にし、胃袋が満たされただけでなく、自分たちの視野も広がった。また彼らとのおしゃべりを通じて日本語の能力も高まり、内面も充実させることができ、今回の活動はとても意義深いものになった。

充実した一日が終わった。今日はしっかり寝て、明日に備えようと思う。

**日　付：12月1日（木）3日目**
**大学名：北京大学**
**氏　名：楊涵**

車山前に到りて必ず道あり、道あるところにトヨタ車あり。

初めてこのキャッチコピーを聞いたのは私がまだ小さい頃で、当時は日本車についてはあまりよく知らなかった。周囲では日本車の排気量が小さく、ドイツ車の排気量が大きいということで、ドイツ車を選ぶ人が多かった。しかし今回トヨタ自動車での見学を通じて、私自身日本車についてより理解を深めることができた。トヨタの生産工場には大規模な生産ラインがあり、プレス、溶接、塗装、組立など各段階に大量のスタッフがいて業務を行っている。そしてチームリーダーが指導を行い、ひとたび問題が判明した場合、スタッフはアンドンを使いチームリーダーに報告することによって、生産効率を保証している。私にとって最も印象的だったのは「トヨタ生産方式」である。「ジャスト・イン・タイム」であれ「自働化」であれ、これらは一見ありふれたものに感じられるが、会社全体がこれらを守りモットーにすることでこれは一種の企業文化となっている。トヨタは1937年の設立から現在まですでに80年近い歳月を歩んできたが、同社はこうしたモットーにより前進を続けてきたのである。現在同社は従来型自動車から電気自動車への転換実現に向けハイブリッド車を開発した。現時点での販売台数は良好とは言えないが、同社は電気自動車の研究開発面でさらに前進を続け、環境保護に更なる貢献をしていくと信じている。また中国の企業もこうした点は学ぶべきだと思う。

日本での訪問も3日目ということで、多少の疲れが出てきていたので、このタイミングで箱根温泉の体験ができたのはとても良かった。私の故郷の遼寧省には多くの銭湯があり、湯船に浸かるのは東北人にとっては日常的だったため、箱根温泉に来ても何の不自由も感じなかった。温泉は疲労回復にとても効果があり、明日からまた元気一杯で活動ができると思った。

**日　付：12月1日（木）3日目**
**大学名：北京師範大学**
**氏　名：蒲飛宇**

昨夜泊まった東急ホテルから外に出ると、多少の冷たさが混じった心地良い空気を感じることができた。昨夜は少し霜が降りたようで地面は湿っており、気を抜くと滑ってしまいそうだった。名古屋の道は他の都市より広く、歩いていても心地良かった。

その後バスでトヨタ自動車元町工場を訪れ、生産プロセスの見学となった。日本語を学ぶ以前からトヨタ車の品質

や評判の高さについては聞いていたが、今日ついに同社の工場を見学することができた。その前に訪れたパナソニックエコテクノロジーセンター同様、元町工場の環境も素晴らしく、日本の工場らしい環境への配慮や社会との共存理念が余すところなく再現されていた。解説スタッフからはトヨタの歴史や圧縮、溶接、塗装、組立などの生産プロセスについて紹介があった。私にとって印象深かったのはトヨタ生産方式である。その一つはジャスト・イン・タイムで、必要なものを、必要なときに、必要なだけ供給するということであり、時間に正確な生産を目指している。もう一つは自働化で、異常を次の工程に持ち込まないということである。これらにその後見たPPTやビデオの内容を組み合わせ、トヨタという企業について多角的に理解をすることができた。私は彼らのきめ細やかさに感服した。これは正に日本人の性格的特徴を示している。

午後は数時間の道程を経て、夕刻6時近くになりついに箱根温泉のホテル天成園に到着した。ここは山間にあるため気温は多少低かったが、寒いというほどではなかった。小さな橋向こうの黄色がかった灯りを見ているととても温かな気分になった。接待スタッフはとても親切丁寧に学生や先生のスーツケースの車輪の汚れを落としてからそれらをホテル内に入れた。そしてルームキーを受け取り、待ちきれず浴衣に着替え、自分の格好を鏡で見たところ、少しは様になっていると思った。それから急いで7階に上がり温泉に入った。私は今でも泳ぎができず、水深のあるところだと胸が圧迫される感じがするため、温泉も長くは堪能することはできなかった。夕食は手の込んだ和食で、皆の歌声と食後の散策の中、夜はまた更けていった。

**日　付：12月1日（木）3日目**
**大学名：北京理工大学**
**氏　名：呉玥瑩**

トヨタ自動車元町工場の見学

午前はトヨタ自動車元町工場の見学で、初めて本物の自動車生産ラインと作業方式を目にした。印象深かったのはトヨタの品質への追求そして効率の最適化と環境への責任感であった。

① 品質：トヨタは一貫して洗練された製品を追求しており、彼らには「自働化」という技術的キーワードがある。「働」は、「動」にニンベンを足したもので、各プロセスに対し高い基準での任務完成を求めるものであり、異常を次のプロセスに持ち込まないことを意味している。仮にあるプロセスで異常を発見した場合は、アンドン（異常表示盤）を作動させるとそのプロセスの位置が表示され、チームリーダーが駆けつけ問題を解決する仕組みとなっている。

② 効率：世界的規模の企業であるトヨタでは毎日の生産量への要求もとても高いため、生産効率も重要なポイントとなっている。生産効率を高めるため、彼らは次のような措置を講じている。〈1〉一本の生産ラインで複数車種を生産。〈2〉ドア無し作業。これによって作業時の車への出入りが楽になり、スペースの節約にもなる。〈3〉ジャスト・イン・タイム。パーツ原料が記された「カンバン」により在庫や入庫をより良く管理し、ムダを回避する。〈4〉サプライヤーが工場の求める順序で納品することで、搬送への人力や時間を節約する。

③ 環境保全：トヨタは「環境に優しい製品は環境に優しい工場と環境に優しい人々によってつくられる」ことを確信し、彼らの製品が社会に貢献できるよう多くの人やモノを新エネルギー自動車の研究に投じている。

今回トヨタの工場を見学できてとても楽しかった。昼食後の質疑応答ではトヨタの中国における発展プランや将来展望などについて知ることができるなど多くの収穫があり、とても満足している。

**日　付：12月1日（木）3日目**
**大学名：中国農業大学**
**氏　名：彭興偉**

昨日の「経験」から、ホテルでの朝食はしっかり食べるべきだと思った。と言うのも、お昼の洋食では満腹にはならないため、朝食をしっかり取ることが今回の旅における鉄則となった。

今日はトヨタの元町工場の見学で、綺麗な尾形さんという女性が私たちを案内してくれた。生産ラインはプレス、溶接、塗装そして組立とあり私たちは主に最後の工程を見学した。記者の趙さんから印象深かったのは何かと聞かれた際、私は「everything is in order」と答えた。皆が自分の仕事のリズムを持ち、ジャスト・イン・タイムの管理の下で高品質の製品が生産ラインから市場に向けて出荷される。そして自働化の「ニンベン」は、動きではなく働きを意味する。ここで私に一つの考えが生まれた。

各スタッフがアンドンを作動させるということは、つまり彼らの仕事にミスがあったか或いは経験不足による上司の手助けが必要な状況が発生したことを意味するが、これでは自分の欠点を晒すことにはならないのか？上司がどのようにそれを判断するのか？減給など相応の処罰が与えられないのか？これらは人の心が試されている。

この他トヨタ会館で自動車文化を体感できたことは、私たちにとって直接的な収穫であった。私たちは車の免許がないがWingletを試乗したところ、やはり運転下手で「事故だらけ」になってしまった。それでも、基地から文化教育まで一体となったこれこそが企業というものだと思った。

昼食の際、私は「文化」に関し「トヨタはどのように新入社員へ企業文化の研修を行っているのか？」と尋ねたが、その最良な答えは、上下一致、至誠業務に服し、産業報国の実を挙ぐべし、という豊田綱領にあると思う。

**日　付：12月1日（木）3日目**
**大学名：国際関係学院**
**氏　名：寇家瑋**

時間通り朝6時30分にルームメイトから起こされ、忙しい一日が始まった。これまで同様美味しい洋食を堪能した後、トヨタ自動車元町工場の見学へ向かった。同工場の面積は天安門の4～5倍あり、工場に足を踏み入れるとすぐにその美しい景色に目を奪われた。自分のこれまでの印象では、工場とは埃っぽく味気のない場所であったが、ここはそれとは違い、赤い楓の葉が私の眼を引き付けた。ただ商業機密の理由で工場内にはカメラや携帯電話の持ち込みができず、写真を撮れなかったのは残念だった。同工場で最も印象深かったのは「カンバン」で、必要な量だけ生産するという理念には驚かされたと同時に、日本企業の「環境への優しさ」という進んだ目標を改めて体感することができた。その次は「良い品よい考」である。良い製品、良い考えは同様に企業の発展や革新になくてはならないものである。その後、私たちはトヨタ会館を見学し、高価な車に乗って記念写真を撮り、最高の気分だった。昼食はトヨタが私たちのために美味しい洋食を手配してくれた。そしてトヨタの工場の見学を終えた後、私たちは5時間近くかけて、今いる箱根湯本温泉のホテル天成園に到着した。

ホテルに入り私たちはすぐに温泉を体験した。日本人の習慣ではまず先に椅子に座り身体を洗い、その後温泉に浸かる。そして露天風呂があると聞き、何の迷いもなく露天風呂に向かった。そしてここにはマッサージもある。本当にこれ以上ないほどリラックスができた。温泉に浸かった後は再び身体を洗い、一日の疲れが吹き飛んだ。夕食では畳の上に座り日本の鍋を食べながら、文化が融合する心地良さを改めて感じた。

同じ学校の団員と一緒に感想を書きながら、これまでの収穫について話し合い、今日一日のスケジュールがすべて終了した。

明日も温泉に浸かりたいと思う。

**日　付：12月1日（金）3日目**
**大学名：北京語言大学**
**氏　名：韓璐璐**

訪日三日目、午前はトヨタ自動車の元町工場とトヨタ会館を見学し、トヨタの発展の歴史や現段階における市場状況や自動車製造のプロセスについて知ることができた。

トヨタは「お客様第一」の考えに基づき、「ジャスト・イン・タイム」や「自働化」といった二大思想を中核とし、先進的技術により開発と生産を行っている。かんばん方式を利用しての時間と労力の節約、アンドンを利用しての問題の速やかな解決により「品質は工程でつくり込む、不良品を次の工程に送らない」を実現している。また新型ハイブリッドカーの開発にも力を注いでおり、現在世界で1000万台以上販売しているなど、環境保全事業にも自らの貢献をしている。

この他、お昼のスライドショーや質疑応答を通じて、1970-1980年代からトヨタは中国の自動車業界の発展に大きな貢献をしていることを知った。「自動車の街」である長春出身の私は、トヨタがはるばる一汽を訪れ技術指導をする様を目にし、とても光栄に思うと同時に感謝の念がこみ上げてきた。またトヨタは両国の民間交流にも力を入れており、一汽や広汽との提携以外にも、環境保全、西部開発、慈善等の公益事業にも積極的に参加している。

その夜は楽しみにしていた箱根温泉に到着した。鮮やかな和服に着替え、温泉を満喫し、仲間たちと楽しい親睦の時間を過ごしたことで、ここ数日の疲れがとれた。これからの数日は東京での活動となる。

**日　付：12月2日（金）4日目**
**大学名：北京大学**
**氏　名：詹文茜**

今朝箱根温泉を離れる際、幸いなことに天気がとても良かったため、富士山の全貌を目にすることができた。お昼、私たちは日本の首都である東京に到着し、和式の昼食を堪能した後、この日の企業見学となった。三菱東京UFJ銀行において私たちは責任者の方から同銀行の状況について説明を受け、日本の銀行のリスクマネジメントへの重視というものを感じることができた。中国国内の多くの銀行では製品プランが先行し、問題点の解決を後回しにしているのと比べ、三菱東京UFJ銀行における製品やサービスのリリース速度は比較的ゆったりしているかも知れないが、その行き届いたリスクマネジメントにより、その歩みはより確かなものとなっている。

この他、私たちは三井物産を訪問した。中国国内にはこのような総合商社がないため、私たちは同社の組織モデルにとても興味を持った。そして夜の懇親会では、さらに自分たちが興味のあることや不思議に感じている点などについて同社のスタッフと交流をすることができた。また特に今晩の交流の際、私はかつて光華管理学院でEMBAを学んでいた多田さんと知り合うことができた。彼との交流では三井物産についての多くの情報だけでなく、彼の北京大学時代の多くのエピソードについて聴くことができ、とても来た甲斐があった。

**日　付：12月2日（金）4日目**
**大学名：北京師範大学**
**氏　名：呂家楽**

早朝の山間に鳥のさえずりが響き、清らかな風がゆったりと吹きつける様子は、その場の静けさをより際立たせ、人と自然が一体となる感じがした。朝食前に温泉に浸かり、その後食事をして東京へ向かった。道中は依然として美しい景色で、富士山の雄大で美しい姿を改めて目にすることができた。そして皆は歌やおしゃべりなど楽しく道中を過ごした。

お昼に私たちは東京へ到着し、高級レストランでの昼食となった。そして午後、私たちはまず三菱東京UFJ銀行の見学を行った。世界でも最大規模の同銀行は、優れた金融商品や付帯サービスなどにより金融業界トップの位置にいる。日中国交正常化の前から、三菱銀行は中国の銀行との業務提携を行い、先駆的な壮挙とも言える円と元との直接両替を実現した。国交正常化後、三菱銀行はさらに中国との業務に力を入れ、中国と日本をより緊密なものとした。中国の各業界における「先に実施、後で問題解決」の進め方とは対照的に、三菱東京UFJ銀行などの日本の金融大

手では先にリスク予測をする傾向にあり、可能な限り環境を整えてから安定的に実施していく。これも中国の各業界が学ぶべき態度である。

その後、私たちは三井物産を見学した。日本有数の総合商社である三井物産では、貿易や投資などあらゆる手段により、世界中の人や情報技術などを繋ぎ、より高い商業価値や社会価値を創造すると同時に日本の国際的影響力を少なからず高め、日本と外国との友好交流を促進している。

その夜、私たちは三井物産での懇親会に参加し、同社の多くのスタッフと交流を図った。その際私は同郷の人と知り合い、異郷の地での同郷人との出会いはとても嬉しかった。懇親会の途中では私のホストファザーも現場に駆けつけ、翌日の移動計画などを話し合った。これにはホームステイがとても楽しみになった。

**日　付： 12月2日（金）4日目**
**大学名： 北京理工大学**
**氏　名： 王韞**

今日私たちは箱根を離れ、日本でもっとも華やかな東京にやってきた。

昼食を済ませた私たちはまず三菱東京UFJ銀行を訪れ、そこでは初めに東アジア企画部の長谷川部長から温かい歓迎を受け、次いで同銀行の状況について紹介があった。三菱東京UFJ銀行の歴史は長く、1919年に遡る。同銀行は世界でもトップクラスの銀行として、多くの国や地域において業務を展開している。また中国においては、同銀行は改革開放以降初めて誘致した外資系銀行であり、中国との関係は長く、複数の都市に支店や事務所を構えている。

その後私たちは地下の金庫を訪れ、ここでは私自身のこれまでの好奇心が満たされた。金庫は私が想像していたのとは異なり、顧客のセーフティーボックスが密集しており、多重のセキュリティ対策がとられ、さらに1メートルの厚さの大きな扉があった。金庫の見学の後は窓口の外で銀行の営業方式を観察した。

そして三菱東京UFJ銀行を離れた私たちは三井物産を訪れた。これまで私は同社については何も知らなかったが、紹介を通じて三井物産は従来のメーカーとは違うことを知った。総合商社である三井物産は直に生産設備を所有するのではなく、企業全体として人を資本とし、マーケティング、金融、物流、リスクマネジメント、工場などについて、あらゆる国や地域のパートナーに対して彼らが求めるサービスやソリューションを提供している。三井物産の主な事業範囲は金属、設備、インフラ、化学品、エネルギー、生活産業および新事業分野で、こうした全方位的なビジネス展開モデルは中国ではほぼ見かけることはない。中国にもこのような資本や技術が充実した多分野にわたる企業が現れてほしいと思う。

**日　付： 12月3日（土）5日目**
**大学名： 北京大学**
**氏　名： 馮莎莎**

今日はホームステイの日。朝、ホテルのロビーでそわそわしながらホストファミリーの到着を待ち始めると、思いがけず私のホストファミリーは早々に私を迎えにきた。その後まず私たちは近くの日枝神社を訪れ、手洗いやうがいからお賽銭を入れての参拝、そして神社の宝物殿の見学など、これまで学んだ「日本文化」の授業の知識以外にも、新たに多くを学ぶことができた。

以前からすでに、私がホームステイ中に行きたい場所や買いたいものなどについてホストファミリーの日出美さんからのメール確認があったので、私も今回体験したいことやその目的などを伝えていた。私は彼女たちと一緒に食材の買い出しなど、最も日常的な生活を体験したかった。これはとても貴重な体験であり、ショッピングや観光は私にとってさほど重要ではなかった。

ホストファミリーのお宅に到着して気付いたことだが、まさに王磊先生の言っていたとおり、ホストファミリーは私のた

めにおそらく長い時間をかけて準備をしていたのだと思った。彼らのお子さんも来て皆一緒に夕食をとり、椅子が変わったとかテーブルクロスが新しくなったなどと言っているのを聞いて、家具も新調したのだと思った。また彼らは私のプロフィールから明日が私の誕生日だと知り、わざわざ皆で私の誕生日を祝ってくれた。

以前からのメールでのやりとりの際、ホームステイ期間中が丁度私の誕生日であることをホストファミリーに伝えようか私は迷っていた。だが誕生日だと伝えてしまえば皆に手間をかけてしまうと考え、メールでは伝えず、実際に会って日本の家庭ではどのように誕生日を過ごすのかを聞いてから改めてどうするかを決めようと思っていた。だが結果的に皆が事前に準備をしてくれていたので、とても嬉しかった。

ホストファミリーのお宅はとてもおしゃれで、庭の木をどうするか、家屋の面積、プランの選択など当時引っ越して来る際の色々な考えについての話も聞いた。家屋は木造でとても軽く、地震が来ても比較的安全に家屋の構造は維持される。こうした点は中国とは異なる。

その夜ケーキを食べる際、皆は私のために誕生日の歌を歌ってくれた。紅茶をすすりケーキを食べ、さらにホストファミリーから誕生日プレゼントももらい、とても嬉しかった。

**日　付：12月3日（土）5日目**
**大学名：北京師範大学**
**氏　名：陶悦**

今日はついにホームステイの日である。私たちは朝9時からホテルのロビーでホストファミリーの到着を待った。数名の団員が次々とホストファミリーとの対面を果たした後、私もついにシゲちゃん（おとうさん）やナオちゃん（おかあさん）と対面した。その後シゲちゃんは先に帰宅しご飯の準備などをし、ナオちゃんは私を東京タワーや秋葉原などへ案内してくれた。また東京タワーでは記念品も買ってくれた。

帰宅すると、シゲちゃんはとても豪勢な夕食を作って待っていた。しかも私は辛いものが好きなので、わざわざ麻婆豆腐も作ってくれていた。シゲちゃんの作る料理はとても美味しかった。食事の際は彼らといろいろおしゃべりし、気が付くと夜9時を過ぎていた。食事後は彼らの旅行アルバム（ナオちゃんとシゲちゃんは普段よく旅行する）も見せてもらい、私はアルバムを見ながら彼らのあたたかな愛を感じることができた。

寝具は彼らが私のために準備してくれたもので、純和式の畳、そして布団はとても美しくきれいだった。

**日　付：12月3日（土）5日目**
**大学名：北京理工大学**
**氏　名：趙家樑**

今日私たちはそれぞれのホストファミリーとの対面を果たし、彼らの決めたスケジュールで行動した。

私のホストファミリーは大人二人、7歳のお子さんそして雨（Ame）という名前の4ヵ月の子犬であった。午前、私たちは皇居と東京タワーを訪れた。きれいな景色はとても印象的であった。

午後、埼玉にある彼らの自宅に戻った後、私たちは色々な話題についておしゃべりをした。その中でも、ホストファザーとホストマザーはいずれもかつて中国での留学経験（約20年前）があり、他にも多くの国を訪れていることを知った。特にホストファザーは、一人でバックパッカーとして北京から列車やバスを乗り継いで成都、西安、ラサそしてネパールまで訪れている。そして彼がエベレスト登頂時の写真を見せてくれた時、私は一瞬信じられない思いだったが彼のすごさに圧倒されてしまった。それ以外にも彼はボートでカナダとアラスカの間の河を越えたこともある。こうした探検そして思い立ったら行動する精神に私は感心してやまなかった。

かつて多くの人の夢は「世界一周」であったが、最近では私自身年齢を重ね、足を運んだ地が増えるにつれ、より「世界は大きいので、色々見て歩きたい」と思うようになった。私自身も今後ホストファザーやホストマザーのように多く

の景勝地を訪れたいと思う。

**日　付：12月3日（土）5日目**
**大学名：北京語言大学**
**氏　名：閆良博**

今日から待ちに待った二日間のホームステイが始まる。

朝に集合して間もなく私は責任者の中島雪美さんに呼ばれた。実は私たちが集合する前からすでに現場で待っていた方が私を迎えにきた方で、私のホストファザーの城谷さんであった。どきどきしながらも私は城谷さんとその場を離れ、この日の旅が始まった。

青く透き通った空がさらに際立たせる皇居や井の頭恩賜公園などの美しい景色を、私は大いに堪能した。さらにこうした美しい景色の中、一つの小さく優美な神社があり、私はそこで家族の健康と一家円満を祈った。それ以外にも秋葉原の散策では、初めて二次元の世界を間近で体感することができた。

ここで城谷さんの優しさに感謝を述べたい。今回の訪日前から城谷さんは私のために至れり尽くせりのスケジュールを組んでくれていた。そして私との対面後も私の希望に沿って予定を調整し、ショッピングであれ、また観光であれ、東京を満喫することができた。

**日　付：12月3日（土）5日目**
**大学名：中国農業大学**
**氏　名：高潔**

顔を洗い朝食を済ませ、待ちきれない思いでロビーに集合し、私を待つホストファミリーとの対面となった。松畠さんとは何度かのメールのやりとりを通じて彼ら家族の写真を見ていたので、会うのがとても楽しみであった。松畠さんはとても時間に正確で、9時30分丁度に私とホテルで対面し、それから電車で大宮区の自宅へと向かった。その道すがら、彼は家族の状況や奥さんの真由子さんとの馴れ初め、そして一人息子の大志さんについて紹介してくれた。そして自宅に到着すると奥さんや息子さんは温かく私を歓迎してくれた。息子さんはまだ8歳で英語があまりできないため、最初は恥ずかしそうにしていたが、私の熱意や誠意を見て次第に打ち解け、私の手を引いて家中を案内してくれ、さらにつたない英語で彼の「宝物」であるマンガ本や怪獣のおもちゃを紹介してくれた。その後私はホストファザーとホストマザーに「喜上梅梢」の切り紙細工の掛け軸と京劇の世界で勇気と魅力を象徴する趙子龍のボールペンをプレゼントした。そして暫しの休憩の後、私たちは松畠さん一家がよく行くレストランへ食事（私の一番好きなうどん）に向かった。

今日の午後は彼らの普段の週末の生活を体験することになり、午後早速ホストマザーが日頃訪れるヘアサロンで日本式のヘッドスパを体験し、楽しい午後が終わった。息子さんは普段の学校以外にも習い事をしており、水泳や英語が好きとのことである。こうした点は中国とさほど変わらないと思った。

松畠さん一家は大宮区の閑静な住宅街に住んでおり、二階建ての家屋である。私が住む部屋の中にはおもちゃや置物、本などがきっちりと配置されていて、またホストマザーはわざわざ私のためにレースの花柄の布団を準備するなどすべてが綺麗に整っていた。こうした点も松畠さん一家の生活態度なのだと思った。松畠さんや奥さんは比較的年齢も高く仕事のキャリアも豊富なため、暮らし向きも裕福である。若者世代の話題には多少疎いが、それでも至るところで彼らの心遣いが感じられた。

**日　付：12月3日（土）5日目**
**大学名：国際関係学院**
**氏　名：倪話秋**

今日の朝、私たちはどきどきしながらこれから二日間を共に過ごすホストファミリーの出迎えを待っていた。

今回私の世話をしてくださる西山佳夫さんはテルモのスタッフで、小平市に住んでいる。彼は11月上旬から私に連絡をくれ、今回のスケジュールなどを互いに相談していた。朝は浅草寺へ向かい、そこでは着物を身に纏った多くの日本女性を目にした。また浅草寺では小吉のおみくじを引き、待っているものは必ずやってくるとの内容を教えてもらった。その後、下町風俗資料館を訪れた。ここは明治、大正、昭和初期の東京の生活の様子を紹介しているところである。当時の日本は和と洋が入り混じり、和式の部屋で洋式の商品を販売しており、さらに劇場では舞台劇や歌舞伎が上演されていた。日本文化は西洋文化の衝撃に対しそれと食うか食われるかの争いをするのではなく、西洋文化を吸収していった。こうした点は、おおかた私が浅草寺、上野公園、ひいてはホテルニューオータニで着物姿の女性を見かけるのに対し、故宮や頤和園では漢服姿の中国人を見かけない原因とも関連していると思う。

午後は江戸前のもんじゃ焼きやお好み焼きを食べた後、東京国立博物館や上野公園を見学し、改めて日本文化の発展過程における外来文化の吸収や改良について目にすることができた。

夜に西山さん宅に戻ると、ホストマザーは焼き肉の準備をしてくれていた。その他私に和室と部屋の中には飲み物とお菓子などを準備してくれていて、とても感動した。

日本の浴室はとてもきれいだった。

**日　付：12月4日（日）6日目**
**大学名：北京大学**
**氏　名：陳麗麗**

今日はホストファミリーとの二日目である。朝食から出発前までの時間は、何の話題をしゃべろうかと頭を悩ます必要なく、遊んだりまた家事や掃除をしたりするなど皆が思い思いの事をしていた。私はこうした雰囲気がとても好きで、建前の賑やかさよりもこうしたひと時の静けさを共に過ごせることの方が、より主人と客人との和やかさを示すことができると思う。私と友人の付き合いもこうした感じで、今回ホストファミリーとも気が合った。

朝食を済ませ、ホストファザーや息子さんと東京タワーそして近くの公園で遊んだ。街中を歩いていると、路地にはほとんど人影がなく、複数のビルには小児科、歯科、心臓外科などの診療所を見かけた。私はそこでホストファザーの川岸さんに個人診療所がなぜこれほど発達しているのかを聞いたところ、主に医療保険政策に関係しているとのことであった。日本は全国民が医療保険に入っているが、大きな病気の場合に公立病院へ行き、小さな病気は診療所を利用し、診療費の一部を負担するだけでよい。

中国、とくに私の故郷では小規模の診療所も少なからずあるが、その多くは信頼できる資質がなく、中国医学や西洋医学問わずそのような状況である。そのため、私はこれまで診療所での診察よりも公立病院を信じてきた。そして中国では有名な公立病院であるほど皆がそこに殺到する。

対して、模倣や粗悪といった事に関しては日本ではほとんど心配する必要がない。熱感応技術を使い、偽札作りへのコストを高めることでお金すら調べる必要のない国では、その他の面の偽物についても相応の予防手段があるのだろう。

ホストファザーと息子さんと遊びに出かけた際、息子さんは英語ができないため、私と彼とは直接の交流はできなかったが、それでも道すがら受け取ったお菓子付きのチラシやポケットティッシュなど、彼はすべて私にくれた。こうした点はホストファザーと同様に紳士的で、言動による手本の効果というものを感じることができた。

**日　付：12月4日（日）6日目**
**大学名：北京師範大学**
**氏　名：賀婷雅**

今日はもう半日しかホストファミリーと一緒にいられない。それを思うと、朝起きてすぐに別れがつらくなった。おかあさんから今日私がしたいことを聞かれたので、猫を抱きながらずっと考えた。実際はどこにも行きたくなく、おとうさんやおかあさんといっしょに家で美味しい煎茶を飲んで、猫と遊んだりしながらおしゃべりをしたい。そして一緒にスーパーで買い出しをして、地下鉄に乗って、うどんを食べたい。それからおとうさんとゴルフに行って、おとうさんとパン作りをしたい。でも私たちにはそれだけの時間がないので、朝起きてすぐに私はおとうさんとイチゴのケーキとハムのパンを作った。おとうさんが生地をこねながら私に作り方を詳しく教えてくれる姿に、私は心がとても温かくなった。その後おとうさんは水族館に連れて行ってくれた。そこでは私が開いた口が塞がらないくらい驚いている表情を見て、おとうさんは子供の様に笑っていた。そして小さな私が人波にのまれ、ガラスの向こうの魚が見えなくならないように常に私を気遣って前を歩いていた。

特別な事というのはなかったが、すべての些細な事が感動的で、とても名残惜しかった。そのため夕方のお台場すら味気ないものに感じられ、心の中はおかあさんとおとうさんの姿で満たされていた。生活を共にした時間は短かったが、真心を通い合わせたことは永遠に変わらない。忘れ難いホームステイと一泊二日、そして辛い別れなど、今回の活動には本当に感謝している。

**日　付：12月4日（日）6日目**
**大学名：北京理工大学**
**氏　名：張晨曦**

今日も引き続きホストファミリーと一緒に東京見物をした。

この日印象に残ったのは日本の宗教文化、食文化そして教育の3つであった。

私たちは浅草寺を参拝したのだが、浅草寺の外には他の宗教の建物も見られた。ホストファミリーの説明により、私は日本人の多くには宗教信仰があり、また複数の宗教を信仰していることを知った。これは日本の近代文化が他の文化と融合を繰り返した結果だと思う。

日本の食文化を二つの文字で総括すると、一つは「冷」、もう一つは「生」である。中国と異なるのは、日本人はお湯よりも冷水を好むことである。初日に日本に到着し、気温そのものは高くなかったが、私の飲み物は氷が沢山入った水で、この二日間のホームステイでも冷たい食べ物がメインであった。

教育においては、日本の義務教育はとてもゆとりがあり、小学生の毎日の宿題にかかる時間はわずか5分間で、その他の時間は本を読んだりゲームをしたりと自由である。ただし私は他の家庭の教育状況を知らないので、こうした方法が成功しているのかどうかは判断ができない。

また彼らの家屋の面積はとても広いとは言えないが、それでも二段ベッドの上段を子供自身の鉄道模型用のスペースにしていた。さらに子供が好きな鉄道関連の雑誌を購読するなど、子どもの興味への重視度合にはとても驚かされた。

**日　付：12月4日（日）6日目**
**大学名：北京語言大学**
**氏　名：呉継**

今日ホストマザーは私を鎌倉に連れて行ってくれた。ここは海辺に位置するとてもきれいな街である。海には大勢の人がいた。冬が間もなく訪れる時期であるが、この日は寒くはなかった。娘さんは一人砂浜へ駆けていってお城を作

り始めた。そして近くからは私がアニメやドラマなどでよく聞いていた鳴き声をする鳥が沢山現れた。それはとても大きく、群れになって上空を飛んでいた。路上には注意喚起を促す看板があり、そこにはこうした鳥は食べ物を見かけるとそれを獲ろうと襲ってくるため注意が必要との内容が書かれていた。それでも鳥自体はとてもきれいだった。

鎌倉は風光明媚な景勝地ではあるが、観光客はとても多いというわけではなかった。鎌倉では綺麗さと静けさを感じることができる、生活に適した場所だと思った。

ホストマザーと二日間を共にし、日本の温かい家庭生活を体験することができた。彼女にはとても感謝している。ホストファザーも普段の休みの時間は多くはないが、しっかり休んでほしいと思う。

ホテルに戻った後、私たちはまた急いでお台場へ向かった。そこでは夜景を楽しむため二時間の自由行動となったので、私たちは観覧車に乗った。こうして楽しかった一日も終わり、ホテルに戻り明日への英気を養った。

**日　付：12月4日（日）6日目**
**大学名：中国農業大学**
**氏　名：張洋中正**

「張洋、張洋」、朝7時、ホストファミリーのお兄さんが私と遊ぼうと熊のぬいぐるみを2つ持ちながら私の寝床までやってきた。これにはとても驚いたと同時に嬉しくもあった。ほどなくしてお子さん三人とも目を覚ました。彼らはとてもやんちゃで、家の中をあちこち遊びまわり、騒いだり、テレビでアニメを観たと思えば、ホストファザーの布団の中に入ってはしゃいだりしていた。その後朝食を簡単に済ませ、私たちはこの日の予定を開始した。

午前、私たちが向かったのは日本のアニメの聖地である秋葉原である。ここには多くの電気製品の販売店もあった。お昼は彼らがしばしば訪れるラーメン二郎はとても美味しかった。午後私たちは新宿御苑に向かい、そこでピクニックをした。私は弟さんの手を引き、肩には妹さんを乗せていたので疲れたが、それでもとても楽しかった。そこを離れる際、ホストファザーの秋山さんは私には良い父親になる素養があるので、将来きっと良い父親になれると言ってくれた。とても嬉しかった。

出会いがあれば別れもある。秋山さん一家は私をホテルのロビーまで送ってくれた。ただ中国語ができないためか私にずっとありがとうと声をかけてくれた。そして名残惜しくもお別れとなった。

その日の夜、私たちはお台場での夜景観賞となった。バス移動の最中、私はお台場の景色に中国広州を思い起こした。東京湾と珠江、レインボーブリッジと珠江大橋、異国の地でこれらは私に懐かしい故郷を思い起こさせた。

二日間のホームステイが終わったが、私自身複雑な感情が残った。秋山さん一家は私に日本の一般家庭の生活を体験させてくれた。彼らとの時間を通じて、私は日本の独立性や自主性を重んじる教育や親の子に対する接し方に、中国における子供を溺愛する教育の良し悪しについて考えさせられた。

最後に秋山さん一家の幸せを願っている。そしてまた再会できることを楽しみにしている。

**日　付：12月4日（日）6日目**
**大学名：国際関係学院**
**氏　名：曾粤儀**

今日のまあ君は昨日と同様元気一杯で、朝7時には一緒にアニメを観ようと私を起こしに来た。私はアニメを観ながらも急いで布団の畳み方をネットで調べていたが、結局澄川さんから畳み方を教わった。朝食は兄妹二人のサポートでおにぎり（子供式）の作り方を教わり、多少は澄川夫人の役に立つことができた。その後、私たちは花壇に水をやり、近所の梶野公園へ出かけた。

まあ君は公園に着くとすぐに木に登り、さらに公園内の登れる木すべてを登ってまわった。その後私たちは鬼ごっこを始め、私はここ一年達成できなかったジョギングの目標を達成できるくらい走り回った結果、これ以上動けないくらい

疲れてしまった。それでも走ることがこんなにも楽しいものなのだと初めて思った。それまで私は走ることがとても嫌だった。

帰宅途中、私たちは澄川さんが幼い頃好きだったフルーチェを買い、その不思議なプルンとした食感がとても美味しかった。その後武蔵野市立図書館を見て回り、そして丸亀製麺で食事をしたが、とても美味しかった。特にエビの天ぷらは美味しさに感動するほどであった。

今日もまたとにかく楽しく、私たちは明治神宮へ向かった。入口で写真を数枚撮った後、私たちは明治神宮近くの通りにある小さいながらも多くの人が行列をつくっているクレープ屋sweet boxへ行き、大きなソフトクリームのようなイエローストロベリーとクリームのクレープを持ちながら地下鉄に乗り、予定より30分近く遅れてホテルに到着した。

彼らは「風のような一家」であった。この二日間のあらゆる「謎の」、「楽しさ」を思い起こすと、つい笑みがこぼれてしまう。私は日本の家庭生活を充分満喫することができた。言葉の面の問題や時間がわずか一泊二日などといったこともあったが、私はそれでも不思議と彼らとの親近感や帰属感が得られた。私が今回着物を着ること以外に行きたい場所ややりたいことを言わなかったのは、「観光」や「ショッピング」は今後自分で来たときにすれば良いが、「家庭生活の体験」は一生で一度きりかもしれないからである。

夜はお台場でショッピングをしたが、ここでは述べない。彼らとお菓子を一緒に食べたこと、一緒に花に水をやったこと、一緒に芝生の上を走り回ったこと、これらは私の素敵な思い出です。澄川さん、澄川夫人、まあ君としょうこちゃん、皆さんを愛しています。二日後また会いましょう。

**日　付：12月5日（月）7日目**
**大学名：中国農業大学**
**氏　名：張洋中正**

物流は現在中国で話題となっている言葉である。その理由はネットショッピングの急速な発展により物流が中国において次第に注目されるようになったからである。この日の午前私たちはまずイトーヨーカ堂配送センターを見学した。ここで取り扱う主な商品は洋服とズボンである。工場の第一印象は、広い空間と密集した商品であった。ここの全自動の運搬機械は印象的だったが、特にユニークだったのは衣類がハンガーに掛けられた状態で運ばれることで直接売場での販売が可能なことであった。またここではイトーヨーカ堂以外の衣類も取り扱っている。

お昼は日比谷松本楼に向かい、そこでの昼食となった。ここの創始者の梅屋庄吉氏は、中国の国父である孫中山氏と一生涯の友人であり、孫中山氏の困窮、挙兵時期そして理想の実現や愛情の面で非常に大きな役割を果たした。彼らの紹介を通じ私たちも日中間の友好的な交流を目の当たりにすることができた。

その後、私たちは「しばしの帰国」となる中国駐日大使館を訪れた。ここではまず6つの大学の代表者がこの数日間の日本滞在で感じたことなどを発表し、その後薛公使参事官から彼自身の日本への印象についての紹介があった。その中では中国と日本は地理的に近く、貿易関係も日増しに密接になっていることから、今後日中関係はきっとますます良くなっていくとし、さらに「日中社会同質化」の構想についても言及があった。

最後に私たちは法政大学を訪れ、王敏教授の講演を拝聴した。王敏教授の講演のテーマは「日本で何を感じるか」で、中国文化を研究している汪徳邁（Léon Vandermeersch）氏および王敏教授自身が30年間の日本滞在を通じて体験した日本の文化的特徴の紹介、そして日本を通じて中国を語る、中国を通じて日本を観察するという結論を総括として打ち出し、学生たちから大きな反響があった。

**日　付：12月5日（月）7日目**
**大学名：中国農業大学**
**氏　名：高潔**

今日は最終日の前日で、浪速物流見学、日比谷松本楼訪問、中華人民共和国駐日本国大使館での座談、法政大学での学習など充実した一日であった。

Station1：浪速運送株式会社、ここでは「大規模物流」を主要事業としている。生産者と販売店を連結する配送を行っており、高度に自動化された機械の構造は比較的簡単で、機械伝動＋プログラム制御である。企業発展を念頭に入れ「正確な配送、つまり率先して生産者から消費者までの最後の一歩を担う考えはあるか」という質問を遠慮がちにした場合、得られる回答はほとんどが否定的なものである。消費者にとってはこうした一歩は間違いなく大きな利便性と成功であるが、構造から考えると物流業界の発展には、ネットショッピングプラットフォーム-第三者決済プラットフォーム-倉庫等付帯施設建設-関連制度-配送スタッフネットワーク構築など多くの必要条件が存在する。そしてこれらの条件の達成にはいずれも勇気やイノベーションが必要であり、国情を充分理解した上で柔軟そして大胆に行わなければならない。そして日本人の発想からすると、恐らく如何に現有のラインのオートメーション化を高めるかが考えられ、「新たな段階」の開拓というものはないのだと思う。オンライン・オフラインが連動した消費者の手元までの配送が物流業界の主流となることは必然的であるため、変化への勇気は特に重要になってくる。

Station2：日比谷松本楼は、日中両国が孫中山氏をめぐり偉大な友情を重ねた場所である。ここは日中双方が歴史を客観的に評価し向き合うことを促している。国難や恩情は忘れてはならない。同様に、過去日中両国民はこれほど偉大な民族の垣根を越えた友情を構築することができなかったこともまた、現在の人々に今ある幸せを認識また大事にし、互いに友好そして尊重をすべきであることを示している。

Station3：中国駐日大使館、ここではとてもリラックスできた。公使参事官からの日中関係についての紹介は私たちに現状を直視させるものであり、問題を引き起こさず且つ問題を恐れないことが大事だと感じた。両国の経済や文化交流が日増しに密接になる中、平和と発展こそが東アジア繁栄における主旋律である。

Station4：法政大学の王敏教授から私たちへ「いかに哲学的目線で日本文化を見るか」といった平常心で素朴な観点からの紹介があり、買占めをしない、物事を大切にする、敬天愛人といった価値観は日本人の生活や仕事のあらゆる場面に反映されており、私は自分の心に自然への尊重や畏敬、「自然・簡素」といった味わいへの共通認識を持つことができた。

**日　付：12月5日（月）7日目**
**大学名：国際関係学院**
**氏　名：曾粤儀**

今日の朝食はホテルニューオータニの和式定食であった。窓の外には木々や流れる水、そして滝などが見え、その佇まいはとても趣があった。

今日の最初の活動はイトーヨーカ堂での見学で、その見学内容はイトーヨーカ堂における運送を担う浪速運送のサービスであった。私たちはエレベーターで上階に移動したが、このエレベーターは貨物用で、私たち訪日団全員さらにスタッフを合わせた40人近くを乗せることができるほど大きかった。教室内ではスタッフから、物流の中核理念はいかに商品を動かすことなく、時間とコストを節約するかということを教わり、私は物流というものに新たな認識を持つことができた。工場見学では「衣類をハンガーに掛けたままの運搬」がとても印象深かった。それというのも、私は中国国内のデパートスタッフが従来商品と新しく入荷した商品とで混乱している場面を目にしたことがあるからで、衣類が生産者から消費者の手元までハンガーに掛けられた状態というのはとても新鮮な感じがした。臨時倉庫の紹介の際、限られた空間を有効的に利用するため、一階分を二階に分け、伸縮可能な商品棚を使うということをスタッフから聞き、日本人の「収納」へのこだわりを改めて感じた。限られた資源から最大の価値を創造するというこうした理念は、実のところ資源の融合と効果的な利用が必要な中国にとっても非常に貴重なものである。

今日二番目の訪問先は日比谷松本楼であった。松本楼は黄金色の銀杏の木に囲まれていて、二人のお年寄りが銀杏の木の下で水彩画を描いていた。また木漏れ日のまだら模様が美しかった。松本楼に足を踏み入れるとすぐに

宋慶齢女史がかつて弾いていたピアノを見かけ、物は古くなるが、故人の面影はより鮮明になる印象を受けた。おしゃれな昼食の後、梅屋庄吉氏の曾孫の方から国父の孫中山氏と梅屋庄吉氏の真の友情についてのお話があり、こうした国の垣根を越えた互いに支え合う友情が永遠に語り継がれて欲しいと思った。この他、同じ事件に対する日中両国の呼称が異なることに気が付いた。例えば「九一八事変」は日本語では「満州事変」と言う。これはとても興味深い研究テーマだと思った。

今日三番目の訪問先は中国駐日本国大使館であった。バスから降り国章を目にした瞬間里帰りをした感覚になった。この日私は国際関係学院を代表して総括を述べることになっていたので、内心とても緊張していたが、薛参事官や潘書記官はとても人当たりが良かった。日本の家庭教育、学校教育、社会教育という三つの角度からの私の総括は無事終了し、参事官からも彼の娘さんと祥子ちゃんが同じ4歳だという話があり、その笑顔には温かみと愛が感じられた。

今日最後の訪問先は法政大学であった。法政大学のマスコットキャラはオレンジ色のウサギで、このウサギは案内板やミネラルウォーターなど様々なところで見かけるなど、あたたかいキャンパス文化が感じられた。王敏教授の講座は主に「漢字文化圏」をテーマとしたもので、その中には教授の最新研究成果である「日本における大禹」も含まれていた。ある学生から日本文化に関する事物はすでに先人らによって研究されているが、後の世代としてはどのように新たな分野または新たな成果を発見すればいいのかという質問があり、王敏教授からは生活をつぶさに観察し、一つの事柄に集中して研究することで成果が得られるという回答があった。これは私に大きなインスピレーションをもたらすものであった。

実はこの日夜8時以降の自由時間に、私は田口佳織さんと会った。彼女は今年日本の訪中団の一員として中国を訪れ、その後北京へ留学に来たいと思うようになり、その後頻繁に連絡をとりあっていた。そのため今回再会できてとても嬉しかった。（今回の「走近日企・感受日本」事業とは関係がないので、これ以上は控えておく）

**日　付： 12月5日（月）7日目**
**大学名： 国際関係学院**
**氏　名： 倪話秋**

今日のスケジュールはとても充実していた。まずイトーヨーカ堂の物流工場を訪れた。ここは可能な限り「商品を動かさない」ことをモットーとし、ハンガーに掛けた状態での運送という概念を創り出した。また同時にコンピュータを運用した衣類の自動分類（その後店舗へ運ぶ）を行っていた。工場における技術革新はもちろん重要だが、ハンガーに掛けた状態での運送という概念を産み出したことは非常に驚くべきもので、工場の運営において古いしきたりに拘らず、私たちが見学したトヨタ自動車の元町工場で見た「よい品よい考」のスローガンのように、従来の方法をさらに突き詰めることで、より良い方法が見つかるのだと思った。

その後私たちは日比谷松本楼で食事をし、さらにこれまでとは別の角度から日中関係の歴史について学んだ。

そして松本楼で感じた思いを胸に暫しの「帰国」となった。中国大使館ではここ数日の感想などについて交流を図り、薛公使参事官の日中関係についてのお話に耳を傾けた。薛公使参事官のお話は私の心を打つもので、日中関係の近年における複雑な事情は、実のところ中国が台頭した後における避けては通れないが制御は可能な対立であり、このしばしの対立を経て、日本の国民は自身の隣国を正視し、また正しく認識でき、中国の国民もまたこれまでの日本を羨むといった態度を改めることができる。双方の社会面での交流が増えるにつれ、両国関係はきっと良い発展が得られ、こうした発展は日中双方にとっても有益で、より良い選択肢である。こうしたお話に私は両国関係をより楽観視できるようになったと同時に、いかに早く対立の時期を終わらせ、両国の国民がより客観的で正しい認識を持てるかについては、私たち若者世代の努力目標だと感じた。

大使館での交流が終わった後、私たちは法政大学で王敏教授による日本文化についての講座を拝聴し、文化の側面から私たちが見学し体験した現象についての解釈や総括がされ、非常に有益であった。

**日　付：12月6日（火）8日目**
**大学名：北京大学**
**氏　名：李静昀**

1ヵ月以上にわたり待ち望んでいた訪日活動も、あっという間に終わってしまった。現在機内にいる私の心の中は、日本そして私たち訪日団との別れの名残惜しさで満たされていた。できるのであれば8日前に時間を戻してほしいくらいである。

今日の午前、私たちはホテルニューオータニのエコ施設を見学した。発電施設、水の再生利用や化学肥料、そしてヒートアイランド現象を防ぐために屋上に作られたローズガーデンなどはいずれも工夫が凝らされていて、多くの施設や技術もまた世界をリードするもので、私は日本の環境保全理念の浸透度合を改めて感じることができた。またホテルニューオータニの15階はかつて一時期中国大使館が置かれたことからも、同ホテルの素晴らしさがわかる。

お昼は感動的な歓送会が開かれた。ホストファザーと再会できとても身近に感じ、わずか二日間の交流で本当の家族のようになれたことに自分でも驚いた。もちろんその理由はホストファザーが私に家族と同じくらいとても良くしてくれたからだと思う。その他別のホストファミリーの幼い兄妹はとても可愛く、皆が彼らに和まされた。このホストファミリーはまた私たちがバスに乗り込む際も見送り、さらに車で二度もバスに追いつき私たちに手を振ってお別れをしてくれた。そして大使夫人のスピーチからは、両国の相互信頼を高め、両国の民間交流を促進し、両国の関係を増進するために、たとえわずかでも自分なりの貢献をしなければいけないという強い責任感が生まれた。

八日間のスケジュールはあっという間に終わり、沢山の収穫や感動が得られたが、ここでは細かくは述べないことにする。中国日本商会そして日中経済協会による、これまで各世代の日中の大学生の相互理解を増進してきたこの活動に心から感謝している。またホストファミリーの私への手厚いもてなしにも感謝している。私としても、今後日中友好のために自分なりの貢献をしたいと思っている。

**日　付：12月6日（火）8日目**
**大学名：北京師範大学**
**氏　名：劉迪**

今日は訪日の最終日で、現在はすでに帰国の機内にいる。

今日の朝、私たちはホテルニューオータニを見学した。一社会のようなホテルという理念の堅持により、ホテルニューオータニでは独自の発電システムや生ごみ処理システムなどを構築し、これらは多くの資源やコストの節約に役立っていた。

私たちにホテルの紹介をしてくれたのは、70歳近いとてもやさしいおじいさんであった。しかし年齢は高いが、彼は若者と同じような元気さであった。生活や社会が希望に満ちる時、人々は自分たちの生活を心から楽しむのだと思った。

日本社会とはいったいどのような社会なのだろうか。たとえ仕事や生活のストレスが大きくても、日本の人々はより良い生活のため努力を続けている。日本社会とはこうしたものだと私は思った。

**日　付：12月6日（火）8日目**
**大学名：北京理工大学**
**氏　名：居絲薇**

今日は日本での最終日である。

今日はまず私たちが4日間過ごしたホテルニューオータニを見学した。

このホテルの庭には様々なグラデーションの植物があり、そして小さな滝の水がきれいな池に流れ込み、その池に

は沢山の錦鯉が泳いでいるなど素晴らしい景観であった。

ホテルニューオータニについて印象深かったのは、同ホテルが示す信頼であった。中国のホテルでは、傘を借りる時など一般的にルームキーを出し記録をとったり、或いは手付金を支払い担保としたりするが、ここではそうした必要は一切なくホテルのスタッフはそのまま傘を貸してくれる。彼らの示す信頼というものに私たちはとても感銘を受けた。私はこうした信頼は信用を重視する社会環境によるもので、人々が信頼し合い、さらに実際の行動でそれを示すことで、人々には自分が受けた信頼を裏切らないという思いが生まれるのだと思う。中国人はこれまで以上に信用というものを大事にすべきで、そうすることで初めて国際社会に立脚できると思う。

ホテルの見学の後、日本での最後の活動である歓送会となった。多くの学生のホストファミリーが会場に駆けつけ、さらに関連のスポンサー企業の代表者も足を運び、団員全員で『世界に一つだけの花』を中国語と日本語で歌った。

この八日間は短くも充実した時間で、私は日本人との交流や日本文化の体験ができ、さらに日本の友人を一人作ることができたなど生涯記憶に残る体験となった。

**日　付：12月6日（火）8日目**
**大学名：北京語言大学**
**氏　名：閆良博**

昨日は今日のスピーチ原稿のため夜中2時まで準備をした。ここに記しておこう。

ホテルニューオータニでの数日の後、最終日のスケジュールは同ホテルのエコ施設の見学から始まった。ホテルのスタッフは同ホテルのエコ化への取り組みとその成果をとても誇りに感じているようであった。彼のその姿は、中国人が高待遇を得たそれと同じようなものがあった。ホテルニューオータニはまた日中国交正常化のプロセスにおける重要な舞台となった場所の一つである。1972年、双方の国交が回復する際、当時中国駐日大使館はまだ建設されておらず、大使館のスタッフはホテルニューオータニの部屋を借り、当面の間そこで業務を行うなど、当時の困難な時期を同ホテルで過ごした。

今現在、私は北京へ戻る機内でこの文章を書いている。時間は止まることなく流れていく。知らぬ間に今回の訪日の旅も終わった。私は自分の考えをまとめることもままならず、ひいては名残惜しさを顔に出すことすらもできていない。

八日間の訪問ではあったが、私たちが何倍もの時間をかけて味わい、そして理解すべきものとなった。

# 学生たちの観た日本

**大学名： 北京大学**
**氏　名： 陳麗麗**

**テーマ： 2.集団帰属意識の強さ**
**4.日中間の交流**

日中間における文化はその多くが源を同じくしていることは疑いがない。そして日中の国民もその差が次第に縮まっている。かつて中国は生活レベルが低かったことから、日中の国民はその外見で判断ができたが、今では両国はますます似通って来ている。

しかしながら、企業ほど私にこうした印象を持たせたものはない。中国企業が現在有している多くの特徴は1980～90年代の日本企業のそれと似ている。20世紀の日本経済最盛期において、日本企業は多くのアメリカ企業を吸収し、追い込んで行った。こうした大規模な進出、気力とチャレンジ精神に富んだ拡張は、中国企業のここ数年の歩みに似たものがある。

経済的には、その歴史から言えば、中国は一定の割合で日本の歩んできた道を辿っている。なぜ日本では支付宝（ALIPAY）のような試み及び従来の金融への変革がないのかという訪日団の学生からの質問に対して、三菱東京UFJ銀行側からは、日本企業はリスクマネジメントを非常に重視しているという回答があった。これには私は、リスクマネジメントに慎重なのは正に20世紀の大規模な吸収によりもたらされた失敗が原因ではないのか？これは正に教訓を汲み取った結果なのだと思わずにはいられなかった。

私は企業のかつての或いは現在の方針を批判するつもりはない。ただし、中国企業は現在、かつての日本企業にあった若々しさと勢いの段階にある。日本経済は活力が足りないかもしれないが、企業文化、従業員の帰属感、環境保全意識など多方面の成熟したメカニズムにおいて工夫を凝らしている。

人があって制度が存在する。私たちはなぜ日本文化の多くの素晴らしさに感慨を覚えるのか。それはその文化の真髄を各制度に応用しているからである。日中文化、世界文化には優劣の区分はないが、各民族の現状を構築するのは、いかにその真髄を終始守り、またいかに浮世において利益のために根本的な方向性を見失わないかにかかっている。

**大学名： 北京大学**
**氏　名： 詹文茜**

**テーマ： 1.国民性についての理解**
**3.マナーのよさと思いやり**

「そのほとんどにおいて、日本人は争いを好むがまた優しく、武を尊ぶがまた美を崇め、横暴だがまた礼儀があり、融通が利かないがまた変わり身が早く、大人しいがまた他人の指図を受けることを嫌い、忠義に厚いがまた裏切りやすく、勇敢だがまた臆病でもあり、保守的だがまた新しい方法を受け入れることを好む。」これは、日本人の国民性について記した書籍『菊と刀』の一文であり、日本の民族性における矛盾性と二元性を総括する上で最も適した表現である。今回の8日間の訪問において最も印象深かったのは、日本人の対人マナーとその中にある矛盾性である。

彼らは対人マナーを非常に重視しており、今回の8日間の訪問において私たちが見学に訪れた企業では、各従業

員は私たちへの対応をするまたはしないに関わらず、皆その場の仕事の手を休めて私たちに挨拶をし、私たちが見学を終えて出発する際には、私たちの車が視界から消えるまで手を振っていた。この他ホームステイの際は、家族同士でも「どうぞ」、「ありがとう」といった相手を敬う言葉を常に口にしており、これは中国ではほぼ見かけないものであった。そしてその後の交流を通じて、私たちは企業内部におけるキャリア重視、先輩社員や上司への敬意、日常生活における様々な場面で他人への尊重を示すといった日本におけるマナーへの重視について、強く体感した。しかしながら、多少規格化またプロセス化されたようなマナーにあって、私はホストファミリーの後藤さんの考えを尋ねたことがあるが、彼の回答はストレスが大きいというものであった。この点について、大阪大学での交流の際、多くの大阪大学の学生も似たような考えを持っていた。このことから、日本の多くの人は日本の人間関係において必須なマナーというものに圧迫感を感じながらも、こうしたマナーの下で秩序だった生活を送っており、この矛盾がおそらく日本国民の心に重苦しい感情を形成している根源なのだと感じられた。

**大学名： 北京大学**
**氏　名： 馮莎莎**

**テーマ： 6.今後ますます中国でニーズが高まる技術**

日本のこれらの企業を見学し、同時に中国国内の状況を振り返り、私は環境保全技術や自動化技術が今後中国においてニーズがますます高まっていくと感じた。

中国国内の環境問題は現在非常に重大な状況にあり、首都一帯のスモッグは長い期間に渡り人々の健康に影響を及ぼしている。私たちは経済的で効果的な環境保全技術を切実に求めており、こうした技術と付帯した政策の実施があってこそ環境問題は改善されていく。環境保全技術には、石炭脱硫廃水処理、生ごみの発酵利用、家電部品の回収等の技術が含まれ、石炭からの二酸化炭素排出、水資源（汚水、重金属）そして土壌汚染を減少させることをその目的とする。だが相応の技術的サポートがなければ、政策があってもその実施が非常に難しいものとなる。日本はかつて環境汚染による発展の段階を経験しており、すでに技術と整った政策体系を有しているため、中国としては学ぶべき点がある。

中国の人件費は現在上昇を続けており、沿海地区における多くの労働集約型産業は東南アジアなどへ移転をしていることから、自動化の技術は次第に重要なものとなっている。トヨタ自動車の生産工場内の自動化レベルはとても高く、ロボットのアームを利用し精度と効率を高めていた。パナソニックは材料の回収の際、材料の異なる性質を巧みに利用し自動分離を実現していた。浪速運送では自動化のレール輸送と分類保存を採用し、労働強度を大きく削減し、業務効率を高めている。これらは今後中国において大きな需要が見込まれる。

以上の技術はいずれも一国家や地区における科学技術のハードパワーとなっており、発展途上の中国が今後育成また強化すべき点である。現在、国の科学技術に対する重視度合もますます高まっており、人材の導入そして科学技術の成果の保護や表彰に力を入れている。それと同時に、多くの先進国における技術化は中国より進んでいることから、私たちは外国との提携や技術の導入による学習を強化すべきである。

**大学名： 北京大学**
**氏　名： 楊涵**

**テーマ： 6.今後ますます中国でニーズが高まる技術**

今回の8日間の訪日を終えて、私はとても深い感銘を受けた。私にとって非常に印象深かったのは日本の大企業の環境保全意識で、正常な企業運営と同時に環境保全技術を常に忘れていないことであった。私たちが見学したパナソニックエコテクノロジーセンターでは、パナソニックおよびその他の家電企業が生産した使用済家電の回収を行っている。そしてこの回収過程はとても衝撃的であった。家電毎に専門の回収ラインがあり、家電の異なる材料については分解利用の原理を採用している。浮力、赤外線反射波長などは、私の日常の授業でも関わることがあるが、こうした書籍の知識に対する柔軟な運用は私たちが学ぶべきものである。

全体的に、こうした環境保全技術の原理を突き詰めると、特別に高度なものというわけではなく、私たちにも構築することは可能だが、問題なのは私たちが多くの経費を掛けてこれらを構築する意思があるのかどうかである。我が国の現在の使用済家電回収は主に政府の奨励金に頼っており、専門の回収事業者も未だ多くは存在していない。こうした点も、我が国の大部分の市民における使用済家電の回収意識の脆弱さにつながっている。そのため、日本のこうした環境保全技術は私たちが学ぶべきものであり、これもまた私たちが環境保護においてできる最も直接的な貢献なのである。

**大学名： 北京大学**
**氏　名： 李静昀**

**テーマ： 1.国民性についての理解**

日本に来て以降、日本語ができない全ての人が最初に覚える日本語はきっと「有難うございます」である。日本のスタンダード的な笑顔と親切さは最も私的に印象深いものであった。皆は日本が親切な民族で、礼儀のある国だと感じている。しかし大学での交流とホームステイでの経験を通じて、私は日本をさらに知ることができた。私は、日本とは礼儀があるが人と人の関係が希薄で、非常に個人を重視する国だと思った。

実のところこれは分かりやすいことであり、互いが礼儀正しいほど、その関係性は親密にはなりづらく、熱愛中のカップルは相手に対して客のように接することはないのである。礼儀はもちろん重要であり、人の他人への尊重を示すもので、その人の教養の表れであるが、もし家庭内においても礼儀を重んじていては疎遠すぎると言わざるを得ない。ホストファザーの話によれば、日本人は実のところ互いに友人になりづらく、人と人の関係性が中国に比べて冷淡とのことである。それでは、礼儀とは人々が自分のために作った他人との障壁で、互いに尊敬し、互いに邪魔せず、互いに深く関わらないということなのだろうか。中国では、実のところ多くの友情というものは貸し借りを通じて発展していく。そして日本では、人々は礼儀により互いに境界を設けており、一見礼儀があり付き合いやすそうだが、実際は互いに相手の内面まで踏み込むことはとても難しいのである。

そしてこれはエリート教育の発展における必然性に似ている。私は一般的な小・中学校から市の名門高校、そして全国でも一二を争う大学への進学を通じて、人々の社交性やマナーは次第にレベルが上がり、互いの距離は次第に疎遠になっていくということを実感している。激しい競争は優れた第一印象や、自己の高効率性およびefficient relax（能率的リラックス）を求めており、これが完全な礼儀や自己の時間に対するハイレベルな把握をもたらし、それに日本の伝統文化の影響が加わることで日本のこうした国情を形成しているのである。

これが良いことなのかどうかは何とも言えない。しかし多くの人は、言葉遣いが悪く横暴な人よりも、規則正しくその場を弁えた立ち居振る舞いをする人をより好むであろう。だからこそ、日本の礼儀というものについて中国はさらに沢山学んでいかなければならないのである。

**大学名： 北京師範大学**
**氏　名： 陶悦**

**テーマ： 3.マナーのよさと思いやり**

日本語を学ぶ以前から私は日本人が礼儀を重んじることについて多少耳にしていた。そして日本語を学んだ後、こうした印象は日増しに強くなった。そして今回、私はついに日本の地で純和式の礼儀の雰囲気を体験できることとなった。

私が日本人から受ける最も大きな印象は、その細やかさで、彼らの他人への心遣いもまた非常に行き届いている。ちょっとした例を挙げると、日本のトイレ（トイレを例にするのは、日本のトイレがとても好きだから・・・）には水の流れる音を発する装置である音姫が備え付けられている。日本人は自分が用を足す際の音を他人に聴かれることで他人に迷惑を掛けたくないという思いからこうした独特の製品を作ったのであろう。

ホームステイの二日間においても、私は日本人特有の細やかな気遣いを感じることができた。ホストファザーとホストマザーは辛いものが苦手ということであったが、私が辛いものがとても好きだと聞いて、ホストファザーがわざわざ自ら厨房に立ち、家にある辛い食材を使った麻婆豆腐を作ってくれたのである。ホストファザーが作った麻婆豆腐はとても美味しかった。そして彼のこうした気遣いに、私はとても感動させられた。

この他には、エレベーターに乗った後、ドアの開くボタンを押し続けて後から乗る人がスムーズに乗れるようにする、エスカレーターでは片側に立ち、急いで通る人のためにもう一方を空ける、電車内では電話を掛けずまた大声で話をしない、デパートなどで不注意で他人にぶつかってしまった際には一声お詫びをするなど、これらは一見些細な事だが、正にこうした些細な事が日本人の他人への心からの思いやりを表しているのである。

今回の日本訪問により私は少し変わることができた。中国には「己欲立而立人、己欲達而達人（己立たんと欲して人を立て、己達せんと欲して人を達す）」という古語がある。自分の事だけに固執するのではなく、他人をより思いやることで、社会全体がより素晴らしいものになっていくと思う。

**大学名： 北京師範大学**
**氏　名： 劉迪**

**テーマ： 6.今後ますます中国でニーズが高まる技術**

気が付くと、私たちはすでに日本で8日間の時間を過ごしていた。この8日間において、私たちは歴史ある著名な都市である大阪、賑やかな都市である名古屋、風光明媚な箱根そしてせわしい首都の東京などの場所を訪れた。東から西、南から北へと日本の各都市はいずれも北京とは異なる透明感を醸し出していた。今の日本は少しの汚染もない国だと言える。

四日市ぜんそくや水俣病そしてイタイイタイ病を経験した後、日本はそうした現状の改善を決心した。つまり資源豊かな「金山・銀山」のみならず生態環境が整った「緑水青山」も追求するということである。そしてさらに狭い国土面積と乏しい資源が日本人の科学や自然を尊重する理念を育んだのである。

日本では大小様々な企業があらゆる方法を尽くして資源を循環利用している。例えばパナソニックエコテクノロジーセンターでは、使用済家電を回収した後、その家電内部の利用可能な金属を取り出し新たな家電製品を産み出している。そしてトヨタのハイブリッドカー。さらにホテルニューオータニの生ごみ回収システムでは化学肥料を作り農家に提供している。省エネはすでに日本人にとって一種の習慣となっている。そして科学技術は彼らにとって、自然をより素晴らしいものにする手段であり、利益を得るための仕事ではないのである。

中国は今まさに経済体制改革における産みの苦しみの時期にある。経済をより持続可能で健全に発展させるために、私たちには環境保全など第三事業の発展というサポートが必要である。中国の市場は大きいが、資源には限りがあり、いつか枯渇する日が来る。私たちは準備を怠ることなく、環境保護や資源節約をスローガンとするだけでなく、それ以上に社会的な習慣としていかなければならない。

**大学名： 北京師範大学**
**氏　名： 賀婷雅**

**テーマ： 2.集団帰属意識の強さ**
**3.マナーのよさと思いやり**

訪日以前から私は日本の集団帰属意識に関する見解を聞き、そしてまた文章を見たりしていたが、それはどういった帰属感なのかについては完全には理解することができなかった。しかしこの「走近日企」という活動は、私たち中国の大学生が自然な形で日本を知り、さらに日本の集団帰属意識について認識できたという意味で、本当に貴重であった。ホテルニューオータニでの見学の際、解説のスタッフの誇りに満ちた語気、活力に満ちた姿、大きくて響く声は、すでに彼の仕事への情熱や自分の属する会社への帰属感や共感を示していた。そしてホームステイ先のおとうさんの車は自分の勤務先（トヨタ）の車であった。またその他の交流の際にも、ほとんどの場合彼らは自社製品を使い、さらに自社に関係のある場所で買い物をしていることに気が付いた。誰も退勤後もこのようにするよう要求してはいないのだが、日本人には自分の仕事、自分の会社、社会、国との共通認識や帰属感がある。多くの場合において彼らは、自分自身が個人というよりも、自分の会社や社会そして国を代表していると感じているのかも知れない。

日本での8日間では、終始日本人のマナーや他人への思いやりを感じることができた。それは料理を出す際にゲストの利き手に基づきどちら側から出すかを決める、また一度眉をひそめただけで冷たい水を好まないことに気が付くというほどである。こうした細やかさは毎日の人付き合いと物事に接する態度から公共スペースにおける様々なつくりや利便性にまで活かされ、これらは人に落ち着きと安心を与えてくれるのである。

**大学名： 北京師範大学**
**氏　名： 蒲飛宇**

**テーマ： 3.マナーのよさと思いやり**

私だけでなく、多くの中国人は日本がマナーを重んじる国だということを知っていると思う。しかし、もし自ら体験しなければ、その印象は強くはならないと思う。

日本では、朝から晩まで、勤務中から日常生活まで、いずれも相応の言葉遣いがある。朝や日中、夜に顔を合わせると、彼らは決まって挨拶をしてくる。他人のサポートを受けた際には感謝を述べる。他人に迷惑をかけた或いは他人を傷つけた場合はお詫びをする。客が入店した場合は「いらっしゃいませ」と言う。店を離れる際は「またのご来店をお待ちしております」と言う。食事の前には手を合わせ（必ずではない）「いただきます」と言う。食事の後は「ごちそうさまでした」と言う。電車などの公共スペースでは、静かにしているなどである。だが実のところ中国もそうなのである。だから両国には共通点や歴史的関係があり、また交流できる点が多く存在しているのである。

日本人は他人に迷惑をかけることを嫌い、同時に他人へとても配慮する。これも実はマナーの一部分である。私が大阪城で散策していた際、早朝で人は特別多くはなかったが、その中でも体を鍛えている人の割合がとても高かっ

た。私の後ろでジョギングをしていたとある中年男性が転んでしまい、私がすぐに「大丈夫ですか」と声をかけて助け起こそうとした際、彼はすぐに立ち上がり、汚れを落としながらうなずいて「大丈夫、全く問題ない」と言い残し、ジョギングを再開したのである。ホテル内のエレベーターでは、いつも誰かがドアのボタンを押し続け、その人が最後に乗ったり出たりし、周りの人も次々と謝意を述べていた。レストランのウエイターやウエイトレスはいつも優しく挨拶をし、またカーテンを閉めることで食事の際のまぶしい日の光を遮るなどしてくれた。ホームステイの際は、自分の部屋に戻りドアを閉めると、そこから先はホストファミリーも私に一人の自由な時間を与えてくれた。また狭い道では相手側が常に体を横にし、道を開けてくれた。電車では人々が電話で話し込むことなく静かな環境が守られていた。

私は、これがマナーを守る日本人の姿だと思った。

**大学名： 北京師範大学**
**氏　名： 呂家楽**

**テーマ： 1.国民性についての理解**

8日間の訪問と交流を通じて、私は日本について全く新たな認識を持つことができた。その中でも最も印象深かったのは、ルールの遵守である。これは全体的な特徴であり、国民性と言っても過言ではないであろう。

「ルールを守る」というのは、大体の意味として社会面や法律面からの制約の遵守であり、きまった規則に基づいてそれが行われる。日本はとてもルールを守る。時間への厳しさ、または仕事への厳しさや繊細さそして真剣さを問わず、皆「ルールを守る」という国民性に帰結している。

こうした品性により、日本の製品品質は素晴らしく、世界中の消費者から好まれている。その意味では、我々は日本の国民性に感謝しなければならない。日本文化のその繊細さもまた世界の人々を引き付けている。日本の人材はまたその真剣さにより世界の各分野において活躍している。しかしこれには「度」つまり程度の問題が含まれている。ルールを守るのは確かに利点も多いが、ただしルールを守るがあまり柔軟性を失うことがあっては、その影響は利点だけとは限らないであろう。

一つ例を挙げてみる。科学研究分野において、日本の学者は最初に大量の資料を集め、その後先人の研究の方法やルートを踏襲し、従来の分野を深く掘り下げる場合が多く、別の方法を探る、そして最初から未知の領域の探索をすることはなく、ましてや新たな研究方法については敬遠する傾向にあるが、これはルールを守ることの弊害ではないのだろうか。

国民性の問題については、わずかな文章では言い表すことはできないが、日本におけるこうした明確な諸刃の剣の問題は、中国人として深く考えるべきものである。

**大学名： 北京理工大学**
**氏　名： 居絲薇**

**テーマ： 3.マナーのよさと思いやり**

今回の訪日で印象深かったのは、マナーの良さと思いやりである。

こうした認識は様々な過程を経て形成された。

11月23日の事前説明会の席上、とある日本の大使館職員がお別れの際にお辞儀をしながら数メートル後ずさりした光景を見て、私はとても衝撃を受け、日本人のマナーについて基本的な認識が得られた。

次いで日本に到着後も、日本のサービススタッフのマナーや態度は印象的で、笑顔やお辞儀はすでに一種のシンボルとなっていた。サービス業のマナーや気遣いが業界的要素というのであれば、ホームステイの2日間において私は日本の一般市民のマナーや気遣いを体感し、多くの部分で非常に感動させられた。

ホストファザー以外は中国語を話さないにも関わらず、彼らは私が快適に過ごせるように車内や家の中では中国語の曲や番組を流してくれた。そして日本人は普段冷たい水を飲むが、中国人は普段お湯を飲むということで、彼らはわざわざ私のためにお湯を沸かし、就寝前には水筒にお湯を入れ、私がいつでも飲めるように準備してくれた。

またホームステイ先には1967年製のクラシックカーがあり、私が興味を持ったのを見て、ホストファザーは私を車に乗せてくれた。

こうした事から、日本ではサービス業であれ一般市民であれ、いずれもマナーを重視し、非常に相手を気遣うことが分かった。

**大学名： 北京理工大学**
**氏　名： 王韞**

**テーマ： 3.マナーのよさと思いやり**

日本人がとても礼儀正しいことはかねてから聞いていたが、実際に体験するまでは私としてもそれを断言できなかった。しかし今回の訪日を通じて、私は心から日本人のマナーは素晴らしいと思った。

訪日初日から紹介する。私たちが首都空港の搭乗口から搭乗する際、二人のスタッフが私たちの搭乗を歓迎する横断幕を掲げ、私たちにしきりにお辞儀をする光景を見て私はとても感動した。私たち訪日団は人数的に全体のほんの一部に過ぎないにもかかわらず、彼らはこれほどの準備をしてくれたのである。

日本に到着後、私たちはさらにこうした情熱を感じた。空港やホテル、デパートのスタッフが皆笑顔で応対する以外にも、街中では目線が合えば、皆笑顔で会釈をする。

ホームステイの際、こうした感覚はより明確になった。外出時はホストマザーはいつも荷物を持ち、写真撮影をしてくれて、またトイレに行かなくてよいかなどを私に尋ねてくれた。帰宅後は、夕食時にホストマザーの弟さんが、こうしたもてなしは年に二回だけで、この日は私のため特別に準備したものだと教えてくれた。それから私がパジャマを持参していないことを知ったホストマザーが、わざわざ私のパジャマを買ってくれた。こうした様々な体験により、私は日本のマナーについて深く知ることができた。

日本人の親切さはとても心温まるもので、お別れの際、私の心は感慨に満ちていた。手を振る人たちの姿が次第に遠くの景色に消えていく中で、彼らの優しさが絶えず心にしみ込んできた。

**大学名： 北京理工大学**
**氏　名： 呉玥瑩**

**テーマ： 2.集団帰属意識の強さ**

日本での8日間の訪問が終了した。期間中私たちは6つの企業、2つの大学の他、日比谷松本楼での見学や中国駐日大使館への訪問を行った。今回のスケジュールを通じて最も忘れ難く感動したのは、ホストファミリーと過ごした2日間であったが、最も述べたい事は日本企業における責任感である。

彼らの責任感は、一に企業が多くの教育を担当、二に周辺住民との関係重視、三に環境保全や省エネに対する自

己要求という三つの面に表れている。

まず、私たちが見学した企業では、小学生たちの見学後の作品などが掲示されていた。ハイテク設備が並び、一見重々しい雰囲気の通路にこうした作品を見かけると、可愛い子供たちが色鉛筆で真剣に作品をつくる様子が目に浮かび、心が安らぐ感じがした。

次に、私たちが訪れた企業はいずれも内部は静かであった。工場にとっては絶対的な静けさというのはあり得ないが、それでも各企業は生産時の騒音を可能な限り減らしている。また定期的に周辺住民の代表を招き意見交換をするなど、最大限周辺住民への影響を減らし、良好な生活環境を保証している。

最後に、私が最も感銘を受けたのは彼らの環境保全や省エネへの重視であった。パナソニックは資材のより良い活用のため多くの資金を使用済家電の処理に注ぎ込んでいる。トヨタは環境に優しい新エネルギー自動車（利幅が大きくないにもかかわらず）を研究開発している。三井物産は中国西部の緑化構築の支援を行っている。イトーヨーカ堂配送センターでは衣類をハンガーに掛けたまま運ぶ方式で段ボールの使用を節約しているなど、各企業は自らが省エネや環境保護へ貢献すべきと考え、またそれらを実践している。

こうした点は中国企業にもっとも欠けていると思う。中国企業は現在大きく成長しているが、その多くは自身の発展のみに目を向けている、或いは利益追求のため「進歩」している。また当然この利益は、彼らの経費を増大させる省エネ・環境保全への転換とは関係がない。私たちは日頃環境が悪い、スモッグがひどい、水質汚染がひどいなどと文句を言っているが、企業がこれまで以上の社会的責任感を持ち、部分的な次世代教育を担い、子供たちに環境保全措置について知ってもらい、企業自身が周辺環境への影響を調整し、さらに自身の生産方式を環境に優しいものにすることで、中国も美しい青空を守ることができると信じている。

パナソニックでの見学時、次のような話を聞いた。私たちはかつて美しい空は有り余るもので、清らかな水や感動的な自然は溢れんばかりの物だと思っていた。しかしこれらは今となっては非常に貴重なものとなっている。私たちは普段、欲しいものはいくらでも手に入れられると考えがちである。だから貴重さがわからず、物の価値も軽視されて浪費される。しかし物の効用を完全に発揮することは人の責任であり、現在、より重要なのは「大切にする」ということである。すべての企業が「大切にする」ことの貴さを理解し、「責任」と「大切にする」を実践することを願っている。

**大学名： 北京理工大学**
**氏　名： 張晨曦**

**テーマ： 6.今後ますます中国でニーズが高まる技術**

日本は技術強国であり、ハードウエアまたはソフトウエアであれ、トイレまたは自動車であれ素晴らしい。そして多くの技術分野の中でも、環境保全技術は世界の最先端にある。

二日目に見学したパナソニックエコテクノロジーセンターでは、たくさんの先進的な除去方法で異なる材質について分類がされていた。その後のトヨタ自動車の工場では、世界でも最先端のエコカーについて知ることができた。またイトーヨーカ堂配送センターでは、最新の物流方式により段ボールの使用を減らしていた。そしてホテルニューオータニでは、進んだ技術によりホテルで発生するごみの100％回収を行っていた。

こうしたことから、異なる分野の工場においても、各自それぞれ資源の回収処理や資源消費を減らす方法が存在していることが分かった。日本のこうした方法の普及度合は世界でも最先端である。これらは常に最悪の事態に備え準備を怠らないという居安思危の表れである。日本という国が資源に乏しいことがこうした部分をもたらした原因なのかもしれない。しかしたとえ中国に多くの資源があっても、いつかは無くなる日が来るのである。そのため、私たちもより環境に優しい発展をし、将来に備えなければならないのである。

**大学名： 北京理工大学**
**氏　名： 趙家樑**

**テーマ： 1.国民性についての理解**
**3.マナーのよさと思いやり**

日中両国のマナーの違いと国民の素養について

日本での8日間で、私は日中両国のマナーにおける大きな差を感じ、さらにメディアなどで日頃言われている中国人の素養の低さの問題について考えてみることができた。

まずこの問題について気が付いたのは大阪大学の学生との交流の時であった。私たちの討論テーマは日中双方の印象で、日本人には中国人の素養が低いという印象があるかという問題について問われた際の日本の学生の観点に、私たちはとても驚かされた。彼らの見方は主に、1. 一部の中国人には確かに割り込みをするなどのマナーの悪い行為が存在する。2. どうすべきかを教えれば、中国人は自発的に行為を正す。原因はマナーの違い。3. 一部の日本メディアは中国人観光客を中傷することに没頭している、というものであった。そして実際に私もこうした点を感じた。中国では右側通行で日本とは逆なため、階段の上り下りやエスカレーターでは知らないうちに反対側に立ってしまうことから日本人の誤解を招いているのではないだろうか。また日本における行列は中国とは異なり一つの長い列となり、最後尾で複数にわかれるが、中国では最初から複数の短い列になる。そのため日本に来て間もない中国人は、そうした事情を知らず複数の列を作ってしまい（私も同様）、割り込みだと誤解されているのではないだろうか。そして私たちのグループ内の中国旅行経験者やホストファミリーからも、ほぼ同じような観点が得られた。彼らは中国人が列車などで、大声でおしゃべりをしたり、遊んだり、食事をしたりするのは一種の文化の表れであって、マナーが悪いということではないと考えている。この点は私のこれまでの観点と大きく異なるものであった。

訪日の最後に、こうした問題について私は色々考えさせられた。国際化のプロセスにおいて、私たちは他国を崇拝しすぎなのではないだろうか。自国の多くの風習は、本当に悪いものなのだろうか。中国が発展をする過程において、私たちが傲慢にも卑屈にもならないことを願っている。

**大学名： 北京語言大学**
**氏　名： 呉継**

**テーマ： 4.日中間の交流**

以下は、大阪大学での交流を通じての私の感想である。

大阪大学での交流を通じて、私は現在の日本人、日本の若者は中国への知識が少ないことに気が付いた。ここ数年多くの中国人が日本を訪れているが、日本人の眼には、中国人は精進を知らずお金を使うことしかせず、考えることや努力をしない人々と映っている。

現在日本人が目にするのは、日本で爆買いをするマナーを知らない中国人だが、今回の交流を通じて、実際のところ現在の日本の若者も、私たちが出会った一世代上の日本人ほどしっかりしているわけではないということに気が付いた。

今回の訪日を通じて、私たちは日本人のおもてなしについて体験することができた。某団員が言うように、彼らサービススタッフが仮に心の中で私たちを軽蔑していたとしても、彼らは少なくともゲストに向けるべき尊重や心遣いを示しており、またそれは誰の心も和ませるものである。

**大学名： 北京語言大学**
**氏　名： 閆良博**

**テーマ： 2.集団帰属意識の強さ**

人々が仕事やお金儲けの場所と考える中国の職場とは異なり、日本の企業は一種の帰属感を体現しており、企業の一員となることは自分と企業が同じ命運でつながれることを意味している。私は正にこの点から日本人の集団帰属意識の強さを感じた。

トヨタ自動車元町工場の見学の際、スタッフの紹介を通じて私たちは元町の人口の7割以上が元町工場の従業員であることを知った。私は、ここでの生活はきっと元町工場での仕事が中心で、元町の一員になる最も重要な条件は元町工場の一員となることなのだろうと思った。

こうした現象は、ホームステイの際も感じることができた。ホストファザーの城谷さんは住友商事の従業員で、普段の生活においても自分の勤める企業への帰属感が表れていた。まず城谷さんは住友商事の紹介をホームステイの一部分として同企業の状況を私に詳しく紹介してくれた。その後城谷さん一家と近所のスーパーへ夕食の食材の買い出しに行った時、近所には多くの住友商事の従業員が住んでいることを知った。そして彼らは日頃住友グループの子会社であるこのスーパーを利用している。そして私の趣味がサッカー観戦だということで、Jリーグの優勝決定戦を観戦したが、家族全員が住友グループがスポンサーとなっているチームを応援していた。

この様に、彼らの企業への帰属感は、企業を一つの大家族として結び付けている。そしてこうした帰属感が国レベルに高まった時に、国が自然とこれ以上ないほど一つに団結するのである。

**大学名： 北京語言大学**
**氏　名： 沈丹**

**テーマ： 4.日中間の交流**

日中国交正常化からすでに40年余り経っているが、両国の友好関係は未だ充分明確とは言えない。歴史問題以外のその一つの重要な原因は双方の交流不足による相互信頼の欠如にある。そんな中、「走近日企・感受日本」の活動は正に交流の機会を提供するものである。私たちは日本を訪れ、日本を体験し、日本の人々もまた私たちを通じて中国を理解するなど、相互理解を効果的に高めてくれるものである。

今回の日程における重点の一つとして大阪大学への訪問があった。大阪大学では、双方の青年が友好的に交流を行った。日中両国は共に漢字を使う国で、伝統的文化においてもその源を同じくする部分が多いが、双方には意識の面において大きな差が存在していた。私たちのグループは恋愛観における日中文化の比較について討論を行った。日本の学生は中国のカップルは関係がベタベタしすぎで、よく公の場所でいちゃついていると考えている。一方私たちも1ヵ月に一度会えればいいとする彼らの考えにとても驚かされた。またこうした違いは恋愛のその他の面にも表れており、もし事前に知っていなければ誤解を生みやすい。この他、ネット上ではしばしば日本人は冷たいとする意見を目にするが、今回のホームステイにおける私の体験はそれとは全く違っていた。福島さん一家は心からの優しさで「外国人」の私を包み、あらゆる面で私を気遣ってくれた。福島さんの奥さんは、私がまだ学生で経済力に限りがあることを踏まえ、買い物の際は数ヵ所を比較・確認してくれた。彼らの優しさやマナーの良さは、決してそうしたふりをしているわけではなく、あらゆる些細な点から感じ取れるものなのである。

日中両国の未来には私たちの努力が不可欠であり、両国の交流は非常に重要なものである。現在は様々な原因により中国を訪れる日本人の数は多いとは言えないが、彼らがメディアによる「中国に対する悪者扱い」の影響を受け

ず、中国の青空を見に来てくれることを願っている。
日中両国の交流と理解には、まだまだやるべきことが沢山ある。

**大学名： 北京語言大学**
**氏　名： 韓璐璐**

**テーマ： 3.マナーのよさと思いやり**
**4.日中間の交流**

今回私は学生の代表の一人として、第19回「走近日企・感受日本」の活動へ参加し、客観的にそして深く日本について知ることで、日本への新たな認識を持つことができた。
まずマナーについてだが、飛行機への搭乗、工場見学、大学での交流、ホームステイを問わず、私たちは日本の人たちの温かなおもてなし、そしてマナーの素晴らしさを感じることができた。他人の立場に立って物事を考え、可能な限り他人へ迷惑をかけない、これは日本人に共通した態度であり、彼らはその考えを日頃から実践している。またこうした考えを次の世代に伝えることで、日本国民の高い素養が次第に形成されていった。
この他、日中両国の交流も日増しに密接になり、民間の経済交流であれ文化交流であれ、いずれも増加傾向にある。日中両国は一衣帯水の隣国で、かつ世界で第二・第三のエコノミーを形成しており、大国と小国の交流と言うよりは、二つの大国の交流と言うべきである。今後も両国が互いのサポートを必要とすることは必然であり、民間交流のたゆまぬ努力の下、両国の関係はきっと新たな段階に入ると信じている。
「学生たちの観た日本」はつまり、細かな部分から両国の違いを発見し、その差を縮めていくということである。そのためには国全体の持続的発展を追求すると同時に、細かな部分もおろそかにはできない。今回は世界的企業について深く知ることができた以外に、人や物事への接し方、環境保全意識などの面でも我が国の未熟な部分を知ることができ、日本のように経済と精神面が共に高く発展するためには、私たちのすべき事はまだ沢山あるということに気が付いた。しかし今回の活動により私たちは両国の差についてはっきりと認識することができ、これは私たちがすでに第一歩を踏み出したと言える。日中双方のたゆまぬ努力の下、中国の未来、そして日中両国の関係はきっとますます良くなっていくと信じている。

**大学名： 北京語言大学**
**氏　名： 陳婧怡**

**テーマ： 2.集団帰属意識の強さ**
**3.マナーのよさと思いやり**

8日間の「走近日企・感受日本」大学生訪日活動において、私は代表団の一人として、これまで中国国内で「見たり」または「聞いたり」した様々な事について実際に体験をした。
集団帰属意識について私が最も印象深かったのは、トヨタ自動車の工場見学の際、豊田市で路上を走るほぼすべての車がトヨタ車であることを知り、さらに解説の人から豊田市の8割の人がトヨタ関連企業に勤めているとの紹介があったことである。同社は本当の意味で「クルマづくりを通じて社会に貢献する」という理念を実現し、街全体がトヨタ車を支持しているだけでなく、多くの人がトヨタの会社に勤めていた。これは一種のグループへの帰属感と言うものであろう。全市民が自分の街で生まれた会社を支援することは、人々の集団意識を物語っている。それから某団員の話で、

彼のホームステイ先で使用している冷蔵庫やテレビそしてエアコンなどの家電製品は、すべてホストファザー自身が勤めている会社の製品であったとのことで、これは会社と従業員の相互信頼を表している。中国の人々もこのように中国産を支持し、民族意識と集団帰属意識を併せ持つようになることを願っている。

中国では、日本のマナーの話になると皆が口をそろえて称賛する。中国は「礼儀の国」を自称しているが、仮に日本も「礼儀の国」を自称してもおかしいことではないと私は思う。ましてや中国国内の一部の業界におけるサービス態度は確かに日本には及ばない。出発初日、私たちは飛行機内で日本のフライトアテンダントの親切なもてなしを受けた。また企業見学や大学での交流を終え、その場を離れる際はガイドの方から車外で見送る人たちへの「ガラス拭き」をするよう話があり、私たちは両手を振って車外の人たちへ別れを告げた。そして彼らも笑顔で私たちの姿が見えなくなるまで手を振って別れを惜しんでくれた。これにはとても感動させられた。そして最も印象深かったのはホームステイである。日本には一家それぞれが一つの湯船で入浴する習慣があるが、ホストマザーは早々に湯船にお湯をため、私を最初に入浴させてくれたのである。そしてホストファザー、ホストマザーとお子さんが次いで入浴した。これには、彼らの細やかな気遣いを感じた。

日本での8日間はあっという間だったが、内容は非常に濃く、私たちは企業、文化、大学、一般家庭などあらゆる視点から本当の日本について知ることができた。私は、日本の様々な文化を自らが体験することで印象がより強まり、帰国後もこうした細かな部分を覚えていられると思う。そして自身の感想などを周りの友人へ伝えることで、日本の優れた文化を知ってもらい、それがゆくゆくは中国の人々の集団意識の強化と他人への接し方の改善につながると思う。これらはいずれも私たちが学ぶべきものである。

**大学名： 中国農業大学**
**氏　名： 呉延淞**

**テーマ： 3.マナーのよさと思いやり**

初めて日本を訪れ、私は日本人の礼儀正しさ、特にサービススタッフの親切さや気配りの素晴らしさを感じた。私たちのバスの運転手さんは、私たちが下車するたびに、「お疲れ様でした」と声をかけてくれたので、私自身も運転手さんへお辞儀をして感謝を示した。これは好循環と言えるもので、とても素晴らしいと思った。だがその後数日日本での様々な体験を通じて、日本の礼儀と言うものは、時に制約が多く、沢山の人がいやいや守っていると感じた。自発的でない礼儀は見ていてとても疲れるし、重苦しいものである。そうして日本人の礼儀というものに対して、これまでとは違った印象が得られた。

大阪大学では、グループ内の中国人留学生との交流を通じて、日本人のマナーについてさらに認識と理解を深めることができた。日本社会における様々な事には多くのルールが存在しており、日本人が物事を処理する場合もこうしたルールや方式に従って行うため、一種の儀式の感覚がある。しかしそれと同時に相応の問題も生まれる。例えば、とあるサービススタッフがその日に機嫌が悪くても、笑顔で客対応をしなければいけない。何をするにも形式が結果よりも重んじられる。例えば日本人は会議好きだが、こうした儀式は全体がまとまり一つのことを成し遂げるには有利だが、同時に日本人が普段からこうした儀式の繰り返しに耐えることで、人本来のあり方への追求や個性の発揮が疎かにされ、日々の生活が重苦しくそして精神的負担の大きなものとなっている。

だからこそ、日本では至る所に居酒屋があり、とても賑わっている。一日の仕事を終えた人々がストレスを発散し、自分自身を取り戻すのである。日本人はお酒が入ると人が変わったようになり、思いも寄らないことをしたりする。個人的には日中両国の方式には一長一短があり、互いが補い合い両者のバランスをとることが最も賢明な方法で、柔軟性と余裕を持つことが大切だと思う。

**大学名： 中国農業大学**
**氏　名： 張洋中正**

**テーマ： 3.マナーのよさと思いやり**
**6.今後ますます中国でニーズが高まる技術**

8日間の日本訪問が終わった。この8日間で私たちは日本の生活や文化を様々な角度から体験し、日本の実状について知ることができた。日本への印象は人それぞれかも知れないが、ここでは今回の訪日における自分自身の感想を述べたいと思う。

日本に対する第一印象は人々が親切で、心から他人を思いやるということである。訪問先を離れる際の「ガラス拭き」、出会った際のこんにちはと、お別れの際のありがとう、これらの言葉は私たちの心を和ませるものである。日本人はまた常に他人を思いやる。ホームステイの2日間、ホストファザーは私の行きたい場所へ車で連れて行ってくれて、しかも何か私が興味を持つと、試してみるかと聞いてくれた。こうした優しさに私はとても感動した。

この他、日本の企業における社会的責任はとても高いものがあった。見学した各企業において最も耳にした言葉は省エネと環境保全であった。多くのメーカーでは、省エネや環境保全、リサイクルの方向性により企業自身が持続的な発展をしている。それに対して、中国ではこうした面の取り組みが不足しており、意識もまだ普及していない。日本企業の技術革新は今後次第にこうした環境保全の理念を中国にもたらし、そして中国の省エネや環境保全の技術の発展につながるものであり、これは中国の政府、企業そして人々も期待する変化だと信じている。

日中両国の交流は今後さらに深まっていく。未来の架け橋は私たちにかかっている。私は日中両国の関係はますます良くなっていくと信じている。

**大学名： 中国農業大学**
**氏　名： 高潔**

**テーマ： 3.マナーのよさと思いやり**

日本のマナーや思いやりは様々な角度から見ても気配りがとても行き届いている。以下にいくつか印象を述べる。

1.マナーに関して

① 東京へ向かう飛行機への搭乗の際、歓迎の横断幕を掲げたスタッフが学生それぞれに挨拶をしていた。
② 「礼儀あるお別れの文化」、お別れの際は手を振って別れを惜しむ。視界から消えるまでその人を見送る。
③ 銀行では、書類記入の場所に3タイプの眼鏡が顧客用に設置されていた。
④ エスカレーターでは左または右に一列に並ぶ。お風呂で身体を洗う際は座ることでお湯が他人へかからないようにする。
⑤ 常に「お邪魔します、ありがとう、いただきます、美味しい、ただいま」などを口にする。
⑥ 買い物時の会計ではお金を指定の受け皿に置き、レジスタッフは商品を種類毎に包装する。

2. 思いやりに関して

① 伝統的な礼儀が長く受け継がれている（ルールの慣れと幼少期の教育による感化）こうした踏襲は機械的また自然的なもので受け入れられやすい。なぜなら昔からこのようにしているため、たとえ自発的精神による行いではないとしても、正しい行いは正しい結果をもたらす。
② 日本人に受け継がれる「他人へ迷惑をかけない」という考えは、個人個人が自分のすべきことをするということ。つまり秩序立っている。

③ 日本人に受け継がれる「責任感」、特にサービス業。各業界の発展モデルに共通する特徴は、すぐに次の発展を目指すのではなく、水平または下向きに細やかな気配りの大きな基礎を構築する。こうした業界意識により、サービス業はますますきめ細かいサービスが可能になり、発展するほど細やかになるというのは当然の流れだと言える。

④ 日本人に受け継がれる「謙虚と敬天愛人」の心。

⑤ 国民の高い素養＋自律。私にとって日本の印象は、穏やかで終始細心の注意を払っているということである。あらゆる部分に垣間見られる思いやりは驚くべきものである。日本のマナーや思いやりとは、強い自律によりもたらされる人々の関係性の薄さと、古い認識の踏襲への固執に近い継続が共に作用した結果である。いかなる原因や作用の結果であれ、これは私たちが学ぶべきものである。だが我が国の現在の情勢からは、まだ先が長いと思われる。

**大学名： 中国農業大学**
**氏　名： 彭興偉**

**テーマ： 3.マナーのよさと思いやり**

今回の訪日では、日本の「マナー」について実際にこの目で見ることができたと思っている。訪問先の企業や大学ではとても手厚い歓迎を受け、バスで見学先を離れる際は、天気の如何に関わらず、彼らは皆私たちが視界から消えるまで別れを惜しんでくれた。こうしたマナーは普段の生活でも至る所で見られた。ホテル内でエレベーターに入る際、彼らは皆「すみません」と言い、地下鉄では人々は互いに頻繁に会釈をしていた。

ホームステイの2日間では日本の一般家庭、特に他人への思いやりについて一定の理解をすることができた。小倉さん一家は私のスケジュールを知っていたので、実際に会う前日も彼らから、スケジュールがタイトなのでしっかり休息をとり、身体に気を付けるよう私にメールが来ていた。小倉さん宅に到着し、私は自分の眼が乾いていることに気付いた。そして小倉さんの奥さんは、昼食後神社を散歩し、近くのスーパーで買い物をしてから帰って休もうと提案してくれた。これには私はとても感動した。2日目の朝はぐっすり眠る事ができ、10時近くになってようやく目が覚めた。少し申し訳なかったが、小倉さんは「良く眠れたようでよかった。今日のスケジュールはそれほどきつくはないから、ここではリラックスしてほしい。」と言ってくれた。そのため小倉さん宅では、本当の日本人家庭の週末を体験することができた。お茶やピアノなど、それぞれが自分にとって心地良いものであった。

それからもう一つ。私たちが車を路肩に止め、小倉さんたちがクリスマスプレゼントを買いに行った時、奥さんと娘さんたちが突然車の窓を思いきり叩き始めた。私はてっきり知り合いでも見かけたのかと思っていたが、実は携帯電話を見つめ下を向き歩いている学生に対しての注意喚起であった。その時私はふと、あちこちの道路で見かける「携帯電話を見ながら道路を渡らない」の標識を思い出した。これは「知り合いではないが、共に支え合って生きている」という言葉が裏付けられたとても感動的な出来事であった。

**大学名： 中国農業大学**
**氏　名： 雷超**

**テーマ： 5.アニメなどのソフトパワー**

知っての通り、日本のアニメ産業は発達しており、世界でも大きな影響力を持っている。そして私自身もアニメが好

きで、小さな頃から日本のアニメの影響を受けてきた。今回日本を訪れるにあたり、アニメ文化を体験したいというのが私の大きな願いの一つであった。

東京に着いてすぐ私は友人らと秋葉原へ向かった。ここではアニメ産業のビジネス化の高さを感じることができ、その興奮は言わずもがなであった。

私はアニメとは絵画や彫刻のような芸術で、思想を表現し、世界を反映する重要な手段だと思う。特に日本のアニメは、より私にそうした印象を与える。

例えば、法政大学の王敏教授のお話を通じて、私は宮崎駿監督のアニメは人と自然の関係を表現していることと、日本における森林の大切さについて知ることができた。また「神のような作品」と例えられる新世紀エヴァンゲリオンの思想は計り知れないほど深く、こうした思想を強調した作品は作者が心血を注いで表現したいものであり、こうしたアニメを見ていると作者の意図を強く感じることができる。

この他、東京ではアニメ文化が至るところで垣間見られた。印象深かったのは3メートルの大きさのガンダムと様々なアニメ関連商品のショップであった。東京では「幼いころの思い出」を至る所で目にすることができ、これにも私たちの幼少期の成長におけるアニメの影響力の大きさが表れていた。

逆に中国では、アニメ産業はここ数年進歩をしてきたが、その発展のスピードは依然として緩い。ここで私は中国のアニメが日本に学ぶべきいくつかの点について話をしたい。最初は、著作権の尊重である。日本で私は作品自体が非常に保護されており、閲覧や観賞には一定の費用を支払うことを知った。対して中国では無料で作品観賞をすることが一般的で、そういった点を改善して作者自身に良好な生存環境を提供する必要がある。そして二つめは独創性である。中国のアニメは画風が日本と似ていて、ストーリー等は昔から代わり映えせず、目新しさがない。三つめは中国のアニメの対象年齢が低く、青年や大人向けの作品がほとんどないが、日本では、中年の人でもアニメに大きな情熱を注いでいる。

中国のアニメ産業は小さくはないが、その中にはお金もうけを目的とした低レベルのアニメが多く存在しており、真に大衆の記憶に残る優れた作品は非常に少ない。全体として見れば、バブルの要素が大きく見かけ倒しだと言える。

**大学名： 国際関係学院**
**氏　名： 王蓉**

**テーマ： 3.マナーのよさと思いやり**

8日間の訪日活動は、あっという間に終わりを迎えた。日本では、その綺麗さや便利さなど多くのものが私を引き付けたが、中でも最も印象深かったのは、日本人の思いやりである。

訪日二日目、ホテルニューオータニ大阪での朝食の際、私は食後にコーヒーを飲もうとコーヒーが置いてある場所に行ったのだが、そこにはコーヒーカップが置かれていなかった。その時丁度一人の中年女性もコーヒーを飲もうとやってきたのだが、私たち二人ともコーヒーカップを見つけることができなかった。その後、その女性は離れた場所にコーヒーカップが置いてあるのを見かけ取りに行ったのだが、私は面倒になって自分の席に戻った。だがその女性はなんとコーヒーカップを2つ持ち、わざわざ私の席を見つけて届けてくれたのである。これにはとても感動してしまった。本来私は彼女の知り合いではないのだから、彼女は自分の分だけを取るか、或いは私の姿が見えなくなったのだから、そのあたりに置いておけばよかったのに、彼女はわざわざ私の席を探して届けてくれたのである。彼女のこうした振る舞いは、本当の優しさまた思いやりであり、非常に感動させられるものである。私は今でもあの女性の事が忘れられない。なぜならこれは私が日本で最初に体験した感動だったからである。

日本のサービススタッフは中国と比べ本当に礼儀正しく、ホテルのスタッフであれ、またはコンビニの店員であれ、お客に対していつも笑顔でとても優しく接する。彼らの笑顔を見るたび、私は心がとても和んだ。

日本人のマナーや思いやりというものに、私は本当に驚かされたが、彼らとの交流は心温まるものであった。

**大学名： 国際関係学院**
**氏　名： 杜佳蓉**

**テーマ： 3.マナーのよさと思いやり**

訪日期間中、企業の見学を終えてその場を離れる時には、従業員の皆さんがゲートまで出て私たちを見送り、私たちのバスが出発しても彼らは私たちの姿が見えなくなるまで手を振り続けてくれた。ガイドの中島さんが言うには、これは日本人の見送りの際の習慣とのことである。

実のところ、今回の日本訪問以前にも私は日本人のこうした習慣について話に聞いていた。以前「日本大学生訪中団」を出迎えた際、彼らとお別れをする際は、彼らの姿が見えなくなるまで手を振ってお別れをするように先生から話があった。その時は先生の言うとおりに腕が疲れるまで手を振ったのだが、内心はここまでする必要はないと思っていた。

しかし今回日本を訪れ、自分が客の立場となり、日本の人々から同様の温かい歓迎を受けた時、私の心は温かくなり、私たちも知らず知らずのうちに彼らに手を振っていた。これは一見儀式めいたマナーではあるが、実は自分が大事にされているという良い印象を客に与えるのである。これと同じことが日本のサービス業のスタッフにも言える。コンビニの店員からレストランのスタッフまで、皆が客に挨拶をし、親切な対応をする。これが客の気分を良くし、店自体の評判につながるという双方の関係性が構築される。マナーに気を配ることが相手に良い印象を残し、その後の両者の関係にプラスの影響を及ぼし、良好な基礎固めにつながるのである。

**大学名： 国際関係学院**
**氏　名： 曾粤儀**

**テーマ： 3.マナーのよさと思いやり**

今回の訪日で最も印象に残ったのは、教育と人への重視の二つである。

私は広東省の小さな町の出身だが、地元における教育面の資源は乏しく、町には常時閉館している博物館が存在しているだけであった。その後北京の大学に進学し、文化財や旧跡、科学博物館、音楽ホール、芸術センターなど北京の教育面の資源の「量」の大きさを強く認識するようになった。だが今回の日本訪問で私は、日本の教育面の資源の「質」の高さという新たな驚きを体感した。中国の教育は学校と学生が単に努力をしているが、日本の教育は立体的であり、学校、家庭、社会がいずれも人の教育に対してそれぞれの役割を果たしている。大阪大学の学生と共に討論をする際、皆が下書きの紙を囲み、あれこれ討論しながらポイントや考えなどをメモし、最後にそれらをマインドマップ形式にまとめるというやり方はとても印象深かった。学生による独立した思考、団結と協力、意見の発表を促し、「問題解決の方法」を教える、こうした点は中国の大学、ひいては小中高校も学ぶべきものである。また中国駐日大使館の参事官の方との交流において、私は日本の家庭教育の素晴らしさについて知り、自然とホームステイ時の様々なことが思い起こされた。ご両親は子供の自立能力や良い生活習慣・性格の育成にとても気を配っていた。ホストファザーは4歳の娘さんが自分で食べ物を切って食べるよう教え、ホストマザーは子供が遊んだおもちゃを子供自ら片付け、さらに夜9時には寝て朝7時に起きるよう教えていた。そして兄妹はご両親と共に40枚以上の折り紙で風車を作り皆に見せてくれた。これ以外に、各大企業での見学により、日本の社会や教育についての認識が得られた。日本航空であ

れ、またパナソニックエコテクノロジーセンターやトヨタ自動車元町工場であれ、見学した設備にはすべて説明プレートが低い位置に設置されており、さらに可愛らしい手引きの図が描かれ、子供が見学しやすいように設計されていた。これには中国の博物館などの見学場所における「孤高さ」に比べ、日本企業の社会教育への気配りが表れていた。私が育った環境にはこれらの「量」や「質」的条件はなかったが、今後の学習を通じて祖国の未来の教育環境に対し自分なりの貢献をしたいと思う。

日本人の人への重視もとても印象深かった。一つは自分への重視、もう一つは他人への重視である。日本人が自分のイメージを重視するというのは以前から聞いていたが、すべての男性が清潔そして爽やかで、すべての女性の身だしなみがしっかりしていて、歳を重ねても年齢に負けない美しさがある光景を直に目にして、やはり新鮮に感じられた。それに対して自分がなんの身だしなみもなくその場にいることが恥ずかしくなり、今後はしっかり身だしなみに気を使おうと決心した。日本人の他人への重視という感想については、企業見学の際のスタッフを見て得られたものである。パナソニックエコテクノロジーセンターでの最も汚れる仕事である「集塵除塵」はいずれも機械が行っていた。新大阪駅では清掃スタッフは腰を曲げて掃き掃除やごみ拾いをするのではなく、ハンディクリーナーを使い仕事をしていた。箱根のホテル天成園では、屋外の清掃スタッフがシャベルで落ち葉を運ぶのではなく、風を吹き付ける機械（私は、あれがどういったものかは分からない）で落ち葉を一ヵ所に集めていた。あらゆる職業や業務に最も適した作業服があり、従業員の健康を守り、業務を快適なものにしている。日本は従業員の業務環境の改善に多額の経費を投じている。だが見学時の解説スタッフからは、機械によって良い環境を創り、従業員を大事にすることは会社に良い循環をもたらす。反対に従業員への思いやりを欠き、経費を減らすことは過当競争につながり長期の発展は望めないため、日本企業のこうしたやり方は必然であり、またそうすべきものだとの話があった。日本の近代化は中国より早く、中国よりも全面的で徹底されている。だからこそ、これまでの日本の成功や失敗はいずれも私たちの貴重な経験である。これから先日中両国の関係がますます良くなり、互いに助け合いながら未来の構築ができることを願っている。

**大学名： 国際関係学院**
**氏　名： 倪話秋**

**テーマ： 5.アニメなどのソフトパワー**

私自身は日本のアニメがきっかけで日本語の勉強を始めたこともあり、ここではソフトパワーについて自分なりの考えを述べてみたいと思う。

まず私は、アニメやドラマ、小説といった作品は、外国人に自国を知ってもらう上での一番ポピュラーな方式だと思う。実際に日本を訪れ、身を以って日本という国を感じているのはごくわずかであり、それでも大部分の人が持っている日本人は礼儀正しく、花見をして、温泉に浸かるといった印象は皆アニメやドラマなどからもたらされたものである。私自身もホームステイ期間中は秋葉原を訪れアニメ文化を体験し、アニメ映画を観たが、日本の若者自体も日本のアニメが好きであるということが分かった。これは私が述べたい第二点である。こうしたソフトパワーは、自国や自国の文化への帰属感を高めるものである。調査によると、日本の若者は自国である日本のドラマやアニメを観る傾向にあり、日本製のゲーム、特にモバイルゲーム、オンラインゲームなどはほぼ日本国内向けに販売されている。しかし、こうした点もまた日本の若者の中国への無関心につながっている。なぜなら彼らには中国との接点がなく、交流の必要がないとも言えるからである。若干上の世代の日本人にとっては、彼らの帰属感の多くは和式の服装や料理などに表れていると思う。この点については箱根で体験することができた。

だが実のところ、こうしたソフトパワーは日本が意図的に発展させたものではなく、文化的な表現方式の発展において、知らぬ間に自身の文化的思想が加わり、そうした文化が世界の若者を引き付けているのである。そのためもし中国が同様にソフトパワーを発展させたいと考えるならば、結局のところ中国自身の伝統文化や民族文化の真髄を再認

識し、その上でドラマなどにおける中国の若者から見てもネガティブな行為や思想を転換し、新たな発展を遂げた、目覚ましく進歩している中国を世界に示す必要がある。

**大学名： 国際関係学院**
**氏　名： 寇家瑋**

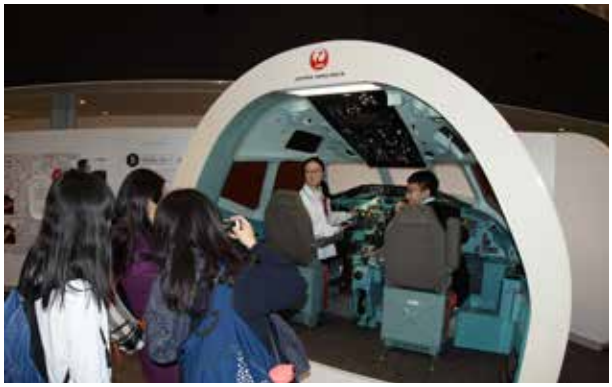
**テーマ： 3.マナーのよさと思いやり**

日本での8日間はあっという間に過ぎてしまったが、生涯記憶に残る沢山の思い出ができた。美しい景色やきれいな空気を堪能できた以外にも、ヒューマンケアがとても感動的であった。

私のホームステイ先のホストマザーは音楽関係の仕事に就いているため、音楽への造詣が深く、私が音楽好きと知るやすぐさまピアノの演奏をしてくれた。そして「花は咲く」という曲の演奏時、彼女は知らぬ間に歌い始め、それを聴いていた私はとても感動してしまった。林さんのアメリカ式の歌声に、この抑揚のあるゆったりとした曲が組み合わさり、それは本当に楽しいひと時であった。私はこれまで誰かが私一人のためにピアノを弾いてくれるとは思いもしなったので、この日のことは生涯忘れないと思う。また林さんは、私が来年東京経済大学に交換留学に行くと知りとても嬉しそうに、林さんの家は学校まで近いので、時間がある時にでもまた家に遊びに来て、と言ってくれた。それから留学先の学校と宿舎にも私に付き添い足を運んでくれた。彼女曰く、これで来年私が自分で東京に来た時でも順調だろうとのことであった。そしてホームステイが終わりお別れの際には、彼女は直筆の手紙と私の家族宛のプレゼントを私に持たせてくれた。私はその時正直思いも寄らなかった。わずか一泊二日のホームステイにもかかわらず、林さんはどれだけの時間をかけてこれらを準備したのか想像もつかなかった。いずれにしても、この一泊二日の触れ合いでは全く不自由がなく、あらゆることにおいて私への配慮があり、色々なことを私に細かく解説してくれた。

林さんは、私の訪日期間における代表的存在である。だが、この8日間の訪問において、私たちが立ち去る様子を見送ってくれた多くの人々の姿も脳裏に焼き付いている。私は、日本人の思いやりやマナーに学び、中国でそれらを広めていきたいと思う。

# 学生たちの撮った写真



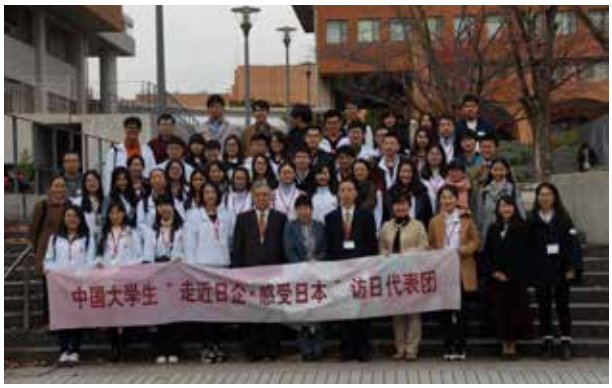
日本航空:コックピットの模擬体験に熱中

日本航空:大きな機体を背景に記念撮影

パナソニック:池本取締役の説明を聴く

パナソニック:リサイクルの工程を学習

大阪大学:国際教育交流センター長　有川教授のご挨拶




大阪大学:屋外の階段を利用して、記念撮影

大阪大学:レーザーエネルギー学研究センターを見学

大阪大学:日中学生で、グループディスカッション中

トヨタ自動車:トヨタ会館にて、ロボット君を中心に、一枚

トヨタ自動車:ホテルトヨタキャッスルで、昼食懇親会

箱根温泉:方言による男女掛け合い漫才に大爆笑

箱根温泉:丹前と浴衣姿で集合写真　この後　入浴です

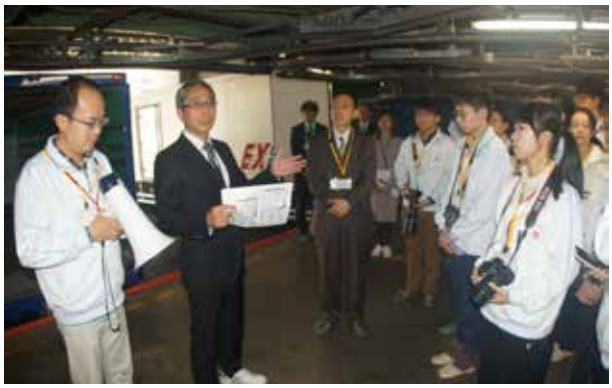
三菱東京UFJ銀行：長谷川東アジア企画部長から歓迎の辞

三菱東京UFJ銀行：大会議室で、記念撮影

三井物産：加藤代表取締役副社長執行役員から歓迎のご挨拶（第一部　研修会）

三井物産：小野常務執行役員人事総務部長の開会のご挨拶（第二部　懇親会）

イトーヨーカドー：浪速運送　長谷川常務取締役の物流講話を聴く



イトーヨーカドー：浪速運送　宮城部長から倉庫内の物流動態を教えてもらう

日比谷松本楼：小坂文乃代表取締役副社長から梅屋庄吉と孫中山の歴史的友情を聴く

日比谷松本楼：小坂副社長も入れて記念撮影

中国大使館：政治部公使参事官　薛剣氏の講話

中国大使館：大使館前で記念撮影

法政大学：正門玄関階段前で記念撮影

法政大学：王敏教授から日中比較文化論の講義

法政大学：王敏教授から王団長に著書（「周恩来たちの日本留学」）の贈呈

法政大学：佐藤課長の司会で懇親会開催

ホテルニューオータニ：地下3階で、ホテルのエコロジーの全貌を学習する

ホテルニューオータニ：ホテルの厨房生ゴミから有機堆肥になるシステムを見学

懇親会：日中経済協会　岡本巌理事長のご挨拶

懇親会：大使夫人汪婉参事官を最前列に、ホームステイファミリーも入って記念撮影

# ホームステイ

赤ちゃん達も参加して家族で一枚

晴天の国会議事堂を背景に、満面の笑み

浅草で和服に着替えて、おみくじを引きました

浅草仲見世探訪　雷門の大提灯を背景に一枚

鎌倉まで小旅行、「おとうさん」と大仏と一枚

江戸東京博物館内で、輪タクの試乗体験

3人のお子さん達と写真に入りました

明治神宮にて着飾った和服のお嬢ちゃんと一枚

桜木町の横浜赤レンガ倉庫まで行きました

浅草から浜離宮まで水上バスに乗りました